みのり文庫

ATHENA アテナ

七鳥未奏 with 企画屋
イラスト：ミヤスリサ



七鳥未奏（ななうみそう）

はじめまして、七鳥未奏です。今回はアテナのノベル化ということで、嬉しくもあり、懐かしくもあり。世代的にはこちらよりもサイコソルジャーになってしまいますが、自分としてはどちらも好きです。やっぱりビキニアーマーはいいですよね。
ゲームシナリオライター集団「企画屋」所属。

企画屋ＨＰ
http://www.kikakuya.info/
ブログ
http://nanaumisou.blog112.fc2.com/

◎イラスト

ミヤスリサ

こんにちは、ミヤスリサです。アテナの赤ビキニをお仕事で描ける日がくるなんて……！
ありがとうございました！
ＨＰ
http://www.kit.hi-ho.ne.jp/dnalab/

カバー：ミヤスリサ

みのり文庫

ATHENA アテナ

七烏未奏 with 企画屋
イラスト：ミヤスリサ



みのり文庫

七鳥未奏
with企画屋

イラスト：ミヤスリサ

ATHENA
アテナ

この本に収録された作品は全て、ＳＮＫプレイモア制作のアクションゲーム“アテナ”をベースに作者が自由な発想、解釈を加え構成したものです。“アテナ”の作品内容に関する公式見解を提示するものではありません。
名称やアイテムの効果、モンスターの設定等、原作とは異なる部分がございます。予めご了承下さいますよう、お願い申し上げます。




ATHENA
アテナ
© SNK PLAYMORE
Illustration：ミヤスリサ


Illustration：ミヤスリサ

みのり文庫

七鳥未奏
with企画屋

イラスト：ミヤスリサ

ATHENA
アテナ

CHARACTERS

アテナ

ビクトリー国の王女にして
本作の主人公兼ヒロイン。
頭を使うことは大の苦手だが、体を動かすことは人一倍得意なお転婆姫。教育係のオババの授業から逃げ出しそのまま、『あかずの扉』から幻想界へ冒険の旅に出ていってしまった。
すべては、ドキドキワクワクのために！

ちなみに、
歳を重ねるごとに発育していく身体と無駄なお肉に、少し心を痛めている。



ヌーパー

幻想界でアテナが初めて遭遇したモンスター。みずからをダンテと名乗る変わったスライム。成り行き上アテナと行動を共にしていく。



ロゼ

洞窟の世界で暮らす少女。冷めた考えを持ち、口調も表情も無感情。ひとりではどうする事もできない悩みを抱えている。アテナ曰く、マセガキ。



ティターン

ダンテの城の地下牢に幽閉されていた謎の美人。ヌーパーとなにやら親密な関係にあるようなのだが……。

•INDEX•

プロローグ
…007

第一章
アテナ、戦います！
…023

第二章
洞窟の世界と操られし巨人
…067

第三章
海の世界と追跡者
…113

第四章
地獄の世界と捕らわれし美女
…155

第五章
夢のある世界
…193

エピローグ
…233



ATHENA'S WONDER LAND

プロローグ

大人になんてなりたくなかったし、お姫様になんて生まれたくなかった。
お姫様は人の前に立つという性質上、人の集合で恥をさらさず済むような教養や振る舞いが求められる。
帝王学、魔法学、経済学、宗教、倫理、言語学等の知識。物腰が柔らかく、他人の意見を聞きながら、自らを表現できる才覚。生まれながらにして人の前に立つと決まっているが故、幼き頃から多くを求められるのだ。
と、オババに言われたことをそのまま語ってみたけど、その意味は良くわかっていない。わかっているのは、私、ビクトリー国王女アテナにとって、それらすべては退屈で、くだらないものだということだけ！
「ねーオババ。こんなお天気のいい日にお部屋にこもってお勉強なんて、気が触れているとしか思えないわ。ピクニックにでも出てみない？」
「出ません。今はお勉強の時間でございます」
「そうだ、最近ビクトリー森林の奥で、サクラっていう珍しい木が発見されたと聞いたわ。なんでも、ピンクの綺麗な花びらを咲かせるらしいの。ねね、見に行かない？」

「いいですか、お嬢様。お嬢様はいずれ、この国を背負って立つことになる人間なのです。しっかりとした素養と、懐の深い人格、そしてなにより、自らを制して大切なことを優先させることのできる忍耐、理性。お嬢様は、少々それらが欠けておられます」

講堂に並ぶ木製の長机、そこにたった一人ポツンと座る生徒、それが私、アテナ。

「国なんて男に任せておけばいいじゃない」

「そういうわけにはいかないのです。そんなことでは、大人になった時困ります」

むー……そんな面倒ごとは嫌いなのにな~。

「大体、私、大人になんてならないし」

「皆いずれは大人になるものですよ」

ずっと子供の世界があったらなぁ。大人は嫌いだ。疲れているし、面白くなさそうだし。ずっと子供のままがいい。大体大人ってものは、得てして肝心の夢がなさそうな印象があるから。まったく、私はきっと生まれてくるところを間違ってしまったのよ……

最近、そんなことばかり考える。

誰が好んでお姫様なんかに生まれてくるものですか、と。

「あーあ、こんな息苦しい家に生まれなきゃなぁ。最近、真剣に自分の運命を恨んでいるわ。お父様とお母様のバカぁ。勉強だって厳しくしちゃうし」

「お嬢様、あまりそういうことを言うものじゃありませんよ？　王様も王妃様も、アテ

ナ様のことを大切にしているからこそ、厳しく教育なさっているのです」
「でも、油断したら娘のお風呂を覗いてくる父親なのよ？」
「その部分だけは心中お察しします」
あーもう、考えれば考えるほどイライラとしてくる。そもそも、お父様とお母様は、なんで私を女に産んだの？　まずそこがわからない。運動をするのに邪魔な二つのお胸に、定期的に訪れる身体の鈍りと。ろくなことがありゃしない。
考え続けるうちに、段々と自分が両親に嫌がらせを受けているんじゃないかという被害妄想と、とりあえずそこから逃げ出したいという衝動(しょうどう)に駆られた。そうだ、それもこれも、こんな天気のいい日に室内で勉強なんてしてるのが悪いのだわ。そうだわ、そうに違いない。
「オババ、私はね、今を大切にしたいと思ってるの」
パタン。
机の上に開いていたノートを閉じる。机を挟んで数メートル、教壇(きょうだん)に立ちチョークで数式を板書していたオババに向かって、こう言い放った。
「堅苦しいお家のことやお流儀よりも、夢が大切。あれが見たい、これがしたい、ドキドキしたい、ワクワクしたい。今しか見られないたくさんの世界を、この眼に焼き付けたい」

私は続けた。人間、毅然とした態度で立ち向かうべき時がある。
「人生は有限なの、そして掛け替えのないものだわ。どんなに綺麗なダイヤだって、時の輝きの前にはかなわない。ねぇオババ、私はこんなところでくすぶっている女じゃないわ」
「そうですね、人生は有限ですし、お嬢様はいつまでもこの程度の問題でくすぶっているお方ではありません。さぁ、早く教科書を開いて、この数式をマスターしましょう」
カツカツカツ。オババはアテナの言葉に耳を貸そうともせず、板書を進めた。
相変わらず頭の硬いお人！　ダイヤより硬いんじゃないかしら⁉　口で言って聞かないなら――。
私は、講堂出口までの経路を確認し、脳内でそれをトレースすると、オババがこちらを向いてないことを確認して――。
ダッシュ！
「⁉　お嬢様⁉」
一目散に、講堂の出口へと向かって走る。
「オババ、私はね、世界一のドキドキを見つけたいの。とっても楽しいこと、トキメくこと。そのためには、こんなところでゆっくりしてなんていられないんだから」
私は、転がるように講堂の外に出た。

「お嬢様！　お待ちくださいませ、お嬢様！」
　人型のレリーフが彫り込まれた、豪華絢爛な金色の柱。それらが立ち並ぶ大理石の廊下に、カツカツとせっかちな足音の二重奏が響く。逃亡者である私と、追走者であるオババの靴音だ。
「待てって言われて待てるわけないでしょ！　こんなどうしようもない知識よりも、もっと大きな夢を見たいの。沢山のワクワクを探しに行きたいの！」
　逃亡者である私は、ここビクトリー王国の王女、プリンセスアテナ。明るく快活で、ちょっとお転婆なところが売りの女の子。お腹のお肉のことを指摘されると怒り出すお年頃でもある。でも、仕方ないじゃない。白いご飯が大好きなんだもん。
「そんなこと言わずに！　私が王様にしかられます！」
　私を追いかけているのは教育係のオババ。小言が多くて、仕事熱心。最近めっきり白髪が増えてきたのは、もしかして私のせいかしら？
「と、に、か、く。私は座学なんてもうこりごり！　我慢の限界なんてものじゃない、臨界よ！　りんかい線よ！　そういえばオババ、コミックオリンピアの開催は来月だったかしら？」
「ええっとそうですね、来月の三連休は――って、それはどうでもいいんです！　いいからお嬢様、いい加減大人しく勉強に戻られてください！　そもそも我慢の限界って、

毎日こうやって逃げ出してるじゃないですか」
「私の我慢は毎日限界を迎えるんだもん。オババこそ、いい加減諦めてくれたらどうかしら？」
ふふん、オババはもう疲れが見えてきてるのかしら。それに対してこっちはまだまだ余裕があるわ。だったらここらで一気に突き放して――。
私は一気にペースを上げた。しつこいオババを振り切るのは、いつものパターン。
――だけど。
「ネプチューン、お嬢様を捕まえて！」
「げげっ！」
私の進路をさえぎろうと、通路の物陰から金髪の優男が現れる。逃亡を予測したオババが、伏兵を用意していたのだ。
「じゃっじゃじゃーん！　ビクトリー城で一番強い男、ネプチューン参上ですよ？」
くたびれたバンダナにぼろぼろのジーンズという、三次元世界的には流行遅れなファッションを身に纏ったのは、三次元世界に名を馳せる強者ネプチューン。
服装や言動は果てしなく軽いが、武術の達人で、この城での腕は言葉通りトップクラスだった。
「とにかく、そこをどいてネプチューン！　私は止まるわけにはいかないの」

「おっと、それはできないなぁ」
廊下の先でネプチューンはバッと両手を広げ、身構える。
もうっ！　なんて邪魔な奴！
とはいえ、ここで立ち止まるわけにはいかない。後ろからは小言の多い靴音が、速度を鈍らせながらも迫っているわけで。であれば、この場をどうにか突破するしかない。
が、ネプチューンは強い、私はそのことをよく知っていた。どのくらい強いかというと、この城の兵士が束になってかかっても多分勝てないくらいだ。私だって、倒すことは勿論、逃げおおせることすら難しいだろう。
なんといっても、私の持っている武術は、そのほとんどが幼少時代にネプチューンに仕込まれたものなのだから。
つまり、ネプチューンは私の師匠なのである。
だが、だからこそ私は、ネプチューンの弱点を知っていた。その弱点を突くことにはやや抵抗があったが、手段を選んでいる場合でもない。
「あ、アンピトリテだ！」
「え⁉」
私が指す方をネプチューンが向く。その、一瞬の隙だった。
「フェニックスアタック！」

「ぐ、ほっ⁉」
うなれ、とどろけ、私のパンチ。電光石火の一撃が、彼の腹部を鋭くエグった。ネプチューンはお腹をさすりながら、その場にうずくまる。
「こんな古典的な方法に引っ掛かるなんて、さすがネプチューンね」
「くっ。お嬢様、また一段と腕を……」
「ネプチューン、めんごっ☆」
ネプチューンは、この城で唯一自分より美しい存在として認めているアンピトリテにゾッコン状態だった。その名を聞けば、反射的にそちらを振り向いてしまうほどに。
心の中でネプチューンに謝りながら、その場からずらかった。

・・・

「空色の石なんかじゃなくて、自然な空が見たいのに」
天井に広がる薄い青の大理石を眺めながら、私は溜息を吐いた。
「お嬢様はッ⁉」
「いいや、こちらには。まったく、どちらに行かれたのやら」
追っ手の数が多すぎて、ちっとも先に進めやしないわ。
柱の陰に隠れ上手く追っ手をやり過ごしたものの、この調子では城の外に出ることす

ら叶わない。本日のやり過ごした兵士の総数は、ざっと二桁台。
「オババったら、日に日にやることが過激になっていくわね」
昨日はこれほど多くなかった。兵士達の多くが「またやってるな」くらいの優しい目で、私達の追いかけっこを傍観（ぼうかん）していた。それがどうしたことか、今日は本気で私を捕まえようと迫ってきていた。
「ひょっとしてお父様かしら……」
――まぁ、考えても仕方がない。
だが困ったことだ、先程から城内をグルグルしているだけでちっとも出口に向かえていない。もっとも、相手は私の目指す先がビクトリー城の外だということを知っている。だとすれば、そこにはここ以上の見張りがいるはずだ。
いままでは相手がオババだけだったので、一度部屋を抜け出してしまえば逃げ切るのは容易なことだった。しかし、周囲の力を借りているとなると話は別だ。
だけど、こんなところで立ち止まっているわけにもいかないし、なによりも時間の無駄よね。
「さてさて、どうしたものかしらね。考えなくっちゃ」
城壁を越えるのがいいかしら？　だったらハシゴを調達しなくちゃね。それとも、小屋にいるドラゴンを一匹ほど拝借しようかしら。

そんなことを考えていた時だった。追っ手から逃れるべく歩いていた私は、知らず知らずの間に人気の無い地下へと来ていた。

「あれ？　これは……」

やがて、突き当たりへ辿（たど）り着くと、大きな扉に出くわした。巨大な豚の怪物が扉を抱え込むようなデザインをした、趣味の悪い扉。まがまがしいという表現が的確なそれには、わかりやすく『あかずの扉』とプレートが貼ってあった。幼い頃から決して中に入ることのないよう言いつけられてきた、絶対不可侵の扉である。

確かこの先って、『悪の帝王ダンテ』が君臨する怖い異世界に広がっているとか、そんな話だったっけ。私を怖がらせようとしてオババが語った話だけど、逆に興味深く思ったのをよく覚えている。

「夢のある話ね」

にんまりと笑顔がこぼれた。その先に待っているであろう冒険を想像すると、胸の奥がワッと沸き上がる。そんな気がした。うん、間違いない。

「外に出られないなら内ってね。これぞ灯台もと暗し、ってものよね」

こんな近くにワクワクの対象があったなんて——別に無理して外に出る必要はない。思えば、なんで私は律儀にお父様の言いつけを素直に守って、この扉の向こう側に行かなかったんだろう？

だがどうやってこの扉を開けばいいのか。なにしろあかずと書いてあるくらいだ、押したり引いたりしたものの、やはり開かない。

そんな時だった。

「見つけましたよ、お嬢様！」

「オババ⁉」

「今日こそは戻って勉強してもらいます！」

しまった。どうやらオババが追いついてしまったらしい。

困ったわね。突き当たりなわけだから、当然逃げ場などないわけで。こうなったら正面突破？　もしくは……。

私は扉を一瞥し、そして。

「ねえ、オババ。そういえば」

私はオババの方を振り返るとやや早口に言葉を紡ぐ。

「勉強するにはまず質問、『尋ねることを恥と思うな』とはオババからよく教えられた話よね。うん、そう。私、そういうオババの言いつけは、きちんと守っていこうと思ってるわ。じゃあそんなオババに質問があるんだけど、この扉ってどうやったら開くの？」

「それは、扉に向かって魔法の言葉を唱えるのです。『開け、ゴマ！』と」

「開け――ゴマ！」

間髪を入れず、私は大声でその呪文を唱え、開いた扉に向かって駆け出した。先程のコミックオリンピアの件のように、質問されるとつい答えてしまう、そんなオババの性格を利用したのだ。
「ひえっ」
驚くオババをよそに、私は扉の向こう側へ足を踏み入れようとする。だが、ある違和感に気付いた。扉の向こう側には足場がない――『穴』となっていたのだ。
穴。どこかに落ちる？　いやでも、これはきっと……。
ほんの一秒ほどためらったあと、私は振り返り、とまどっているオババに向かってこう言い放った。
「じゃ、オババ、行ってくるよ……えいっ！」
そうだ、これは冒険への扉だ。空から異世界の少女が降ってくる、そんな逆シチュへと繋がる穴なのだ！
「お待ちください！　お嬢様」
私は意を決し、暗がりの『穴』へと飛び込む。その瞬間ふとオババの方を振り返ると、この穴に飛び込む勇気が持てないのか、暗闇の向こう側でただただ慌てているのがわかった。
「こ、これは……えらいこっちゃ！　お嬢様の冒険好きにも困ったものです！」



もう既に遠くなっていたけど、オババがそう叫んでいるのがわかった。

「きゃああああああああああ！」

ひたすら続いた暗がりを抜けると、そこは一面の青。気付けば私は、大空に身体を放り出されていた。どうやらあの穴は、空に繋がっていたらしい。

「確かに、人のつくった空なんかじゃなくて本物の空が見たいって、さっき言ったけどさ——ぶほっ」

ドレスが舞い上がり頭部に絡みつく。

下半身の下着を露出という、なんとも間抜けな状態になったかと思うと、風圧でそのままドレスが上にすっぽ抜けていった。

「って、ちょっと、これどうなってんのよ、むぐっ……って、わわわわ！」

さらには靴も脱げてしまい、下着であるビキニのみの姿となる。恥ずかしいことよりもなによりも、ただ風の勢いが痛くて寒い。落下の速度は上がっていき、視界は遂に大地を捉えた。

そして……。

ズドオオオオオオオオオン！
けたたましい轟音をあげ、私は頭から地面に衝突し、そのままめりこんでいった。
――な、なにこれ、漫画みた……い。視界は真っ暗だし。
首から上だけ地面に埋まっているのがわかる。きっと外では激しい土煙が舞い上がり、逆さになった私が地に刺さった棒のように見える事だろう。私は両手の平を地面につけると、ヨイショと頭を引っこ抜いた。その勢いで後ろに体勢を崩し、尻餅をつく。私はイテテとお尻をさすりながら立ち上がった。
「もう、汚れちゃったじゃないの」
予想通り、私が落下した部分には小規模なクレーターができあがっていた。これだけ勢いよく突っ込んだにもかかわらずほぼノーダメージなのは、日頃の鍛錬がものをいっているのかも知れない。
「ま、とりあえずは良しとして――んで、ここは」
周囲を見回す。
一面に広がる森の世界。
見たこともない草、見たこともない花、見たこともない木々……。
とにかく、見たことのない、世界。
先程まで抱えていた不安が、輝かしく綺麗な色へと染まっていく。心音が、テンポ良

くステップを踏み始めた。

キュンと突き上がる感覚は、時々スキップにもなっているようでもあった。

「冒険の予感ってところなのかな。夢のある話ね」

――そうして、私の冒険は始まった。

第一章

アテナ、戦います！



ATHENA'S WONDER LAND

「さぁて、と」

この世界に来てやりたいことは決まっていた。この世界を荒らしているらしい悪の帝王『ダンテ』をやっつけちゃうこと。だって、私ってば三度のご飯と同じくらい冒険と腕試しが好きな娘。年頃の女の子なら、悪の帝王くらいやっつけてみたいものでしょう？それって、ロマンに溢れてるしっ。

「うん、夢のある話！　夢のある話だわ！」

大事なことなので、ついつい二回言っちゃった。夢のある、話だわ！

「しかし、そのダンテってのはどこにいるのかしら？」

見渡す限りの木々。うっそうとした森の奥に、手入れなど無縁な自然そのままの細い道が続いている。

んー……ダンテの居所を尋ねようにも人気はないし、どうやらここは森の深部らしいわね？　でも、荒れてるって思ってたけど、結構綺麗なところじゃない？

「不気味な感じでもないし、不思議な感じでもないし？」

道なりに沿って、適当に散策を進める。もしかして、ダンテさんはきれい好きの整頓好きなのかしら。乱れた秩序の中にも、整然としたそれを求めちゃうのかしら。

よくよく考えてみなくても、目的としているダンテさんがどこにいるのかもわかってない状況なのだ。その人が荒らしている世界がある、それだけ。

だけど、それでいい。多くを知るより知らない方が、ドキドキして楽しいじゃない？
ビバ、地図の無い冒険ってやつよ。
それに、どんな危険がやってこようが、なんとかなるに決まってる。だって、旅をしているのがこの私なんだし。
「それにしても、人間はおろか、動物すら見かけやしないわ。どうしたことかしら」
一定間隔に立ち並ぶ木。近くの茂みを調べてみれば、不思議な色と模様をした茸もあった。軽くお腹が空いていたので食べようか悩んだが、幼少時代に食べたニジイロ茸とその後どうなったかを思い出し、茸だけはやめておくことにした。
冒険の手掛かりを求め、ひた歩く。情報だけじゃなくて武器も、それに衣類も手に入れないといけないか。ビキニ一丁で歩きまわるなんて、心許ない上に、万が一にもオババに知れると目一杯怒られちゃう。衣類が脱げ、露出してしまった自分の姿を改めて見直してみる。二つの肉の塊が、歩みに合わせて「ゆよん♪」と跳ねるのがわかった。
うーん、うっとうしい。なんでこんなに大きくなっちゃったかなー。
「小さくなんないかなぁ。身体を動かすのに邪魔だし」
そうだ、大きくなるのはよくない。私は小さいままでいたいのよ。
――とかなんとか思っていると。
「待ちな、そこのお嬢ちゃん」

森の茂みから勢いよく飛び出してくるなにか。
ドスの利いた声を出したそいつは緑色の身体をしていて、それはまるでゼリーのようだった。えっと、俗に言うスライムってヤツだったかしら？　城の周りにモンスターはいないから実物を見るのは初めてだ。図書室の『モンスター大図鑑』で見た記憶がある。
緑色のゼリーなその全身は、私の膝元までないくらい。ジャパン国の名産品『おもち』が焼けた後のような形と、頭部と思わしき場所の四分の一を占める大きくてつぶらな瞳が、とっても……。
「いいか、儂はこの世界の悪の帝王、ダ――」
「か……かわいいいいいいい！」
我を忘れて彼に抱きつき、抱擁（ほうよう）する。なんというかかわいらしさ、いとおしさ！　やばいわこれ、取って食べちゃいたいくらい！
可能ならお城で飼っちゃいたいくらいにラブリーだけど、厳しいお父様は多分許してくれないだろうな。
「って、人の話をちゃんと聞け、俺はダンテ様だぞ！」
「うん、聞いてる聞いてる、あなたはダンテよね。うん、わかってる、わかってるわ。そう、ダンテ――」
って……ダンテ？

「俺は、この世界の帝王、ダンテ様だ！」
「⁉」
その言葉を聞いて、頬に擦りつけていた彼から思わず手を離す。
なに？　ダンテ？　彼が？　このキュートでラブリーな物体が？
「どうだ？　ビビったか小市民！　ビビったのなら大人しく有り金を置いてだな……」
こんな形してて、せっかく可愛らしいペットと出会えたと思ったのに。いや、でも。こう思うんだ、私。
なんという幸運。まさかさっそく出会えるなんて！
「私はあなたに会いたかったのよ！　さぁ、悪の帝王とやら、私に倒されてしまいなさい！」
「え？」
私は、ビビることもなくビシィっと指を突き付けると、そのまま拳を前に構えファイティングポーズをとる。
そしてそのまま、全身のバネを使いダンテに向かって飛びかかった。
「覚悟っ！」
「ちょっとお前、待て、待てってば」
「フェニックスパンチ！」

ダンテが慌ててるみたいだけど気にしない。というかもう止まれないしっ。間を詰め、拳の射程範囲に目標をとらえると、私はそれを繰りだした。

ドゲシッ！

ネプチューンに教えてもらった体術、『ケンポー』を駆使した重たい突き。体中をめぐる魔力を拳に収束させ、瞬間的にパンチの威力を跳ね上げる必殺技だ。

私の拳は、狙い通り彼の身体をとらえる。が、スライムのそれはぐにょりと大きく凹(へこ)んだだけで、てんで効いている様子はない。ゼリー体質なもんだからクッションみたいになって、物理ダメージを緩和しているのだ。

「ちょっと待て、俺はこの世界の帝王、ダンテ――」

「問答無用！」

彼が何か言いかけたけど気にしない。次はキックを繰り出して、彼の右腹部（？）を的確にとらえた。かわいいけど、許して。

「サイコ、キイイイイイック！」

先ほど同様、クッションとなったゼリーが私の攻撃を阻んだが、今度は攻撃をそこで止めたりはしない。ありったけの魔力を足の甲に集めると、そのままスライムを対面上の木に向かって蹴り飛ばした。

思い切り木の幹に叩きつけられ、衝撃で体を四散させるスライム。緑色の破片が辺り

に散らばり、かわいかったはずの彼は若干グロテスクな感じとなってしまう。
やがて、飛び散った緑色のゼリーは徐々に機能を回復していき、ズリズリと地面を這（は）いずり、一カ所に集まり始めた。元の形に戻るため融合しようとしているのだ。
「い、いきなりなにするんだ！」
原形を取り戻すやいなや、口を尖らせ文句を言ってくる彼。
「なにって、私はダンテを倒すためにここに来たんだから……倒して当然？」
「もっと順序ってものがあるだろうがよ！　まずは俺が名乗りを上げて、それでお前が逃げてだなぁ」
「なんで私が逃げなきゃいけないの？」
くだらない予定調和に付き合うために、わざわざ異世界にやってきたわけじゃないわ。私は、もっと強い奴に会いたくて、スリルとかショックとかサスペンスとか、そう言った類のものが欲しくてこの世界にやってきたのだから。
「って、帝王ダンテを倒しに来た……？」
「そうよ？」
「正気で言ってるのか？　帝王ダンテだぞ。あの、泣く子も黙る、残忍で狡猾（こうかつ）な！」
「実はよく知らないんだけど。まぁ、うん。私はこの世界に、ダンテをやっつけに来たの。自分の腕を試すため、冒険するため！　ほら、この世界は荒れてるって話だったたか

ら、そういう怖いのって凄く素敵じゃない？」

「…………」

私の言葉を聞き、押し黙るスライム。

あれ、私なにか、おかしなことを言ったかしら。

「お前はきっと、ダンテがどんなに恐ろしい奴かを知らないのだ。逆らう者は石となり、刃向かう者はむくろとなる。初代帝王から引き継いだ悪魔の力で、何人もの勇者をばったばったと……まぁ、とはいえ、俺様に比べれば大したことないんだけどな」

彼は語った、ダンテの怖いところを。いわく、何十里も先の物音を聞き分けることのできる地獄耳を持ち、いわく、超音波で敵をしびれさせることができ……いわく、剣術の達人で、頑丈な体躯(たいく)は一〇メートル以上。

「だからだな、あいつに刃向かうなんて馬鹿な真似は……」

「ちょっと待って、気になることが」

「なんだ」

「あなたはダンテなのよね？」

「……そうだ」

彼は答える。

「でも、一〇メートルも身長はないし、そんなに強くないような気がするけど？」

大体、怖いどころか、かわいいし。
「…………」
「あなたって、ひょっとして……」
「ギクリ！」
あ、ギクリってわざとらしく言ったわ！
「ねぇ……あなた、本当に帝王ダンテなの？」
急に挙動不審になった彼はその質問に答えず、ただ私から視線を反らした。
なんかおかしいのよねぇ。これで悪の帝王を気取れる世界だなんて、どれだけ住人は弱いのよって話になっちゃう。
「……そ、そうだぞ？　嘘をついてどうするんだ」
「本当のこと言わないと、いくら優しい私でも怒っちゃうわよ？」
拳をグーにして、そう告げる。
「まぁ……聞いてくれ」
「なによ」
「俺は悪の帝王だ、それは間違いない。ただ……」
そこまで言うと、一度呼吸を整えるように深呼吸をして、彼は続ける。
「今はダンテではないんだ。本気を出せばそうなんだが、そもそもあんな奴に負けるこ

とはないというか……でも、今の俺は本気が出ないいんだ。わかるか？　本気を出した俺は強いいんだが、今はそうじゃないいんだよ」
「結局あなたはなにが言いたいの？」
「つまり、今の俺は帝王ダンテじゃない」
ドゲシッ！
私はキックを唸らせ、再び彼を木に叩き付けた。
「――いっつー！」
ゲシッ、ゲシッ。
「ちょっ、踏むな、踏むな！」
あはは、足の裏がぐにょぐにょして気持ちいい。
そういえば私って、まだ素足だったのか。
「だから踏むなって！」
だって、気持ちいいし、嫌がる彼がかわいいし？
ああ、でも良かった。まだ私の旅は終わってなかった。こんな弱い奴を倒して旅が終わりとか言われたって、絶対スッキリなんてするはずがないし。
「それで、どこにいるの？　この世界を荒らしている悪の帝王ダンテは」
「なんだい嬢ちゃん。そんなことも知らずにダンテを……って」

スライムはそこで一度言葉を止めると、なにかを考えるような素振りをした後、こう続けた。
「さっきから聞いてると、この世界その世界あの世界って、ひょっとしてお前はこの世界の住人じゃないのか？」
私は、この世界にやってきたくだり、ダンテをやっつけたいという願望について、自分の生い立ちと強さについてを正直に話した。いわく、私はビクトリー城最強で、ミスビクトリー受賞者で、王女様で、でも肥大化し続ける胸についてはあまり好ましくない、ということ。
ちょっと自慢みたいになっちゃったけど……えへへ。自己紹介なんて、大小はあれ妄想が混じっちゃうものよね？
「そんなくだらない理由で」
「そんな理由とは失礼しちゃうわ。私は真面目なのにっ」
スライムが心外なことを言ったので抗議する。
私には夢があるの。知らないものをたくさん見て、この世界で一番のドキドキを見つけたいの。沢山のトキメくこと、ワクワクすることを探したいの。だから私は、冒険が好き。未知の人々や景色と出会える、冒険が。
とりあえず、こんな失礼なスライムは置いて、散策を進めよう。見た目は可愛いけど、

この調子だと内面は可愛くないわ。現実を知って、幻滅しちゃうと良くない。
「しかしその話を信じると、お前はあの空の上からやってきたということになるな？　それも、ダンテの影響の無い、もっと別の遠くの遠くの世界から」
「そう、あかずの扉を通ってやってきたの」
「ふむ、外世界からの使者か。そうか、伝説の……」
「伝説？　ねね、伝説って何？」
私がスライムに質問を返し、それに彼が答えようとした――そんな時だった。
ザザァ。路傍の茂みが揺れがさつな音を立てると、そこから現れたるは、豚の顔をした獣人。下品にニヤニヤと笑みを浮かべ、手には木製の棍棒を持っていた。
「へへっ、人間とは、こいつはいい獲物だボア。それに、弱そうなゼリーが一匹」
「こいつは……!?」
「ん？　この世界は弱肉強食、弱そうな相手を見つけると、こうやってハイエナが群がってくるんだ」
なんてこと、無茶苦茶じゃない。まさに世紀末。この方々は、自分さえ良ければいいのかなぁ？
「まぁ、中には平和的な奴等が共存しようと、集落をつくっていることもあるが……少なくとも、こいつらはその類ではなさそうだな」

でも、これはチャンスじゃないかしら。今後の旅のことを考えても、得物(えもの)は必要。素手で強敵と出会ってしまったら、負けることはまずないにしても、大苦戦を強いられてしまう可能性がある。だったら……。
私が意気込んで前に出ようとすると、それを遮るようにスライムが前に出る。
「ちょっと待て！」
そうして、まず大声で堂々と。
「俺は、この世界を支配する、悪の帝王だ」
「⁉」
あー、また嘘をついてるよ彼。それを聞いて、豚顔の獣人さんの方は頭の上にビックリマーク。
「お前が帝王、だと？」
「そうだ。俺こそがダンテなり」
そうして、堂々とハッタリを続ける彼。あれあれ、いいのかしら。
スライムの言葉を聞いた獣人さんは、一瞬キョトンとした後、先程より一層顔をニヤつかせて、
「……おいおい、なんの冗談ボア？　お前みたいな弱そうなスライムが、ダンテなわけはないボア」

と言葉を告げた。
「いやいや、俺はだな――」
「ふんっ、大方そうやってだまして俺を驚かせようという魂胆だろうが、そうはいかないボア。大体、なんで帝王ダンテがこんなところにいるボア」
獣人が質問を返す。
「ふん。なんで、だと？」
スライムは、獣人の当然の質問を鼻で笑うと、さもそれが当然であるかのようにこう告げる。
「じゃあむしろ、ダンテがここにいてはいけない理由ってのはなんだ？」
「え？　理由は……ボア」
「ダンテがここにいちゃいけないのかと聞いてるんだ。誰かがどこかにいる、誰かが誰かを愛する、それに必ずしも理由は必要なのか？　否、そうじゃない」
ダダン、と、さもそれが当然の如く、まるで自分が真理であるかの如く彼は主張する。
そして、こう続けた。
「答えなんて、後からついてくるものさ」
「……で、お前がダンテである証拠はあるボアか？」
スライムはその問いに、黙って首を横に振った。

それを見た獣人は下品な笑みを取り戻し、棍棒を握り直す。
「ねぇ、まさかそれで、本当に騙せると思ってたの？」
「力がない時は知恵を使えってな。だが、どうやらあいつらの心は汚れちまってるようだ。相手を疑うことしかしらない」
いやいや、だからそんなハッタリで通用するのかって話だったんだけど……。
「……まぁ安心しなさい。今は私がいるじゃない」
「どうするんだ？」
「折角、武器を持った弱そうな怪物が近づいてきてるわけじゃない？　これを逃す手はないでしょう？」
「武器？」
「あの棍棒、奪っちゃうわよ」
そう言うと私は、迫り来る獣人に向かって拳を構えた。
「なにボアか？　お前が俺の相手をしてくれるボアか？　どうせ相手をしてくれるのなら……」
下品な物言いね。どうやら倒すのに遠慮はいらないみたいだわ！
「たあああ！」
言い終わるよりも、前だった。

刹那(せつな)、私は地を蹴り、豚顔の懐へと潜り込む。
「いッ⁉」
「武器、もーらいっ！」
彼が自分の状況に気がついた時には、もう勝負なんてものは決していた。

「しっかしお前、強いのな」
弱いくせに偉そうなスライム。
「そりゃ、それが売りな私なんですもの」
「でも、見た目はそんなに筋肉だらけに見えないが……全体的に、肉はちょっと多めな気がするが」
「なにか言った？」
「や、いえ、なにも」
今、失礼な言葉が耳に入った気がしたけど、幻聴かしら。
「要は筋肉の使い方なのよ。効率よく力を使い、最大限の威力を発揮する。あとは……そうね、魔力の応用」
「魔力？　ああ、さっきのは魔法か」

「うん、さっきのは魔力で威力を増強」

理論や呪文を覚えなければならない魔法は苦手で、いまだに巻物や魔法石等の補助具を使わないと使用できなかったりするけど、感覚的に行える技術に関しては得意だ。だって、難しい呪文なんかを、暗記する必要がないもの。

「でも、素手だとさすがに限界があるのよね。だから、こうやって武器が手に入ったのは、とっても助かるわ」

棍棒。なんのことはない木製の普通なそれだけど、素手で旅するよりはずいぶんと頼もしい武器だった。

「それ、使えるのか？」

「私を誰だと思ってるの？　ビクトリー国にその人有りとうたわれたプリンセスアテナよ。どんな武器だってお茶の子さいさい。使えない武器なんてないんだから」

「それは頼もしいことだな」

本当は剣や弓矢が欲しいところだけど、この際ぜいたくは言ってられない。

「でも、相手の強さがわからないとやっぱり不安よね。ダンテってやっぱり強いのよね、悪の帝王っていうくらいだし」

「ん、そうだな。あいつは強い。そして、若いが故に非道だ。美徳というものがなく、悪というものがなんたるかをわかっていない」

スライムは、表情を強張らせて語った。どうやら、それ程に強い相手らしい。
でもまぁ、きっと大丈夫よね。私ってば本当に強いし。現にさっきのアレだって。
でも、何故だろう。さっきまではなんともなかったのに、妙に身体がダルくなってきたような気がした。攻撃なんか受けた覚えないのに……五月病？
肩になにかが寄りかかってきてるような。うーん、空気が変わって体調崩しちゃったのかしら。
「どうしたんだ？　執拗に肩をグリグリと」
「ちょっと、なんだかけだるい感じがね～。おかしいのよね、身体の調子は悪くないはずなのに、やる気が薄れているっていうか」
「もしかしたら、夢が奪われてるせいかもしれないな」
「ん？　夢が奪われてる？」
わけのわからないことをこの子ちゃんが言い始める。
「あいつはな、この世界から夢を奪ってしまっているんだ。この世界に存在する夢という夢。人々の持つ『あれがしたいこれがしたい』という願望を取り上げているんだよ」
「なにそれ。どうやってそんなこと」
「各世界にそういう魔法の装置を設置したんだ」
なにそれ、ますます意味がわからない。

「夢を失った人々は、ダンテの部下達に言われるがまま、怠惰に毎日を過ごしている。自衛のための剣を持つことすら忘れ、夢を取り戻そうと立ち上がることもなく、な」
「なんでそんなこと」
「あいつは夢が嫌いなんだ。ただ、それだけだよ」
――夢が、嫌い。
なんだかよくわからないけど、ただそれだけで人々から夢を取り上げてしまったっていうの？
許せない。夢を糧に生きているような私だからこそ思う。人々から夢を取り上げてしまうなんて、どうかしている。夢が無くなって、活力も無くなって……それって多分とっても面白くない。そう、冒険したいって気持ちも無くなってしまう。
ただの好奇心だけでなく、ダンテを討つための理由が私の中に芽生え始めた。
「さておき、先を急ごうじゃないか。急がないと、お前も夢を失ってしまうんだぞ？」
って、えええええ⁉
うわぁ。それじゃ、ボヤボヤしてたら私もフヌケになっちゃうってことじゃない。
「でもでも、ダンテの居所なんて私、わからないし」
どうしたものやら、さっぱり。
「その為に俺がいるんだろ」

困っていると、傍（かたわ）らのスライムがそんなことを言った。
「え？」
「俺も付き合うよ。ダンテを倒すまでな」
突然の彼の申し出に、私は呆気に取られる。
「俺もダンテに用があるんだ。あいつをこらしめて、玉座を取り戻すという、な。ということは、利害の一致って奴だろ？」
「そうなるけど」
「つまり、そういうことだ」
確かにそれは願ってもないお誘い。頼りないけど、彼は私と違ってこの世界のことを知っているわけだし。
しかしこの子、ダンテを倒すって、その腕で？　玉座に？　一揆（いっき）でも起きたら抵抗することもなく死んじゃうんじゃないの？　ハッキリ言って、誰かを束ねるなんて無謀としか思えない。
まぁでも。
「うん！　わかった！」
私は、緑色の彼に抱きつく。
「ちょっ、お前！　また、こら！」

「だってかわいいんだもん！」
こんなかわいぃ生物、旅のマスコットとして最適だ！　勿論ナビとしても！
胸の中で彼が、ベトベトともがいた。
「で、キミ、お名前はなんていうの？」
「あああ、いいから放せ！　俺を放せ！」
彼が本気でイヤがったので、仕方なく離す。
「ぷっ、はぁぁぁぁぁ！　その気味の悪い肉団子に押し潰されるかと思ったぜ」
そう言って、私の胸の二つの固まりを指した。
「私だってこれ、気にしてるのに……」
人の嫌がることは言うなと、習わなかったのかしら。
「私はアテナよ。プリンセスアテナ」
「……俺はヌーパーだ。今は、な」
「今？」
「ああ、もう！　気にするな」
「……？」
旅は道連れ世は情け。
こうして一応に自己紹介を済ませた私達は、ともにダンテのもとを目指すことにした

のだった。

「それはやめろって言ってるだろ。苦しい、息苦しいから!」

「だってぇ、ヌーパーちゃんかわいいしっ」

さっきから、彼が隙を見せる度、私は彼に抱きついていた。いや、だって、本当にかわいいんだもの。これを放っておけって方が無理ってものじゃないかしら?

「ああああああ! かわいいはよせえええええ!」

まぁ、キリが無いし、本気でイヤがってるし、今はこれくらいにしておいてやろう。彼が忘れた頃にでも、また。

私は彼を持ち上げると、自分の肩の上に乗せた。ヌルリ、ヒヤリとしたなんともいえない感触が肩に走る。ちょっと気持ち悪いけど、見た目的には、きっとこれよね。

ヌーパーちゃんもそれには不満を示さない。

「で、ダンテってのはどこにいるの? やっぱり悪の帝王だから、それっぽいお城に住んでるのかしら?」

「地獄の世界だ」

私の質問に、彼は間髪入れずそう答える。

「……地獄の世界？　他の世界にいるの？」
「ん？　ああ。お前、本当に幻想界のことを何も知らないんだな」
どうやらこの世界は、幻想界というらしい。
「いいか？　この世界はだな、多数の世界が連結することによって形成されているんだ」
「連結？　世界が？」
彼は『やれやれ』と溜息を吐くと、でも、まんざらでもない口調で言葉を続けた。どうやら語りたがりらしい。
「今いるこの世界が森の世界。これが一つの世界なわけだが、この他にもたくさんの世界があるんだ」
「どんな？」
「洞窟の世界、海の世界、マグマの世界、氷の世界、砂漠の世界、霧の世界、他いっぱいたくさん諸々だ」
「ふ〜ん」
「まぁ、この世界はあちこちが小さな世界同士で繋がっているわけだな。その中の一つ、地獄の世界、魔王の城にダンテはいる」
つまり国のようなものだろうか。その一つ一つの世界というものがどの程度の広さなのかはわからないけど、つまり国のような感じで世界がいくつも存在している、と。

「まぁ、なんとなくはわかったわ、ヌーパーちゃん」
「さっきから気になってたが、なんだよそのヌーパーちゃんって」
「だってあなた、確かヌーパーって種類のスライムよね。城のモンスター図鑑で見かけたことがあるわ。だからヌーパーちゃん」
「ヌーパーはわかったが……なんで『ちゃん』付けするんだよ」
「それは、かわいいからに決まってるわよ。だって君、かわいいんだもん」
「かわいくない！」
どうやら可愛いと言われるのがお気に召さないらしい。
怒りに震える彼をなだめながら、森の奥へ。
「それにしても、人の気配もなければ、愉快な動物なんかもいない。いるのは気味の悪いモンスターばかり」
「迷いの森の深部だからな。迷いの森に活気があったらおかしいだろう？」
なるほど。なんとなく納得する。
そうよね、迷いの森に人がたくさんいたら、それは変な話だわ。
あれ、でもちょっと待って、必ず人が迷っちゃうような森だったら、そこに人がたまって人口密度が上がるんじゃないかしら？　それとも、滅多に人が来ることもないから、そうなる前に迷った人々は……。

……うーん、考えるのはやめにしよう。
「ところで、地獄の世界っていうのはこっちで合ってるの？」
「合ってるはずだ」
彼は即答する。

先ほどヌーパーちゃんは即答した。そのはずだった。確かに自信満々だった。
「おかしいな」
かれこれ、もう一時間は歩いているだろうか。
「なにがよ」
「道が、わからん」
ここまで来て、彼がわけのわからないことを言い始める。
わからない、わからない、わからないって、なにを今更。
「……つまり、えーと、あれだな」
「うん、あれって？」
「この俺としたことが、迷ってしまった」
ヌーパーちゃん、やっぱり頼りにならないのかしら。

「えええ、どうするの？　私は道なんて知らないわよ？」
「いや、合ってたはずなんだがな。確かにこっちに行けば次の世界に出られて、ダンテのいる城へと……」
「でも、辿り着けないと」
「おかしいな……この森については、俺もよく知っているつもりなんだが」
なんて説得力の無い台詞なんでしょう。
「まるで道が変わっているような、うーん」
ヌーパーちゃんが悩む。えええ、どういうことなんだろう。
「でも、それじゃどうするわけ？　こんなところで遭難？　そんなのイヤよ？　とりあえず、悩んでてもどうしようもないわ」
もたついてると、夢を奪う装置とやらで、私の気怠さは増していくわけだし。
制限時間のようなものに急かされてる以上は、迅速にこの世界から脱出するか、その装置を見つけて破壊する必要がある。
「なんにせよ、わからないならわからないなりに、とりあえず歩くなりし――」
バキッ。
その時、足下でなにかが割れる音が聞こえた。
「――ん？」

何かを踏んだみたいな。と、地面になにかが落ちていることに気付く。
「あれ、これは」
クッキーだ。地面に道をつくるようにクッキーが落ちていた。
「なんでこんなところにクッキーが？」
「変だな」
私は置いていたクッキーを拾い上げると、手で表面を払って口に放り込む。
「あああ！　お前、ちょっとは気をつけろよな！」
「あら、美味しいわよ？　それになんだか、懐かしい味。ヌーパーちゃんも食べてみる？」
「俺はいい。そんな怖いもん食べられるかってんだ。大体、拾い食いはするなと親に躾（しつけ）られなかったのか？」
大袈裟なスライム。
「弱肉強食の世界に生きているモンスターに、そんなこと言われたくないわよ。と、あれ？」
そこで私は気付いた。クッキーがまだたくさん落ちているのに。
道なりに沿って、奥へ、奥へと、様々な形のクッキーが落ちている。
「なにこれ。こっちに来いってことかしら」

そう言いながら私は地に落ちるクッキーを取って食べた。オババの過剰な『物を大切にしなさい教育』のせいで、落ちている物を見捨てて歩くことが困難なのだ。貧乏性にも似た何かが発動して、無意識のうちに拾い上げてしまう。

「わ、馬鹿、危ないだろうが」

クッキーを拾いながら誘導されていく私を、ヌーパーちゃんが咎める。

「とはいっても、なにもヒントなんてない状態なんだし、どうせこっちに向かってたんだし？　仮にこれが誰かの罠だとしても、それならそれで、釣られてあげようじゃない」

「別にわざわざ食べなくても……地べたに落ちてるものだぞ」

「大丈夫、私の胃袋は頑丈だから」

少々の毒でダメになるほどやわじゃない。それに、時々こうやって〝外の〟危ないものも食べて、免疫をつけていかなくちゃ。

「お姫様なら、普段口にするものも上等だろうに」

「そうでもないわよ？　お母様、時々ご飯に軽い毒を仕込んでくるし」

尚も、ヌーパーちゃんが食い下がってくる。

「なにものだよ、お前のお母様は」

「さぁ。私もよくわからないところがあるの。熱心な教育ママなんだけど、『文武両道』をモットーにしてて。毒も教育の為だとか。私の教育に、命を燃やしてる人だから」

「お前の命も燃え尽きそう、だぞ？」
でも、おかげでこうやって、躊躇いなく拾い食いできるわけだし。そんな母親でも、私は嫌いではなかった。
唯一、一日のゲームのプレイ時間に厳しいことを除いては。ちょっとでも破るとゲーム機捨てようとするし、ロムをゴミ箱に投げ捨てるし。
「あんなことしたらセーブが消えちゃうっての！」
「突然わけのわからないこと叫ばないでくれ！　セーブ？　パスワードとか復活のなんちゃらのことか⁉」
ヌーパーちゃん……だいたいあってるけど、古いよ……。
でも、うーん、母親ってなんであんなに厳しいのかしら？

この森は本当に空気が美味しい。高揚した気分が胸を弾ませ、ついつい楽しい歌声が口からこぼれだす。私は昔から、ピクニックが大好きなのだ。
「森の奥には不思議がいっぱい。ごうごう風はお化けの溜息。私有地を荒らす、生きた人間拒みます。黄色の茸は毒印、食べると頭が花畑。食べ盛りな獣達でも、さすがにそれは遠慮します。やっぱらやっぱらやっぱらよー。言ってあげるわ、のーさんきゅー」

機嫌よく歌っていた私の『森の歌』に対して、ヌーパーちゃんがそんなことを聞いてくる。
「森の歌。音楽の授業は嫌いじゃないの、歌は大好きだから」
うん、歌はいい。体を動かす次くらいに好きだ。
「ヌーパーちゃんは、歌って好き？」
「俺は、まぁ、普通だな」
でた、普通！
私は昔から、大人達がよく使う、この『普通』って返事が理解できなかった。
普通ってなによ。なにが普通なのよ。どこに軸があるのよ！
「もう少し具体的に答えられないのかしら？」
「別にいいだろ？　普通なものは普通。普通に好きなんだよ」
主体性のないスライムね。
私は相変わらず地面に落ちたクッキーを食べては歩き、食べては歩き、先に進んでいった。
「ヌーパーちゃんも食べる？」
「俺は後でお腹を壊したくないからな」
「なんだそりゃ」

勿体ないなぁ、こんなに美味しいのに。
「大体、そういうふうになんでもかんでも食べるから、お前はお腹が……」
ギュウウウウッ！
ヌーパーちゃんを拾い上げ、力の限り抱きしめる。
「なにか言った？」
「い、いや、ギブギブ。やめ、息苦しいから、やめ」
反省したようなので降ろしてやると、彼は地面で何度も荒い息を吐いては吸い、吐いては吸い……。
まぁ、反省しているようだから許してやるとしよう。
「でも、この世界って凄いわね。私の世界だと、クッキーってのは材料を組み合わせて焼かないとつくれなくて、道に落ちてたりしないいんだけど」
「この世界だってそうだぞ」
「でも、こんなにも道に落ちてるわ」
「だから怪しいって言ってるんだろうが」
そうして、クッキーを拾い続けること半刻程だっただろうか。森の中のちょっとした広がり。その中央。そこにポツンとそれはあった。
白く光り輝く、小さな鉄製の塔。高さにして二メートル弱くらいかな。それは、なに

かのアンテナのようにも見えた。
「あれがこの世界の夢を集めている装置だ」
「クッキーを拾ってるうちに着いちゃったわね。あれを壊しちゃえば、ここにいる間は安心になるんでしょ？」
「そういうことになるな。夢を奪われる事はなくなるってわけだ」
タイムーオーバーを気にする必要もなくなるってわけね。
「しかし、なんでこんなところに……というかこのクッキー……」
「まぁまぁいいじゃない。無事目的地に着けたんだしさ。きっと妖精さんが落としてくれたのよ」
ひとまずは、超余裕っち？
私とヌーパーちゃんは顔を合わせると、小さく頷いた。どうやら、この短時間でお互いの意思を表情で読みあえるくらいには仲良くなれているみたいだ。
少しずつ、あの小さな塔を目指して歩みを進める。
そうして、塔まであと十メートルか二十メートルか、という距離まで来たときのことだった。
「そこのやつら、待てよ。ひゃひゃはひゃ」
どこからか、不気味な声が聞こえてくる。

「こっちだよ、こっち」
　最初はその声の主がわからなかったが、よく目を凝らしてみると、そこに普通でないものが交じって並んでいることがわかった。
　巨大な樹の幹の中心にイカツイ顔がくっついた、お化けの木。幹から伸びた枝や葉が、まるで髪の毛や腕のように見える。
　足を持たないそれは、ユサユサと巨大な体を揺らしながら鈍重に私たちの前へと出てきて塔に続く道を阻んだ。なにぶん巨木なものだから、森の小道くらいなら簡単に塞いでしまえる。
「それは壊させないぜ」
「え、な、なにあなた！」
「俺の名はハマドリュアス。ダンテ様に森の世界を任されている番人だぁ」
「え……」
　えーと、ダンテの配下？
「時々いるんだよなぁ、夢を忘れきれなかった奴がこの塔を壊しにくる。けけけ、それはとても不幸なことだぁ！」
　そう言うと彼は、身体から伸びる長い枝のうちの二本をしならせ、鞭のように地面を打って見せた。

どうやら、あの二本の枝が手のようになってるらしい。
それ以外の枝は普通に上向きに伸びており、その先には葉がついていて、ボワリと実った葉達はまるでアフロヘアーのよう。
「あ？　お前だな？　俺のナビゲートを邪魔してた奴は」
「なんだこの爺臭いゼリーは」
早速言われてしまうヌーパーちゃん。
「先ほどからおかしいと思ってたんだ。俺の記憶には無い行き止まりが増えてたし」
「そうだ。道を通せんぼしていたのは俺様だよ！」
なるほど、こいつが普通の木になりすまして通せんぼしていたのね。
「一度遠くまで誘導したから、もう帰ってこないと思っていたのにな。ひゃっはー、悪運の強い野郎だぜ」
「なんてセコイ奴」
「こう見えても、無用な戦闘は好まないんだぁ俺は」
「まぁ、ここで引き返せば不問にしてやるが、どうだ？　どうだ？」
紳士的ね。実に紳士的だわ。
「そんなの無理に決まってるじゃない。私にはダンテを倒すという目的があるんだもん」
「なら、ここで死ぬといぃわぁ！　俺の『蛇使い』受けてみやがれ。しゃあああ！」

ハマドリュアスの鞭のような枝が、私の身体に向かって伸びてくる。
まさに蛇って感じ。
「ッ！　そんなもの！」
だが、私は身を横へ投げ、軽々とかわした。
私の肩にぶら下がっていたヌーパーちゃんも一緒に避ける。
「ふんっ、すばしっこい奴だ。だが、いつまでそうやって避けられるかな」
何度も、何度も迫り来る疾風の如し枝の鞭。
確かに、こうやってずっと避けているのは疲れるし、なにより近付けないことには攻撃もできない。
なんとか隙を探さないと。
攻撃を避けつつ、攻め入るタイミングを探す。が、中々それをつかめない。
むー、どうしたらいいのかしら。下手に近付くとあの枝にぶたれてしまうし。
「アテナ、ボーっとするな、くるぞ！」
鞭に注意がいっていた私に、ヌーパーちゃんが声をかけてくる。
「え？」
私は咄嗟（とっさ）にハマドリュアスに目を向ける。
「ごばあああああ！」

「火の玉⁉」
ハマドリュアスの口から火の玉が数発飛んできた。樹から火の玉って！
私はそれを回避するため、地を跳ね後方へと逃げた。
「あなた、それ自分に当たったら自滅でしょ⁉」
「アテナ、今度は下だ！」
ヌーパーちゃんにに言われ、下に注意を戻す。そこには、私を転ばせようと地面を這（は）う、ハマドリュアスの根っこがあった。
「きゃっ！」
気付くのが遅かった。伸びてきた根っこが私の足首に絡みつき、勢いよく宙に引っ張られるや、そのまま逆さ吊りにされる。
「しまっ――」
「アテナ！」
「くくっ、捉えたぜ、お嬢さん。さてさて、どうしてくれようか」
世界が反転して、血が頭に上る。しかもその拍子で、折角手に入れた棍棒を落としてしまった。肩の上に乗っていたヌーパーちゃんも地面に落ちる。
「ちょっと、放しなさいよ！」
「ひひひ、イヤだね」



ピシンッ！
「きゃっ！」
ハマドリュアスの腕が私のヒップを叩く。
「ちょっ、この、なにを調子にのって、ぁっ！」
ピシンッ！
ううう、お尻が赤くはれ上がっちゃうじゃないのよ！
「悪い子にはお仕置きしないとな、ひゃひゃひゃひゃ」
こ、この、どっちが悪い奴よ！　私はアテナよ！
あんた達悪者を倒すために、ここにやって来たんだから！
「ヒャーハァッ！」
ピシンッ！
「あンっ！」
あ、なんだろうこの感情、本当にちょっとだけ快感に……ってそうじゃなくって！
大きくかぶりを振って平静を取り戻す。地面のヌーパーちゃんを見た。
「中々いい眺めだな」
「って、助けてよ！」
「いや、もう少しだけ」

こ、こっちにもエロモンスター……。
ああもう、こうなったら自分でどうにかしなきゃいけないってことね。
でも、縛られてるのは足首だけなんだからこんな状況どうとでも――。
私はその状態でもがき、宙吊りの身体をブラブラと揺らした。
「なんだ？　ブランコか？　抵抗したって無駄だぞ？」
身体をブラブラと大きく揺らし、その、揺れる方向へと重心を傾ける。子供の頃に見た空中ブランコのような要領で、反動をつけ、それを彼に向かって動かす。
「ぬ？」
私を舐めてくれていたおかげで、行動の意図に気付くのが遅れたみたい。
このまま身体を勢いよく、ハマドリュアスにぶつけちゃえば！
「いっけえええええ！　アテナ流サーカスよ！」
バシン！　ボヨン！
「ぐあっ！」
ごつごつとしたお化けの木に体当たりを仕掛けた。ごつごつとした彼の幹に、私の大きなバストを押しつけ、その勢いで跳ね飛ばす。私の足首を縛っていた彼の手は解け、放れた。
地面に落ちた私はすかさず立ち上がると、怯んだハマドリュアスと間合いを取って棍

棒を構える。
「油断大敵。私を舐めない方がいいわよ！」
「ちっ、中々やるじゃないか。だが、結局振り出しに戻っただけだぜ？」
再び彼は、枝の鞭で牽制してくる。下は枝、上は火の玉。
私は再び打開策を考えることにした。
「どうするんだアテナ」
そう言って、私のとこに駆けてくるヌーパーちゃん。
「どうしたものかしら……枝の射程外から攻撃するか、もしくはどうにか隙をつくるか。火の玉を打ち合えしてやりたいけど、棍棒じゃあねぇ……こっちが燃えちゃうわ」
魔法を勉強しておけばと悔やむ。そうすれば遠くから火なり氷なりをぶつけるベタな魔法で攻撃ができたはずだ。でも、勉強嫌いの私ったら、そういうのが絶望的にダメ。簡単な基礎はできても、放出系魔法に必要な呪文なんて、まったく覚えてない。
せめて魔法具か弓矢でもあればと思うけど、無いものを強請ったってしょうがないのよねぇ。今はこれで、この状況をどう解決するかを考えないと。遠くから、もしくは隙をつくる方法。今の私にできて、かつ近くにあるもので――。
と、その時ヌーパーちゃんの姿が私の目に止まった。……そうだ、彼だったら。
「ヌーパーちゃん」

「なんだ？」
　私は、棍棒を利き腕じゃない左手へと持ち直し、右手でむんずと彼を掴みあげると、大きく振りかぶった。
「え？　なんじゃ？　なにをする気だ？」
「この状況をどうにかするには、ヌーパーちゃんの力が必要なの。いいよね、さっき私を助けてくれなかったわけだしこのくらい、ね。だからお願い。私に力を――」
　そして、それをあのお化け木の、幹についた趣味の悪い目に向かって――。
「貸して！　てりゃあああああああああ！」
　投げた。魔法は苦手でも、ピッチングは得意なんだから。
「な？」
　剛速球となり飛んでいくヌーパーちゃんは、狙い通り彼の顔に辿り着く。そして。
　ビシャリ。
「ぬあ！　視界が！」
　四散して彼の視界を覆った。今だ！
　私は棍棒を右手に持ち直すと、すかさずお化けの木に向かって跳躍。今度は棍棒を大きく振りかぶって、
「さっきの仕返しなんだから！　これは私の分！　これも私の分！　全部私の分よ！」

何度も彼を殴打した。

「いっ、ぬあっ、容赦ないなっ、おまっ」

ひらすらどつきまわした末、ハマドリュアスは沈黙した。

★　★　★

「ちっ、まったく世話のかかるお姫様だ」

そんなアテナ達を見つめるように、森の茂みにたたずむ赤毛の男が一人。

「ったくもう、お転婆なのはあの国の王族の血筋のせいなんだろうな。まさしく王妃様の血を継いでいるというか……」

男は、自分にこの命を下した賢い彼女のことを思い出しながら、心の中で毒づいた。

「大体、俺は王に仕えるだけの身であるはず。だが王妃にはそんな理屈通用しないだろうな。王に仕えてる者はすべて自分のもの、そう思っているに違いない」

実質、ビクトリー国は王妃が握っているようなものだから、しょうがないのだろう。

男は手についた土を払う。今回はこの作業が無駄に終わってしまったが、今後彼女が気付いてくれることを願いつつ。

「なんでこんな、わざわざ異世界くんだりまで……」

――ビクトリー国、王の側近にして実力者。疾風のイカルスは、お菓子袋から魔法のクッキーを一つ取り出し口に放ると、木陰からアテナの背中を見送った。

「なぁにぃ。我が国に侵略者だと⁉」
一方その頃、時を同じくして地獄の世界。
仰々しい魔王の間に響くのは、大男の怒鳴り声。その体躯同様に怒鳴り声は大きく、謁見用かと思われる玉座のある広間に響き渡った。名前はダンテ。
この世界を支配している、悪の帝王である。
「相手は誰だ⁉」
「三次元世界、ビクトリー国王女、アテナ姫だそうです」
三次元世界、アテナ姫……聞いたことがある。ここではないどこか、連結する幻想界とはまた、別のところにある外側の世界。そして、そこにあるビクトリー国という国の王女であり、この世界が混乱に陥った時に現れる伝説の……。
優に十メートルはあるかという巨大な体躯を震わせながら、ダンテは興奮してこう続けた。
「小娘如きに何を手こずっておる！　いくら相手が伝説の救世主とはいえど、所詮は小

娘だろうが。ただちに始末せい！」
「ははっ！」
ダンテの怒声が魔王の間に響き渡ると、驚いた部下達は慌ててその場から逃げ出していった。
（そうだ、俺様はこの世界から夢をなくし、悪による平和な世界を構築するのだから）
ダンテは自分に言い聞かせるよう、何度も心の中で呟いた。

● 第二章 ●

洞窟の世界と操られし巨人



ATHENA'S WONDER LAND

森の世界の果てにあったのは、小さな洞窟だった。人が二人横に並んで歩ける程度の通路幅に、十五メートルはあるかと思える高い天井。そして、ところどころ雑草等が見られる、いたって普通な土の道。
「洞窟の世界だ。その名の通り、洞窟になってる」
なるほど、さっきのあれは森の世界で、洞窟に入った途端そこは洞窟の世界、と。
「世界が切り替わったって実感は沸かなかったわね。世界が切り替わるっていうと、ゲームならもっと派手なエフェクトとか演出が入るものよ？」
「残念ながらそういうものはない」
レトロねぇ、昔のゲームだってもう少し頑張ってたわよ？　やっぱり現実じゃ二次元には勝てないのかしら？
気付かぬ間に国境が切り替わっていた、ただその程度の感覚だった。
「さ、急ぐぞ。新しい世界に入ったということは、また制限時間がついたということだ。さっさと抜け出すか、装置を壊さんと……」
「夢がなくなってしまう。なんだかステージ攻略型のゲームみたい」
「なんだ、お前はアウトドア派だと思ってたが」
「漫画とゲームは別腹なの」
別に、インドアな遊びが嫌いというわけでもないし。

「それにしても、どうしてこいつらはあんなところに埋まってたんだろうな」
　私は今装備している鉄製の鎧と靴、黄色の剣と盾を見た。まだ所々に土が残っている
それらは、洞窟の狭い道の途中、進路を邪魔する土の壁を棍棒で掘り壊していたときに
出てきたものだ。
「誰かが埋めたんじゃないかしら」
「誰が一体なんの為に」
「ま、使えるならそれでいいじゃない。ほら、まるで私にあつらえたようにサイズまで
ピッタシなわけだしさ」
「むしろそこが怪しいわけだが」
「気にしない気にしない」
「クッキーの件といい、お前は考えなさすぎるぜ。俺にこのようなものを持たせるし」
「だって森の世界の番人が落としたんだもの。きっと意味があるものに違いないわ」
　Kという文字が掘られた、謎の石盤。どういう意味があるのかわからなかったけど、
なんとなく持ってきてしまっていた。
「思い切りはいいくせに貧乏性だな。棍棒は捨ててよかったのか？」
「見逃すのは無理だけど、捨てるのは得意なの。それと、悲観的でいるよりはマシだわ」
「複雑な性格だな」

ね、うじうじしてるよりは、前向き上等です！　髪型がリーゼントのような（語感的な意味で）先鋭的なものへと変化しちゃうくらいに前を向くの。そして夢を探し求めるのです！　きゃっちあっぷどりーむ！

そう言い聞かせることが、私の日課だ。

「あれ、人だ」

洞窟の土道をしばらく歩くと、陽の光のあたる大きな広がりに出た。広がりは大きな円形になっていて、その中央には大きな石造りの建物がある。建物の周囲には、小さなベンチと噴水があって、まるで公園のような感じ。広がりには天井が無く、太陽の姿も見えた。まるで、山々の中にポッカリとできた窪地(くぼち)みたい。

広がりの端から、天まで届きそうなほどに高く長い螺旋状の土の坂道が続いていた。その坂道の端には、等間隔で掘られたいくつもの穴がある。

そしてその窪地のような空間には、人間が数十人ほどいた。

「ここは洞窟の世界の町だ」

「町？　洞窟の中に？」

なるほど、だから人間の姿があるわけだ。男の子、女の子、青年、オジサン、オバサ

ン、お爺ちゃん、お婆ちゃん、色々。適当だけど、まぁ色々。
「そうだ。この世界の住民はここを住居としている。しかしここに来ることになるとは、なんだか皮肉なものだな」
「皮肉？」
「ま、気にしないでくれ」
皮肉……ねぇ。なんのことだろ。
「でも、こんなところに住むなんてすっごく不便そうねぇ」
なにしろ洞窟の中だし、外に出るにも一苦労じゃない。ビクトリー国一の利便性を誇る、アマゾソ通販だって届かないんじゃないかしら？　って、ここはビクトリー国じゃないか。
「たくさん小さな穴があるだろ？　あれが色々なところに繋がってるんだ。住宅街、商店街、下方に繋がる道の先には田畑や川。牧場などなど」
「あら、本格的なのね」
「でないと、こんなとこに人は住めないだろ。中央にあるあれは公民館であり、町の人々の憩いの場、公園だ」
へぇ～。きちんと町になってるんだ。
「ヌーパーちゃん、自分の町でもないのに詳しいのね」

「ま、そりゃな。俺ほど幻想界に詳しい男もいないだろう」

ああ、ヌーパーちゃんってやっぱり雄だったのか。まぁ、俺って一人称だし、私が逆さ吊りにされてた時ジーっと見てたし、多分そうよねぇ。

とかなんとか話していると、周囲の人々が私達の存在に気付いたみたいで、一斉に注視してくる。

「え？　なに？　なんなの？」

「きっと珍しいんだよ」

「え？　珍しい？　なんで？」

「この町を訪れる者がいなくなって久しいですかなら。皆、珍しがっておるのでしょう」

そのうちの一人、中年の男が近付いてきて、私達にそんなことを言った。

どうやら、本当に珍しいらしい。

「今や、この世界には夢がなく、誰も彼もが無気力状態というのに。どこから来なさった？」

なるほど、夢を失えば旅もしなくなるのか。確かに旅というのは、ああしたいこうしたいという思いの塊のようなもの。

そこで気付いた。私達を見る人々の眼が、どこか虚ろで覇気を感じさせないことに。

ああ、夢が無いというのはこういうことなのか。夢が無い人々とは、かくも悲しき存在

なのか。
　悲しき中年は質問を続けてきた。
「どこから逃げて来られて？」
「逃げて？　逃げてなんてないわよ、なんでそうなるのよ」
「夢が無いこんな世の中、旅をするだなんて、なにかから逃亡している人間くらいなものです」
　よくわからないけど、そんなものなのかしら。ヌーパーちゃんの方を見ると、彼はうんうんと頷いた。どうやらそういうものらしい。
「しかし、残念でしたな。今はここもろくな状況ではありません。もっとも、死に場所を探して旅をされているのであれば、うってつけの町かもしれませんが」
「誰もそんな旅してないわよ。私は生気に満ちあふれているわ」
「そう、強がる必要もありません。今やここの者たちは皆、生気などという言葉とはほど遠い状態。恥ずかしがることもなく、ただただ寂しさを覚えていればいいのです」
　そういうと男は溜息を吐き、太陽を見上げた。
「夢を失うというのは、辛いことですなぁ」
　…………。
「ねぇねぇ、ヌーパーちゃん」

「どうした？」

「大人でも夢って持つものなんだ」

「そりゃそうだろう。別に夢を持つのは子供だけっていうことでもない」

へぇ、それはちょっと意外だったわ、てっきり大人ってものは、夢なんて全部なくした存在かと思ってたんだけど。

「少し前までは成長する娘のことを考えて、楽しくもなっていたものですが」

「成長する娘、ですか」

「はい。それが今や、全然楽しみにならない始末。うむむ、どうしたことやら」

なるほど、子供の成長が夢、かぁ。

ひょっとしてうちの両親も私のことを――。

「ジンさん、大変だ！」

とかなんとか話していると、突然駆け込んでくる男が一人。

「ゴーレムだ、ゴーレムが来た！」

「なんだと⁉」

ズドーーーーン！

耳をつんざくような破砕音と、地面の揺れ。

大きな広がりの向こう側、公民館を挟んだその先から、大きな地響きが鳴り響いた。

揺れは段々大きく、近くなり——やがて、一際大きな破砕音が轟く。
ガシャアアアン！
「うわっ！」
ぶわりと大きな砂煙が舞い、視界を覆う。
ちょっと、これじゃ何も見えないじゃない。
そんな中、また少しずつ近付いてくる地響き、いや、足音？
間近に感じる振動で足が浮き上がりそうになるので、いよいよ近付いてきたのがわかった。
私はその足音の正体を確かめようと、砂埃の先に向けて、私は必死に目を凝らした。
あれ、なにやら大きな、黒い影が——。
「旅人さん、こっち」
「え？」
と、その時だった。私の腕を掴んで引っ張る細い腕。
「え？　え？」
「こっち。危ないから、早く！」
引っ張られるままに、視界の広い方に連れて行かれる。
やがて私は、先ほど広がりの端に見た、天に繋がる坂道を駆け上がっていることに気

付いた。
と、そこで、私を引っ張る手の主を見てみる。
……女の子？
髪は二つ結びで、年齢は十より少し上くらい、だろうか。
「こっちよ」
坂道の途中にある、小さな穴のうちの一つへ。
穴に入るとこれまた小さなトンネルのようになっており、その両端に、いくつかの木のドアが並んでいた。トンネルはここからじゃ奥が見えないくらいに長く続いている。
女の子は数あるドアのうちの一つを開け、そこに私達とともに駆け込んだ。
きちんと板張りしてある六畳間くらいの部屋で、中にはカンテラが下がっており、家具等が並んでいた。どうやらここは住居のようだ。
「あなたの家？」
彼女は無言でこくりと頷く。
激しい振動で、吊り下がっているカンテラが振り子のように揺れる。石造りの食器棚がガチャガチャと音を立て、木製の机の上にあった本が地面に落ちる。
「あ、私の日記」
彼女が本に近寄って行き、大事そうにそれを抱える。どうやらあれは、女の子にとっ



て大切なものらしい。
「で、これってどういう状況なわけ？」
「さぁ、俺は知らんな。というか最近の世の中、俺には知らないことだらけだ。暴れてたのがゴーレムだってことだけはわかったが」
……ヌーパーちゃん、歩く百科事典とかそんな感じの事言ってなかった？
「また、巨人がやって来たの」
私の疑問に少女が答える。
「巨人？」
「そう。元々、町の守護神。今じゃ破壊神。最近こうやって時々やってきては、町を荒らして去ってる、土の巨人」
「……守護神？　破壊神？　どういうこと？」
ヌーパーちゃんを見る。かぶりを振った。どうやら彼も知らないみたい。
「巨人が歩けば地は揺れて、腕を振るえば、町なんて……」
…………。
状況を理解しきれぬまま、それを整頓しようと頭をフル回転させていると、やがて地鳴りが遠くなっていくのがわかった。
やがて、微震すらも感じられなくなり、完全に収まってしまう。

「行ったみたいね」
少女はそう呟き、抱えていた日記帳を机に戻した。
そうして、先程の揺れで荒れてしまった部屋を整え、入口に向かう。
「様子を見に行くけど、旅人さんも来る？　私、ロゼっていうの」
私はその言葉に、うん、と頷いた。

広がりにあった建物は瓦礫の山。噴水もベンチも木っ端微塵。公園も町も見るも無惨なものへと変化していた。
「酷い有様ね」
それを見て、ついそう呟いてしまう。
「もう、無茶苦茶」
ロゼが平坦な声で呟き、そう返してきた。どうでもいいけど、ロゼの声ってどこか冷たいっていうか、無感情。そういう層には受けそうというか、いかにも無口系。
「こういうの見てると気持ちがいいな」
ヌーパーちゃんも、楽しそうに呟いた。
「どうして？」

「破壊とは、気持ちのいい悪だからだよ。悪には二種類あるんだ、気持ちのいいものと悪いもの。お前にはわかるか？」
「なんだかよくわからないし、今はそういうことを話したいわけじゃないの」
ヌーパーちゃんの悪の在り方論なんて興味ないし。
大人達が集まって来て、瓦礫の山を片付けていた。崩壊寸前の危険な部分から物を取り除き、事故が起きてしまわないように崩しているようだ。使えそうな木材や石材は材質毎にリヤカーで運び、広がりの端にまとめ、積み上げていた。
と、そんな大人達の中に、先程私達に話しかけてくれたジンさんを見つける。
「町の中にやってくることは、これまで無かったのですが……」
私達を見つけたジンさんは、大きな溜息を吐きながらそう呟いた。
「来ても町の入口部分で撤退。なのに今回に限ってここまでやってきてしまうなんて」
「いつもやって来てるの？」
ロゼも同じようなことを言ってたけど。
「そうですね。こうやってふらりとこの町にやって来ては荒らして帰るのです。いえ、元々アレは、そのようなゴーレムじゃなかったはずなのですが」
「ダンテのせいよ」
と、ジンさんの言葉を遮るようにロゼが言った。

「ゴーレムはね、昔この町にいた大魔導師が魔法でつくった巨人なの。立地上モンスターの襲撃が多いこの町を守るために、ね。この町の守り神、守護神だったってわけ」
なるほど、建物の一つや二つ簡単に壊してしまうような奴なのだ、威嚇されたら、町で悪さをしようとしても諦めて帰ってしまうだろう。
「しかしながらそのゴーレムがあの有様でして……。我々は、モンスターと、なにより今まで私達を守ってくれた彼から町を守るために、自警団を立ち上げたのですが……」
「手も足も出てない、ってわけ？」
「失礼ですな旅の方。入口のバリケードから水を浴びせてゴーレムを追っ払っていましたし、モンスターだってどうにかしていますよ！」
「毎回負傷者が出て、そろそろ自警団の人手不足という事態におちいりそうだけど」
間髪を入れず、鋭くツッコむロゼ。
「うっ……しょ、しょうがないだろ。我々には戦闘慣れしている者が少ないのだから」
少女相手に声を荒げ、抗議するジンさん。
「はぁ、本当に大人気無い。だからここの大人達は嫌いだわ」
相変わらずの平坦な声で言い捨て、ロゼは周囲を見回した。私もロゼの視線を追うように見てみる。
後片付けを進めている大人達。その視線はどこか虚ろというか、やる気がないという

さっきのゴーレムに苛立ちだけは覚えているのがわかる。

か……気怠さを感じるものだった。だが、ひそめた眉毛や、への字に歪んだ口元から、

きっとロゼは、やる気もないくせに怒りだけ感じている、そんな大人達が気にくわないのだろう。なんとなく、私もわかる気がした。

「このままじゃ、町は壊されてしまうわよ？」

「だが、だからといってゴーレムを倒すわけにはいかないだろう。あいつを倒してしまうと、今後も続くかも知れないモンスターの脅威をどうするんだ？」

ジンさんは生気のない気怠げな口調で、でも声量だけは大きく語る。

「大体倒すのなんて無理だ。あんなに大きいんだぞ？　そんなことできるわけないじゃないか。我々には、水を使って追い返す程度が精々なとこ。知恵を絞って協力すればどうにかなるか？　そんなわけはない。現実はそんなに甘くないんだ」

なるほど、夢を失うというのはこういうことなのか。きっと、行きすぎた現実主義に走ってしまうのだわ。

「あほくさ。あれをどうにかしないと、モンスターに怯える前に町が滅んじゃうっていうのに」

そんなジンさんに向かって、ロゼが冷めた声で反論した。そして、彼女は人差し指をジンさんに突きつける。

「いい？　あの巨人はさっさと破壊すべき。できないのはわかってる。無理でしょう。でも、私達はそうせざるを得ないの。夢を失って、生きる気力がなくなっちゃってるのなら、話は別だけど」
「お前に言われたくはないな」
「私だから言ってる」
その言葉を聞いて、黙り込んでしまうジンさん。ロゼはジンさんの眼前に突き付けた指を引くと、フンと背中を向けた。
「強いお嬢さんだな」
ヌーパーちゃんがボソリと呟いた
もしこの口論に勝敗というものがあるとすれば、きっとロゼの勝ちだろう。

「ロゼは随分と気力があるのね」
「そう？」
入ってきた時とは反対側にある出口から町を出て、ゴーレムの寝床を目指していた。
町には二つしか出口が無いから、この道は次の世界へ続く道ってことになる。一石二鳥よね。

「うん。だって他の人達って、なんだかやる気ないっていうか、でもロゼはそういうわけでもなさそうじゃない？」
「私も無いわよ。夢を無くしてしまうとね、肩に力が入らなくなるの。生きたいってわけでもない、でも死ぬのも面倒。やりたいって思えることがないから先に希望は見出せないけど、死ぬ不安や恐れ悲しみだけはきちんとある。正直、生き地獄ってやつね」
ロゼは他人事のように淡々と語る。
「外に出たいだけなら、巨人が町に来てる隙を窺えばよかっただけ。そうすれば案外楽に行けたかも知れない」
両手に大きなバケツを二つ下げたロゼが言った。ゴーレムの弱点である水を、たっぷりと汲んで持ってきている。ゴーレムの身体は泥でできているらしく、水を浴びせられると溶けちゃうらしいのだ。
歩調に合わせてバケツの中は揺れ、端からこぼれた水が地面を濡らした。
「あんな状況の町を放って行けるわけないでしょ？　正義の味方ってわけでもないけど……後味が悪いわ」
正義の味方というものは、他人の為にやっているのではなく、そうせざるを得ない自分の為にやっているのよ。多分。
もっとも、私は自分が正義の味方だなんて、思ってはいないけどね。無尽蔵に溢れ出

る好奇心が、きっとそうさせているのだわ。
「私はね、この世界に冒険を求めてやって来たの。だからね、あんな楽しそうな奴を放って先に進んじゃうなんて、ぶっちゃけ有り得ない。見かけちゃったからには、どうにかしなきゃいけないのよ」
「愉快な人。モンスターも連れてるし」
んー、なんか失礼なこと言われてるような気も。
「まぁ、アテナが愉快ってのは同意だな」
ギシッ、グリュグリュ。
肩の上のヌーパーちゃんを掴むと、雑巾のように絞り上げた。
「いて、いてて、ギブ、ギブ！」
「身体がゼリーのくせに、グリグリされるとなんで痛がるわけ？」
「痛いものは痛いんだよ！」
私はヒンヤリとしたゼラチンの感触が、気持ちよくてしょうがないけど。
「ほんと、愉快な人達」
私達の様子を見ていたロゼが、笑わずにもう一声。
「そういえば、なんでロゼはついてきたの？　別に助けて欲しいとか、そういう無茶は言ってないつもりなんだけど」

「私はあなたが勝てるなんて思っていないし、期待もしてない。ただ、手助けする義務感があるだけ」
「え、どうして？」
「元々こうなったのは、私に責任があるから」
「お嬢ちゃんに……か？」
ヌーパーちゃんが会話に無理やり割って入ってくる。なんだか妙に口数が減ったのは、別に私達に遠慮しているわけではなく、会話に割り込むのが苦手なんだろうな。こういう人の事って、オババ的表現で言うならなんだっけ、えっと。
そうだ、ゴウコンが苦手なタイプ、だ。洞窟の町に着いてからなんだか神妙な面持ちだけど、つまるところはそういうことに違いないわ。
「うん、町の人達だってきっと、心の底でそう思ってるわ。人間は恨みを持つ生き物で、優しさは憎しみにかき消されてしまうから」
ロゼは、オババ的表現でいけば、きっとマセガキって奴だろう。いや、夢を失って、こうなってるだけかもしれないけど。
「でも、どうして、その……それって、ロゼのせいなの？」
ピタリとロゼが足を止める。
私も足を止めて彼女の方を振り返る。ロゼは、相変わらずのクールフェイスだったが、

それでも僅(かす)かに眉間に皺(しわ)を寄せたのがわかった。
「私が、ダンテをふったから」
　そして、予想外な答えを返す。
「ふった？」
「そう。ある日突然彼がこの町を訪れて、私にプロポーズしてきたの。私はそれをふったのよ」
「どうして？」
　私は続けて問いを重ねた。
「え？　カッコよくなかったから」
　あ、いや、そっちのどうしてじゃなかったんだけど。私のどうしては、もっと広い意味っていうか、そもそもダンテがなんでここにやって来たのかとか、そういう部分も含めてというか。
「私、結構面食いなの。今は、自分の顔でイケメンと付き合えるなんて、思っちゃいないけど」
　あ、夢が無い。夢が無いわ。女は顔じゃないんだから、顔のよい男と付き合える可能性を信じてもいいはずなのに。
「そうしたら彼、数日後突然現れて、巨人をあんなふうにしちゃって、変な装置まで取

り付けて……」
「なるほど、それでねぇ」
本当のところはよくわからないけど、概要だけが理解できた。
「ふむ」
ヌーパーちゃんは相変わらず、似合いもしない難しい表情をしている。ハマドリュアスを倒した時に拾った石盤を、ちゃんと抱えたまま。
「逆恨みって奴かしら？　でもそれって、別にロゼのせいってわけでもないんじゃないの？」
強いて言うなら、ダンテのせいだ。
「でもきっと、町の人は私のせいだと思ってる。最近みんな冷たいし。元から、そんなに友達の多い方じゃなかったけど。大人達も含めて、冷たい。パパも冷たい。さっきの見たでしょ？」
「ん？」
「ジン。あれ、私のパパ」
「ええ？　そうだったの？」
気付かなかった。だって、まったくそんな素振り無かったし。しかもまったく似てなかったし。

「私は巨人をとめる。そうしたいんじゃなくて、そうしなきゃいけないから。それは私が引き起こした事件の責任でもあるし、それ以外にも、理由があるから」
だとしたら、あの時ジンさんが言ってた成長する娘って、ひょっとしてロゼのこと？
あれ、だとしたら、ロゼはお父さんのことを少し誤解しているような。
「あのねロゼ、あなたのお父さんは――」
「さて、そろそろ着くわ」
ロゼは私の言葉を遮ると、歩みをとめて前を見やった。
私達もそれに倣ってストップ。人二人横に並ぶのがやっとな通路の先に、先程の町のような大きな広がりができているのを確認する。
きっと、あそこがゴーレムの寝床なのだろう。
「もう一度確認するけど、本当に巨人を倒す気？　先程分かれ道があったの覚えてる？　あそこのもう片方の道を進んで、そこで待ち伏せして隙を窺えば、対峙せずに切り抜けられるかもしれないわ」
ロゼが確認をとってきた。
「大丈夫、私はあいつを倒してやるから。そうしないと根本的な解決にならないし、ほら、今だったら気怠そうだしそれでもいいだろうけど、それはそれで夢を取り戻した後に大変じゃない？」

あーでも、あいつを倒しちゃうと町の人達はモンスターを撃退できなくなっちゃうんだっけ。でもまぁ、そこは夢を取り戻した大人達。並程度のモンスターなら、なんとか退治してやっていけるだろう。人間は賢いのだから、聡いのだから。

なんとなくよい感じにまとめて、うんうんと頷いてみる。

「だったらせめて、あいつが寝ている時間に来ればよかったのに」

「うーん、残念ながら、ゆっくりすることもできないのよね。私まで夢を失っちゃうと、どうしようもなくなっちゃうからね」

聞くところによると、ゴーレムの就寝時間まではあと六時間程度。そんなに待っていたら私の夢が無くなっちゃうわ。

そう、私には面倒なことにタイムリミットがある。そもそも、あいつが寝床を抜け出した隙になんて方法も、実現可能かわからないのだ。

「不思議な人。この世界でまだ夢を失っていないなんて。それに、まだ若い女の子なのに、凄く強いし。さっきのボア退治、カッコよかったわよ」

ボアを退治した時のことを褒められる。

町を出てすぐにボアと遭遇した。もちろん片手で捻ってあげたけど……そんなに誉められることかしら。

ロゼに若いって言われると違和感あるなぁ。いやだって、ロゼよりはさすがに私の方

が歳をとっていると思うもの。
「しかし、ロゼはよくこの場所を知ってたわね。それに就寝時間も。そういうのって、みんなご存知なわけ？」
「うん、町の人はよく知ってるわ。さっきも言ったけど、彼はあの町の守護者だったから。それに、私は特に」
「仲良しだったのか？」
またしてもヌーパーちゃんが会話に強引に入ってくる。
私はそれを恨むでもなく、むしろ上手いこと会話のパスを出せてない自分がダメなんじゃないかしらと反省した。トーク上手な芸人って凄い。
「うん、仲良しだった。だからこそ私は、彼を壊してあげたいの」
「仲良しだったから？」
「うん」
そう答えるロゼの表情は、どこか曇って見えた。

ゴーレムの居場所へと辿り着く。
私達が彼の寝床としている広がりへ侵入すると、寝ころんでいた巨大な体躯を起き上

がり、その瞳をこちらへ向けた。
ハマドリュアスの二倍ほどの体長。角張った大きな土のブロックが、いくつか組み合わさってつくられた巨体。
細い空洞の中に、赤く光る大きな眼球が一つ。人間ではないけど、素直にカッコイイと思えるフェイス。機械じゃないけど、オババ的に言えばロボカッコイイというところだろうか。オババは若い子ぶりたいのか、やたらと造語をつくる癖(くせ)があったのよね。
「相変わらずでかい野郎だ。昔からちっとも変わりやしねぇ」
「あれ、ヌーパーちゃん見たことがあったの？」
「昔な。見逃してやったことがある」
なんだ、知ったかぶりのホラ自慢か。真面目に質問して損したわ。こういうとこなければ、もっとかわいいのに。
私は彼に得物を向けて、高らかに宣言する。
「私はアテナ、プリンセスアテナよ。ゴーレム、覚悟しちゃいなさい！」
「グオオオオオ！」
ゴーレムが私の声に応え、低い声で唸った。
私は地を蹴り、ゴーレムを倒そうと棍棒を……って、棍棒⁉
「あああああ、しまった、また武器が棍棒だわ⁉　いつの間に⁉」

「本当だ。剣はどうしたんだ？」
「先程、ボアを倒したときに、落とした棍棒と持ち替えてたけど」
ロゼが教えてくれる。
って、えええ、なんで、無意識のうちに⁉　私の意思に拘らず近付くと勝手に取っちゃう設定って、どんだけ邪魔設定⁉
なんてこと……私の貧乏性が仇になるなんて。あの剣、結局使わずじまいだったわ！
「お前は不用意に物に近付くと危険だな」
「もしかして、私の最大の敵ってアイテムなのかしら⁉」
しかし、嘆いていても仕方がない。私はこちらに反応しきれていないゴーレムの足下へと駆け込む。ガチャガチャと身につけている鎧が音を鳴らした。ああ、鎧といい兜といい、防御力はあるかもしれないけど、ちょっと動きづらい。
「たあああああ！」
私は、彼の巨大な足を棍棒で殴りつけた。どうせ剣じゃ斬れない相手だ、棍棒だって変わりないわよ。私は勇んで棍棒を振り回した。勢い良く放たれた打撃が、確かに目標をとらえる。まぁ的が大きいから、はずすことはないのだが。だが――。
ゴスッ！　コーンッ！
「嘘っ！　かたっ！」

だが、いかんせん彼の足は硬い。それはまるで水気を含んで硬度を増した土――いや、コンクリートのよう！　ジ～ンと、私の手が痺れる。むしろこっちがダメージを受ける。
多分これ、全然効いてないわよね⁉
「アテナ！　上だ！」
「え？」
ヌーパーちゃんの声に私は頭上を――って、こんな展開以前もあったような。
見上げると、そこには先程私が殴ったゴーレムの足が迫っていた。
巨大な足の裏。土だから臭くはない……多分。
「くっ、このっ！」
私は必死に身を横に投げ、受け身を取り、一回転、二回転。
身体についた砂を払いながら、私は立ち上がり、再び棍棒を構えた。
「アテナ、効いてないぞ？」
地面に落ちていたヌーパーちゃんが近寄ってきて、再び肩の上に飛び乗る。あれを見て逃げ出さないなんて、変な勇ましさだけはあるスライムだわ。
「もういっちょ！」
再びゴーレムの足を殴る。暴れ狂う棍棒、勇ましき暴力。だがやはり、彼の頑丈な足には傷一つつけられない。もう一度、いやもう一度と、何度もゴーレムの足首あたりを

殴打する。でも残念ながら、まったく効いている様子はないのよね。
ああ、こんな時に魔法が使えたら。一体私は、何度このことで後悔するのだろう。比較的簡単な体術への応用ならともかく、魔法や武器への流用は苦手なのである。
あーもー、面倒でもきちんと勉強しておくべきだったわ。
「グオオオオオオオ！」
ゴーレムの足が、再び私を踏み潰そうと動き出す。私は再びそれを避けると、はたしてこれからどうするべきかを考えた。
とりあえず、弱点はどこかある？　でも、彼が動き回っている以上、ゆっくり観察したり、足以外を狙うなんてことは中々に無理だし……。ええい、どうしたら。
「これをくらって、目を覚まして！」
「ロゼ！」
ロゼが駆けてきて、ゴーレムの足に持ってきていたバケツの水をぶっかけた。
バシャアアアン！
水は確かにゴーレムの身体に命中して、それを溶かした。
「グッ？」
だが、所詮バケツ二つ程度の水だ。巨大なゴーレムに対して、それが与えられる水分の量というのはあまりにも少ない。具体的に言うと、片足を溶かすにも十分じゃないいく

らい。
つまり、多分、効いてない。あの程度だと焼け石に水じゃ……。
「やっぱりこの程度じゃダメか」
するとゴーレムは、私達の方からロゼに視線を移した。
そして、その大きな拳を彼女に向かって構える。
「な!? ロゼ! 危ない!」
「ッ!」
ゴーレムはロゼに向かって、その巨大な拳を――飛ばした。
着脱可能な拳。巨大な土の手。ジャンケングーの襲来。要するにロケットパンチ。
その拳は、どうしようもない程正確にロゼの立つ場所を狙っていた。そしてロゼは、それに反応しきれず、いや、どう避けたらいいのか理解できないまま、ボーっと立ちつくしていて――。
――危ないッ!
私はヌーパーちゃんを肩から振り下ろすと、今度はロゼの方へと身を投げた。
両手を大きく伸ばし彼女を突き飛ばそうとする。だけどどうしたことだろう、私はジャンプする先を誤ったらしく、ロゼの斜め前を通り過ぎようとしていた。しかも、ゴーレムの拳が到達する、ジャストのタイミングで。

「アテナ！」
やばっ。これじゃ私も避けきれないじゃない。
もしかして私、こんなところで死んじゃうの？　人をかばおうとしたと言えば格好いいけど、飛び間違えて両方死にましたなんてかなり間抜けじゃない？　恥ずかしくて死んでも死にきれないわ。いや、死にきれないなら、それに越したことはないんだけど。
思考がグルグル回転して、意味がわからなくなる。いや、本当に本当に本当、このまじゃ私——。
情けないけど、私は咄嗟に目を瞑(つぶ)った。だって怖いものは怖い。ジャンプ中にもう一度ジャンプして急に軌道を変えれるのは、きっと別のゲームだから。
そうして私はゴーレムの一撃を覚悟した。
「あれ……？」
はずだった。
だが、ゴーレムのパンチは目前で停止していた。
あれ、届いてない？　なんで？　どうして？
私はロゼの前に着地し、受け身を取ると、前屈みで転げそうになった体勢を強引に戻した。
そうして、静止している拳と、その先のゴーレムを見た。

「グ、ゴゴゴゴ」
着脱式の拳はバックしていき、やがてピタリと元の腕に収まる。するとゴーレムは、頭を抱えて苦しみ始めた。
なにやら、悩んでいるご様子だけど。
「ど、どうしちゃったの？」
「どうしたんだろうな……」
わけもわからず、狼狽（ろうばい）する私とヌーパーちゃん。
いやほんと、これはどうしたことだろう。
「さっきの水が効いてる、とか？」
「そうなのか？」
「いや、わからないけどさ。そのくらいしか思い当たる節がないっていうか。水がかかって故障しちゃったとか」
「きっと彼は、私を殺せなかったの。大丈夫、わかっていたことだから」
「え？　どうして？」
「事実だからよ」
意味がわからないロゼの返答。
「アテナ！　今がチャンスだ！」

そうだ、あいつが苦しんでる今なら、もう一度攻撃を。
でも、さっき普通に殴っても効かなかったのよ。どうしたらいい？　弱点。そうだ、あいつの動きが鈍っている今なら、どこか攻撃の効きそうな場所に、ピンポイントで一撃を浴びせることができるわ。
私は考える、あのゴーレムの弱点を。なにか、なにかヒントはないものか。
――人生とは常に実戦であり、持ちうる手段で挑んでいかなければならないの。
――すべての知識は繋がっているわ。一見役に立たなそうなものでも、そこに何かが眠っているということは往々にしてあること。
ふと、そんな言葉を思い出した。いつか、家族でピクニックに行った時、お母様が私に投げかけてきた言葉だ。確か、弁当箱を忘れてしまった私に対しての、雑草でも食べてなさいっていう意味を込めた言葉だったっけ。
ああそうだ、あの時は酷かったなぁ。お母様はいつもああだ。お父様は過保護すぎて気持ち悪いけど、お母様はどこか厳しくて――。
って、そんなホームシックはどうでもいいの。そうだ、持ちうる知識だ。他の手段を考えるの。結局私にできるのはこの棍棒を振るうこと。だったら、どこに振るえばいいの？
…………。

あった。
あいつの弱そうな部分。
ありがちな弱点部位。
「そうよね。あんた見たいな奴って、大概ゲームだとそこが弱点よね。他の部分は攻撃を跳ね返すのに、そこに当てればダメージを与えられる、って奴」
私は棍棒を握り直し、駆けだした。そして、さっきのようなドジはしないよう気をつけて、顔面の赤い眼球を目指し跳躍する。
「てりゃあああああああああ！」
私の様子に気付いたゴーレムが咄嗟に腕を振るう。が、それは私にはあたらない。
私は彼の顔面の十字、その中央にある眼球に棍棒を思いっきり叩きつけた。
「グ、グゴゴ、グオオオオオ」
私の一撃を受けたゴーレムは、声にならない声をあげ、その場に崩れ落ちる。
「見ろアテナ。魔力がなくなっていく」
ゴーレムが、その赤い眼球から、じわじわと光を無くしていく。
そして――彼はただの土に戻った。

偶然は重なるもので、ゴーレムの寝床に夢を吸引する例の装置は建てられていた。
私達はそれを壊して、一度町へと引き返した。先を急ぎたいところだけど、しばらく歩きっぱなしだったのでいい加減疲れていたのだ。装置を破壊したのだから、少しくらい長居したって問題ないんじゃない？
町に戻った私達は、再びロゼの部屋に案内された。一連のお礼に泊めてくれるとのロゼの申し出を、ありがたく頂戴することに。
「良かったの？　お祝いしてくれるってパパが言ってたけど」
「いいの。今日はゆっくり休みたいから。明日もきっと早いしね。美味しい料理に心残りはあるけど」
――カポーン。
そして今は、町の大浴場の湯船に、ロゼと二人で浸かっていた。
どうやらこの町は温泉が沸いているらしく、そこが町民全員の共有浴場となっているらしいのだ。広さは、城の浴場と比べるとかなり小さい。ちょっと狭いけど、それでも八人くらいなら足をのばして浸かれるだろうか。
「それだったら、後でパパがご馳走を持ってきてくれるって言ってた」
それはありがたい。
ゆっくり休息したいという欲望と同じくらい、お腹も減ってるし。

「でも、ちょっと驚いた。私が戻ってきた時の、パパの態度」
「ああ――」
私は思い出す、この町に戻って来た時のことを。ジンさんは、私達のゴーレム討伐報告を聞く前に、まずロゼが戻ってきたことに喜び、泣き出してしまったのだ。
「パパが泣いてるところを見るのは、夢が無くなってからはじめて、かな。って、あの時はもう元に戻っていたか」
「嫌われてなんてなかったじゃない」
「――そうだね」
相変わらずのクールボイスで、でもどこか嬉しそうな感じで、ロゼが相槌を打つ。
きっと、親子は繋がっているものなのだ。口ではなんと言っていようが、普段はどう思っていようが、芯の部分では繋がっている。
「アテナはホームシックになったりしないの？　家を出て、旅してて」
と、そんなことを考えていた私の心を見透かしたのか、ロゼがそう尋ねてきた。
「う～ん、むしろスカーっとしてるくらいかなぁ。鼻づまりがよくなった感じ？」
お城の生活は息苦しくて、外の空気は心地良い。
「アテナは強いんだね。それとも親が嫌い？」
「うーん、嫌いではないかなぁ。お父様はウザったくて、お母様はちょっと厳しいけど。

オババだって、悪い人ではないし」
つい先ほどあんなことを考えていたというのに、早速言葉には悪意がこもってしまう。
まぁでも、嫌いではないというニュアンスは伝えられたはずだからいいのか。
「ふ～ん、ならどうして？」
「お城の空気が苦手なのよね。お姫様である自分、とか。そういうのから、パーって逃げ出したくなっちゃう時があるの」
「なるほど。だからホームシックしないのね」
…………。
ちょっと胸がムズムズとするけど、きっとそれは心地良すぎる旅に身体が慣れてないせいね。そういえば日帰りじゃない旅なんて初体験だわ。もしかしてこれって軽い家出？　プチ家出というやつなのかもしれない。
手拭いをおでこの上に乗せて、天井を仰ぎ見る。うーん、いいお湯だ。
ロゼは私の右隣で、体操座りで入っていた。ロゼは、年齢差があるということを考慮しても、私よりかなり小ぶりな身体。
「それにしてもアテナ、胸が大きい。羨ましい」
「私はロゼのくびれが羨ましいんだけど」
確かにロゼの胸は控えめだが、若干肉付きのよい私にとって、引き締まったくびれが

眩しすぎた。着替える時にまじまじと見たが、かわいらしい肉付きのヒップも情欲をそそるし、いやぁ、私こそ羨ましい。
「ちょっとアテナ。どこ触ってるの」
「いいじゃない、減るものでもないし」
「や、そういう問題じゃ。あっ」
私はグイとロゼに肩を寄せると、そのくびれに手を伸ばした。うーん、やっぱりいいわぁ、これ。
どれだけ運動しても細くならない私。やはり、食べる量を減らさなきゃダメなのかしら？　お城では、ついつい間食が増えちゃうものだけど。
「じゃあ、私も仕返し」
「え？　きゃっ！　ロゼ、ちょっと、そこはダメだって！」
「ふに、ふに。どう？」
ロゼが私の胸に手を伸ばし、揉みしだいてくる。いや、確かに私も手を出したけど、そんな胸を直接触るとか、そういうことはやってないし。
「あっ、んっ、ちょっとっ。もぉ～、こうなったら私も」
「残念、私には強く揉めるほどのサイズが無い」
「でも、ここを刺激されるとどうかな～？　さすがに感じちゃうんじゃないかな～？」

「――⁉　いや、そこは！」
　しかしロゼって猫みたいで可愛いわね。冷たく起伏の少ない声、媚びを感じさせない彼女の姿勢が、逆に胸をキュンとさせた。
　私が男なら放っておかないんじゃないかしら。
　私はそのままガシリと彼女の腰に手をまわし、顔を近付ける。
「そういえば、どうしてあの時ゴーレムは止まっちゃったの？　『事実だから』ってどういうこと？」
　私の質問を受けて、ちょっと表情を曇らせるロゼ。若干顔色が赤らんでも見えるが、それはのぼせているか、もしくは私の所行のせいだろう。
「彼は、私のことが好きだったから。そして、私も彼のことを……」
「え？」
　好き、だった？
「夢なんてなくっても、それは事実。愛は夢でも理想でもなく、現実なの」
　彼女は相変わらずの平坦な口調で喋った。ただ、淡々と。
「それが嘘や思いこみじゃない証拠。日記にも書いてあったから、私が彼を愛したこと。忘れちゃわないように、大事な気持ちはきちんと記しておいたの。彼が私のことを、大事に思ってくれてたってこと」

ああ、ロゼの部屋にあったあれね。ゴーレムが町を襲撃した時、机から落ちた本を大事そうに抱えるロゼの姿を思い出した。
「私、友達が少ないから、よく彼と話してたの。巨人。私の唯一の理解者で、大切な人。イケメンで、強くて、頑丈で」
イケメン、なんだろうか。
いやまぁ、カッコいいか悪いかで聞かれると、きっとカッコイイ。現にさっきロボカッコイイって思ったわけだし。
でも、人間がゴーレムに恋って、するものなのかな。いや、ロゼはしたんだろう。彼女の目の奥に灯る真っ直ぐな思い。それを見ればわかった。
「だから、彼に私は攻撃できないって、なんとなくわかってた。信じるとか信じないとかじゃなくて、それは事実として」
とりあえずわかったことがある。やっぱりこの子、マセガキだ。
「彼はね、この町の人のことが大好きだった。この町の人達を守る、それが彼の使命だったから。それこそ、自分のことよりも」
ロゼはどことなく物悲しげな表情を浮かべる。それは今まで、彼女が見せたことのない表情。
「そんな彼だったからこそ、町の人を傷つけるくらいなら、殺してでも止めて欲しいと



思ってしまう。それを私は、知ってたの。あんなことになって、一番悲しんでるのは彼だったたってこと」

う～ん……よくわからないけど、ロゼはゴーレムが好きだったから、彼がなにを考えているのかをわかっていた、ってことかしら？

「だからね、そうしたいというより、彼がそうするんだという事実……夢じゃなくて、現実でわかってたっていうか……。ごめん、よくわからないこと言って」

「……ううん、なんとなくなら、わかってないこともない、のかな？」

私の曖昧な返事を聞いて、ロゼは小さく頷いた。

うん、気持ちを読み取ることはできないけど、ロゼがゴーレムのことを本当に思いやっていたということだけは……わかる。

「だから、どうにもならない状況が嫌だった。それがどういう結末であれ、どうにかしないといけないと思った」

そういうと、ロゼは悲しげな表情を笑顔に変え、そして、淡泊な口調に少しだけの優しさを灯して――こう続けた。

「さっきから少しずつ、私の中に夢が戻ってきているのがわかるの。私、もっとあれがしたい、これがしたいって……したかった、って」

――彼女の目尻から、一粒の涙がこぼれる。

それは、どこまでも悲しそうな笑顔だった。

「あれって、大人の恋ってことかなぁ」
次の世界を目指すため、町を出て、再びゴーレムの寝床を訪れる。
ヌーパーちゃんの話によれば、ここから海の世界に繋がっているらしかった。もっとも、ヌーパーちゃんの話なんて、どこまで信用してよいのかわからないけど。
「子供の恋かもしれないぜ。だからこそ、あんなに綺麗だったんじゃないのか？」
どうなのだろうか。それは、大人にならなきゃわからないことのような気もする。
「お前はしたことないのか？　恋」
「残念ながら。いい相手がいないのよねぇ」
そもそも、私もロゼ同様、同じくらいの歳の友達がほとんどいないのだ。ましてや私には、そんな私を慰めてくれるゴーレムなんてものもいなかった。
口うるさいオババは、いつも近くにいたけど。
「恋とか愛とかそういうの、全然わからないからねぇ」
「寂しい人生だな。って、いつっ、ぎぶっ、ぎぶっ！」
肩の上のスライムを以下略。

「でも、なんとなくわかったことはあるわよ。夢って、人を嬉しくさせるだけの存在じゃないのね」
「そりゃそうだろ。手に入らない夢は悲しいもんだぜ。だから、夢を手に入れる為にみんな一生懸命やってるわけだろ？」
手に入らない、かぁ。
…………。
「ま、私には関係ないわね」
私は、そう、言い切った。
「どうして？」
「だって私には、手に入らない夢なんてないし」
手に入らないなら、手にするだけだわ。私は本気でそう思っていた。
「はぁ。そういう思考の奴が一番危ないんだ」
「どうしてよ」
「越えられない壁を見つけた時に挫折するんだよ。どうしようもない——いや、自分でそう思えてしまう、そんな壁にな」
そんな壁、ちょちょいと乗り越えて見せるわよ。
だから、たとえ生まれが王女でも、私は楽しい人生を——。

「と、アテナ。早速大きな壁みたいだぜ」
「え？」
ゴーレムの住居の最奥地に辿り着き、そこの状況を見たヌーパーちゃんが、そんなことを呟く。
大きな広がりの出口、海の世界へ繋がっていると思われるそこを、土砂が塞いでいたのだ。きっと、ゴーレムが暴れた時の地響きでそうなってしまったのだろう。
って、これじゃ先に進めないいんじゃ――。
「な？」
なによ、このくらいどうにかしてやるわよ。穴が土砂で塞がっているなら、掘ってやればいいだけのことじゃない。
私は棍棒を握り直し、土砂に向かった。





――同刻、ダンテの間。
「なにぃ、ゴーレムがアテナにやられただと？」
「はっ。洞窟の世界の装置が壊されたとの報告が入りました」

「うぬぬ、あの小娘め」
ダンテは握り拳をつくると、ギリリと震えた。
「この調子でいけば次は海の世界か。クラーケンに連絡を取れ。なんとしてもアテナを叩き潰させるんだ」
「それが……」
ダンテの配下はダンテに近付くと、顔を寄せ、耳元でなにかを呟いた。
それを聞いたダンテの顔が、怒りから驚きのものへと変化する。
「海の世界のクラーケンはもうやられているだと⁉　誰が一体そんなことを⁉」
配下であるボアはダンテの質問に答えるべく、再びダンテの耳元へと顔を近付けた。
「三次元世界のネプチューン、だと？」
ダンテはそれを聞いて、大きく眉間に皺を寄せた。

●第三章●

海の世界と追跡者



ATHENA'S WONDER LAND

「ったく、あのアイテムに気付いてくれてよかったぜ。あれが無いとここからは抜け出せないからな」
赤毛の男は安堵の息を漏らした。
土砂を掘る途中、不思議な翼『ペガサスの翼』を見つけたアテナ。それは、空を飛ぶことができる魔法の翼で、アテナはそれを利用して外へと飛び出し、海の世界へ。
そんなアテナの様子をイカルスは見つめていた。
アテナがゴーレムを退治した後、広がりの出口が土砂で塞がれてしまっていることに気付いたイカルスは、そこに空を飛べる魔法の翼を埋めることにした。アテナのことだ、どうせ土砂を掘ってでも先に進もうとするに違いない……と予想したからだ。
「しかしあの方は、難しい注文をしてくださるぜ」
手助けしすぎるとダメ、しないのはそもそも難しい。要は、アテナが自力ではどうしようもできない部分だけ助けてやってくれ、ということなのだが。
「この世界は、お姫様にはち～っと難易度が高すぎるんだよ。もっとも、真面目に魔法の授業を受けてくれてさえいれば、少しは違うんだろうがな。はぁ」
まぁ、来てしまったものはしょうがないと、イカルスは諦めてみせる。

――人生に想定外は付きもの。それをどう切り抜けるかがキモなのよ。

これは王妃様の言葉だったたっけ。確かあれは、王様の浮気を発見した時にどう仕返しをするかを悩んでいた時だったか。

王妃様は恩人だ。あてもなく街をさまよっていた俺を拾い育ててくれた。王の使いとして、実体は王女の使いとして。衛兵との厳しい訓練を施され、いくつものミッションを重ねた後、俺は安定した寝床と食事を手に入れることができた。少しの贅沢も許されるようになった。ただし、子供時代、俗に言う青春時代の自由というもの、それらは戻って来ることがなかったけども。

（だから、腹立たしいのかな。あのお姫様を見ると）

パタン。

イカルスは持っていた「攻略本」を閉じると、バレないよう距離を置きながら、再びアテナの後を追い始めた。

★　★　★

「しかし、偶然って重なるものなのね。まさか、またまたブロックの中に現状を打開できるアイテムが入っているなんて。しかも、海の世界に入れず困っていた時に」

「お前が先に進めないからって、ブロックに八つ当たりしたら、偶然な」
水のマナが込められた貝のネックレス。それを身につけると、どうしたことか人魚に変身してしまった。ちなみにネックレスを外すと、元に戻ることができる。
そんなものが、海の世界へと侵入するための池の前のブロックに入っていたものだから、私はそれをありがたく頂戴し、海の中を進むために人魚の姿に変身したのだった。
その前は土砂の中から偶然、空を飛べる魔法の翼なんてものも拾ってしまうし。
「どんな偶然だよ」
「日頃の行いがいいからよね、妖精さんが私を助けてくれたのよ。この間だって、オババからお土産として貰った金魚、そのままのお水につけちゃ大変なことになると思って、塩を混ぜてあげたし」
「金魚は淡水魚だろ⁉ 死ぬぞ⁉ そういうブラックジョークは笑う前にひくぞ⁉」
「え？ 死んじゃうの？」
ああ、だからオババが私の様子を見て、慌てて水を入れ替え、金魚を没収しちゃったのか。あの時は私の好意になんてことするのかしらオババむぎぎ……と怒りに身を任せて歯ぎしりをしたものだけど、なんだ、私が間違ってたのね。
尾びれを左右に振り、魚雷のように前へ。色とりどりの魚達と一緒に、珊瑚の並んだ水中を進む。

「ったく、お前はもう少し常識を勉強しろ」
「モンスターに常識を説かれるなんて、なんだか変な感じだわ」
「悪には悪の常識があるんだよ。人間にそれがあるように、モンスターにだって秩序はあるものなんだ」
　ヌーパーちゃんは、私の言いつけ通り、あの石盤を抱えたまま私の背中に乗っていた。おかげで少しだけ重たい。
「偉そうに。ヌーパーちゃんにモンスターの何がわかるって言うのよ」
「少なくともお前よりはわかるよ……」
　というか、さっきから私達ってば、水の中で喋りたい放題ね。
　私は人魚に変身してるからともかく、ヌーパーちゃんまで。
「しかも……ヌーパーちゃん、水の中って平気なのね」
「ああ、どうやら皮膚呼吸ができるらしい。試してみるもんだ」
　なにそれ。見た目はただのスライムなのに、彼の身体はよくわからない。というか、ゼリー状なのに皮膚ってあるの？
「まぁ、その程度の魔力は残ってたってことだ」
「あぁ、なるほど、魔法で……って、ヌーパーちゃん魔法使えるんだ」
「俺は得意だぞ。本気を出せば」

「だからなによ、その本気を出せばって、出せるなら今すぐ出しなさいよ。本当はそんなものないくせに、嘘ついてるんでしょ？」
ヌーパーちゃんってば、意味もない見栄を張るのは止めて欲しい。別にそんなキャラは立てる必要ないって思うしさ。
私としては、可愛い系のキャラを極めて欲しいんだけどな、ヌーパーちゃんには。
「いや、俺は本当にだな――」
本当に、何よ。そう聞こうとした時だった。
「フィッシャアアアアア！」
モンスターとの出会いは唐突に。恋がいつだって唐突で、ラブストーリーが突然ならば、こいつらがいきなり襲ってきても自然ってものね。デスフィッシャー、海に住む魚型のモンスターは、ヌーパーちゃんの弁明をさえぎるように突っ込んできた。
「な――アテナ！」
「わかってるっ！　てぇい！」
私は慌てず焦らず、手に持っていた黄色の剣を切り払うように振るった。ズシリと刀身から魚の体重を感じる。そしてそのまま表面を剥ぐように切り抜いて、一枚、二枚、三枚とおろし、切り刻んだ。
美味しそうなデスフィッシャーのお造りのできあがりだ。先ほど翼と一緒に拾った剣



は、青色のそれよりも随分お切れ味がご機嫌みたい。
それにしても、デスフィッシャーって食べられるのかしら？
「お見事だな。よく水中で剣を振るえるもんだ」
「まぁ、それも人魚の力ってことで」
ほんと、このネックレスって高性能。どうやらかなりの魔力が詰まっているみたい。
「しかし、いくら道具の力とはいっても、さすがに疲れてきたわね。泳ぐのには体力を使うし、戦うにも体力使うし」
水の中の運動は、陸地のそれに比べて体力を使う。そこに関しては、人魚に変身していようがしていまいが、一緒だった。
「モンスターはたくさん攻めてくるし。疲れてるんだから、少しくらい空気を読んでくれてもいいじゃないの」
「モンスターがお前の都合を見て襲いかかってくるのか？」
そういう空気の読み方って必要じゃないの？　私はそういうモンスターの方が好きだな。そんな事を思っていたら、空気を読んでくれたのか、海底から伸びた大きな黒い蕾を発見する。
「あ、あれって」
「ライフフラワーだな。へぇ、珍しい」

「こっちの世界にもあるんだ、ライフフラワー」
「あまり見かけないけどな。大抵モンスターどもが踏み荒らしてるし。特に、こんな状況の世界だと」
　ライフフラワーとは魔力のこもった魔法の花。蕾を開くとハート型の種がタンポポのようにゆっくりと飛び出て、身体の傷や疲れを癒してくれる。
「ライフフラワーを取らなきゃ」
　私はそれが咲いている方へと泳いでいく。私が蕾に触れるとそれがパッカリと開き、花を開かせる。触れると溶けてなくなる種子すべてを、掬うようにして触る。
「うわーっ、生き返る～！」
　心の芯からホッと、暖かくなる感覚。わ～、マジで気持ちいい。疲れが癒え、力がわき上がってくるのがわかった。モンスターによって受けた打撲が切り傷が、スーっと消えていく。長時間の水泳によって硬くなった筋肉もほどよくほぐれた。
　うん。元気はつらつ、気分爽快！　すっかり力は元に戻った。
　気力を取り戻した私は、これからどうするかを考える。何匹も何匹もモンスター達が攻めてきたんじゃ、さすがの私もちょっとタジタジだし。どうにか、上手くスルーできる方法はないものかしら。
「ねぇ、どう思う？　ヌーパーちゃん」

「言葉はちゃんと使えよ。なにがどう思うなんだよ」
「めんどくさいモンスター達をスルーできる方法。聖水的な意味で」
「意味がわからないが、そりゃ難しいんじゃないか。俺が本気を出せれば、そのくらい造作もないことだが」
また言ってる。本気を出せばって、出せない本気なんて本気じゃないってーの。
……まぁ、そういうところがかわいらしいから、それはそれでいいんだけどねっ！
「そうだ、帝王ダンテと名乗って相手を脅すってのはどうだ？」
「それ、ヌーパーちゃんが何回もやろうとして失敗してるじゃない」
駄目な実績が有りまくりの案じゃないの。
大体、モンスターが来る度にそんなことするのも、それはそれで面倒だ。もっとこう、大雑把に敵を、一気にスルーできるような方法。例えば敵の嫌がるなにかをつけるとか、見た目でビビらせちゃうとか。
う～ん、なにかないものかしらねぇ。
と、そこで私の視界に、小さな黄色いお魚さん達の姿が入った。なにやら周囲を警戒している様子で、ビクビクしながら群れを成している。
ああ、そっか、彼等にとってもモンスターって厄介な存在なんだ。地を這う動物や人間と違って、ああいった魚にはほとんど対抗手段がない。凶悪なモンスターに出くわし

たら、ただ逃げるしか方法がないものね。
そうだ、彼等に協力を仰げば。これって、ウィンウィンの関係って奴よね。
小さい頃に読んだ絵本。その内容を思い出した私は、その魚達にこう呼びかけた。
「ねぇ、ちょっとそこの魚達。私にちょっと協力してくれない？」
「？」
黄色い魚の群れが一斉にこちらを向く。
「邪魔なモンスター達を無視して先に進みたくない？　進路は同じみたいだし、分かれ道まででいいから、ね」
魚達はしばらく仲間達と向き合った後、その先の言葉を求めるように再びこちらを向いた。
「なんだ？　どうする気だ？」
「いいから、見ててよ」
ヌーパーちゃんの質問に、自信満々にそう答える私。
私は彼等に指示を出し、大きな魚の形をつくってもらった。そして、色の違う私が、その目玉の部分につける。
これで、アテナ版スイミーの完成だ。
「ね？　これだけ大きな魚だったら、モンスター達は迂闊（うかつ）に手が出せないでしょ？　こ

の並びで、速度を合わせて進めば」
「なぁ、これってさ」
「なに?」
「横から見たら確かに大きな魚かもしれないが、前から見るとただの魚の群れじゃないか?」
「あ」
　私はヌーパーちゃんの言葉に絶望した。

「さて、そろそろ出口だな」
　結局、面倒なモンスター達を蹴散らすことになったけど、なんとか海の世界も大詰めらしい。
「お前のあの案は全然意味が無かったな」
「うるさいわね!　……次はどんな世界なの?」
　私は怒りながら、恥ずかしながら、質問をする。
「次はマグマの世界……だったんだが」
「マグマの世界?　私、暑いところは好きじゃないわよ?」

寒いところも嫌いだけど。それにしてもマグマの世界って……活火山みたいな世界なのかしら？
「その翼、あー……なんてだっけ、たしかペガサスの翼とかいったかな。それがあるなら空の世界に行ける。マグマの世界をとばせるな。しかも、あそこには前勇者が保管したといわれる財宝も眠ってるし、寄っていって損はないだろう」
どうやら、マグマの世界には行く必要がないらしい。空の世界……ロマンティックそうなところね。それにこの翼、ペガサスの翼っていうんだ。これもなかなかに素敵。
「前勇者の財宝……ってことは、強い装備も眠っているのかしら」
「ああ、かなり強い装備が眠っているぞ、かつてこの世界を取り戻した時の装備なんかが安置されている。過去、前帝王を倒した時に使った、な」
それは楽しみだ。いくら私が強いからって、土の中から発掘した装備だけじゃ、悪の帝王と渡り合うのに不釣り合いというもの。
「やっぱ悪の帝王と戦うには伝説の武器とか、そういうノリって必要よね。ほら、なんて言うんだっけ、弘法はなんちゃらって」
「それは逆の意味じゃねーか？」
あれ、そうだっけ？
なんにせよ伝説の武器とか、そういう浪漫のある響きは大好きだ。

「と、ちょっと待ってよ。今、さらっと変なこと言わなかった？」
「ん？　どうした？」
「前帝王って――この世界は、何度も悪の帝王に支配されてるの？」
「そりゃ、帝王だって魔物の子だ。来たるべき時が来れば世代交代くらいはするさ」
いや、えーっと……。じゃあますますわけがわからないじゃない。
帝王ダンテは子供を産んで、その子が世界を統治するわけ？
「悪の帝王ってのがあちこちから発生してるのならともかく――そんな、血筋で継がれてるものなら、根絶やしにしちゃえばいいのに……」
「勇者がそんな非道な振る舞いする筈がないだろ？」
「でも、それで結局悪の帝王が世界を支配していたら、意味がないじゃないの」
救うって、どう救ったっていうのかしら。意味がわからない。
「そういうものなんだよ。人がいて、勇者がいて、悪の帝王がある。世界はそういうふうにできているんだ。幻想界に、その三大要素は欠かせないものなんだよ」
「いや、なによそれ」
わけのわからない解答で押し切られる。いや、悪の帝王がいるからこそ私は楽しい冒険ができているのであって、そこに文句をつける気はさらさら無いのだけど。
「そういえばお前は――」

「私は？」
　そこまで言って、ヌーパーちゃんが言葉を止める。
「なんなの？　自分は深いモンスターですよという自己主張？　意味ありげな台詞を途中で止めてのベタなキャラ立て？」
「いやいや、そういうわけじゃなくてだな。――まるで見計らったかのような周期で、伝説は巡り続けるものだな、と」
「なんなのよ。勝手に納得しないで。私にもわかるように説明してよ」
「いやいや、いいんだ。気にするな」
　だから、私が気になるんだってば！　なんなのよ、伝説って、周期って。
「ま、あの宝物庫にはパンドラの箱もあるし、回収していくべきだろう」
　ヌーパーちゃんが別の話題を持ち出してくる。
　話題を変えようとしてるのが丸見えだし……。
「……パンドラの箱？　なにそれ？　どんな箱？」
　でもまぁ、話したくないのなら仕方がない。乗ってあげるか。
「この世界に伝わっている伝説の箱だ。大いなる厄災、夢が詰まってた箱さ」
「大いなる厄災？　どういうこと？　夢が厄災って、え？」
「……少なくとも、そう思っていた人達がいたのさ。そして神も、な」

う～ん……またしてもよくわからないことを……。

ヌーパーちゃんは一人でうんうんと頷いてるし。

「まぁ、伝説の箱さ。伝説は凄いだろ？　だから凄い箱だよ」

伝説——確かに……伝説は凄いけども。浪漫だもの。

……………。

百の言葉より説得力のある一言だわ。伝説…………そうよね、伝説はもの凄いものだしね。

「じゃあ、急ぐわよ！」

私は伝説という名の浪漫に胸を弾ませると、先ほどよりも速度を上昇、急いで次の世界を目指した。モチベーションが上がると速度も上がる。やっぱ気持ちって大事よね。人参を垂らされ、先を急ぐ馬の気持ちもわかるってものだわ。別に私は馬ってわけじゃないけども。

そうして、いざ空の世界へ！　そう意気込んでいた、その時だった。

「逃がさないぜ、お嬢様！」

ビシィ、と、私の尾びれが突然なにかに縛られた。

「え!?　きゃ？　なに？」

海底から細長くてヌメヌメとしたものが伸びてき——タコの足？　ええっと、誰？

なんなの？
　やがて、海底が割れ珊瑚が迫り上がると、そこから巨大な赤いゴム鞠（まり）がご挨拶する。そしてそいつは、沢山の水泡とともに、その全身を現した。
　それは、ゴーレムと同じくらい大きなお化けのタコ。
「じゃっじゃじゃーん、ビクトリー国一のカッコいい俺様。ネプチューン様がここに参上だぁ！」
「ネ、ネプチューン⁉」
　現れたのはネプチューン。この世界に入る前にも私を邪魔してきた、基本軟派、実はスゴ腕の騎士だ。こいつ、なんでこんなところに……。
「知り合いなのか？」
「う、うん……。うちのお城のキザったらしい騎士よ」
「タコなのに？」
「本当の姿は人間よ。変身してるだけ。ふざけた奴だけど、滅茶苦茶強いんだから！」
　もしかしてこいつ、お父様の命で私を追って――。
「さてさて、ヤンチャはおやめになりまして、そろそろ城にお戻りになりましょうね？お嬢様」
　……こいつは厄介な追っ手が来たものだわ。ここだと、いつもの手は使えないし。普

通にやりあっても勝てる気は……だったら！
「あ、あんなところに――」
「アンピトリテはこんな世界にいるはずがないぜい？」
――ちっ、さすがに騙されないか。
「ねぇネプチューン、お願い、ここを通して。私はダンテを倒さなきゃいけないの」
「別にお嬢様が倒す必要はないじゃないじゃない？　そういうのは、この世界の勇者に任せておけばいいんじゃないじゃない？」
相変わらず軽い口調、声を聞くだけでむかっ腹が立つ。
「いやよっ！　ダンテは私が倒すの！　じゃないと、なんの為に私がここに来たのかわからないじゃない！　退屈なお城の生活なんかよりも、私は悪の帝王退治がやりたいのっ！」
「聞き分けのないお人だなぁ。でも、そんなところが結構魅力的ではあるぜ？　性的な意味で」
「私を性的に見ないでよ！　このロリコン！　ってか、さっきからあんた、私のお尻を足で縛ってるのよ！　セクハラよ!?」
私は剣を振りかぶり、尾ビレを縛っていた彼の足に一刀を浴びせる。
見事、彼の足は切り落ちて、ふらふらと海底に沈んでいった。

「あっらー、斬られちゃったのね」
とはいえ、まったく効いてない様子、余裕な素振りで暢気な声をあげるネプチューン。
すかさず私は距離を取り、剣を構えた。
「なんだこいつ、すっげーチャラいんだけど」
背中にしがみついたヌーパーちゃんが言った。
「ああ見えてすっごく強いんだからタチが悪いの。それと、『すっげー』とか『チャラい』とか、そんな言葉を使うヌーパーちゃんも、十分チャラいわよ」
ナルシストで、変態で、片思いで、武術の達人。それがネプチューン。
色んな要素を組み合わせてキャラ立てを目指してみました、みたいな存在である。
「ま、足の一本や二本、痛くないけど、ね！　はははははは」
なにがおかしいのかわからないけど、ネプチューンが笑う。ほんと、つかみ所のない相手って苦手だわ。人間として絡みにくいし。
「通してくれないって言うんなら、一本や二本じゃ済ませないわよ？　全部斬って半分お刺身にして、もう半分はヤキダコにしてやるんだから」
「できるもんならそうしてみればいいんじゃないじゃない？　それより俺だって、聞き分けのないお子様には、本気を出さざるを得ないってなっちゃうんだけど？」
ごくりと、自分が唾を飲む音がわかった。緊張しているのだ。こっちにきて戦ったど

のモンスターと比べても、ネプチューンの方がずうっと強い。
ネプチューンはといえば、その巨大なタコ足をうねうねと動かしこちらを牽制してくる。迂闊に飛び込めばやられちゃいそうだけど――ええい、ジっとしていても埒が明かないか。
「ヌーパーちゃん、しっかりつかまっててね」
「ああ」
私は意を決すると、全速前進、ネプチューンの本体を目指し一気に間合いを詰める。
「真っ正面からとは、芸がないな、お嬢様！」
私を捕らえようとネプチューンの足が迫ってくる。
「アテナ、右だ！」
「わかってるわよ！」
水を切るように刃を振るい、赤い触手に刃をうならせた。剣先から硬いゴムを斬ったような感触が伝わってくる。タコ足、タコ肉、タコのお刺身を切り分ける時も、こんな感じなのかしら？
「今度は後ろ！」
振り返り、後ろから迫っていた足を切り落とし、再び前を向いて前進。
「いくらきたって斬り落としてあげるわ！　ヌーパーちゃん、ナビよろしくね！」

「はいよ！」
わぁ、ヌーパーちゃんが頼りになる。一人じゃ対処しきれない相手も、力を合わせればなんのそのね。
図体はでかくても、ネプチューンが変身しているのはタコ。いくら怪物とはいえ、剣を持っていないネプチューンなんて、普段のそれよりも楽だわ。実は、案外楽に倒せるかも？
「ふふん、タコの武器が足だけだと思うなよ？　くらえ！」
え⁉　なにこれ⁉
ネプチューンが口から、なにやら黒いものを吐いてくる。墨？　タコ墨だわ⁉
私はそれをモロに顔面に浴びて、視界を失ってしまう。しまった〜！
「アテナ！」
私は咄嗟に顔面を拭いて視界を取り戻すが、もう遅い。つい先程のように、ネプチューンの気持ちの悪い足が私の尾ビレを捕らえる。
そしてそのままグルグルと巻き付かれ……。
「っ！　だったら、その足も切り落としてやれば！」
「それはダメだぁ、ダメダメだ。危ないお手々はジっとしておきましょうね！」
腕にも同様に、ネプチューンの足が絡みついてくる。

それだけじゃない、もう一本の腕、身体……胸！
ネプチューンの長くて太い、ヌメヌメとした足が、私の身体全体を這いずり回り、縛り上げてくる。
「ネプチューン、あんたなにを！」
「ここまでしておけばさすがに動けないよなぁ、お嬢様」
くぅぅ、徹底的にやるってわけぇ⁉
「って、ぐえ、俺は押しつぶされて！　タコ、タコ足やめて！」
背後では、ネプチューンのタコ足と私の背中で板挟みになっているヌーパーちゃんが悲鳴をあげていた。ビチャリと伸びたゼリーの感触。水で流されちゃたりしないかと心配になる。
ネプチューンが私達の方へと近付いてきた。尺に余裕のできたタコ足は、それを前へ前へと回して、その先端を私の頬へ這わせてきた。
「きゃっ、これって！」
や、な、なによこれ。
太腿（ふともも）あたりでウネウネ動くネプチューンのそれは気持ちが悪いし、あ、だから尾びれはお尻だって、つかこいつ、調子に乗って私の身体を触りまくってない⁉
「くぅぅ～、この変態～！　絶対お父様に言いつけてやる！」



「いえいえ、これはお嬢様を捕らえるために致し方のないことなのですよ。だから少しくらい、なぁ、俺様の華麗なタコ足捌きを受けてだな……」
もぞり、もぞり。
「ちょ、なに！　や、だからやだってば！」
くすぐったさと気色悪さで、身体がビクビクと震えあがる。
「お嬢様の身体を見れば、こういう悪戯をしてみたくなるのはこれ道理」
「道理じゃないわよ！　ああああああもう～」
「アテナ」
と、そこで背中で潰れかけていたヌーパーちゃんが声をかけてくる。
「エロいな」
「うるさい！」
なに冷静にそんなこと言ってるのよ。
とりあえずこの状況、どうにかしないと！
ネプチューンのこのセクハラを止めさせて、この足から逃げ出す方法。
う～ん……。私は考える、なにか良い方法はないものかと。こういう時魔法が使えれば（以下略）なんてことも思うけど、使えないものは使えない。ああ、本当に何度この後悔をすればいいの⁉

モゾモゾ。
「あああああ、もう、ネプチューンのセクハラで集中できない～！　いい加減にしないとお父様だけじゃなくて、アンピトリテにも言いつけてやるんだから！」
ピタッと、ネプチューンの足の動きが止まる。あれ？
「アンピトリテに？」
ネプチューンがその名前を口にして、固まる。
あ、そっか。私にセクハラしてるなんて惨事、お父様を誤魔化すことはできたとしても、アンピトリテに憶測されると大変よろしくない。
彼は、多少でもアンピトリテに疑われるのが嫌なのだ。そうよ、この世界にアンピトリテが居なくても……。
「そうよ。帰ったらチクってやるんだから」
「え？　いや、それは、その、困るんですけど」
ふふん、これはチャンスね。この脅しは効いてるみたい！
「とりあえず、チクられたくなかったら私をはなして。それでセクハラは許してあげる」
私のその脅しを聞いたネプチューンは、次第に脱力して、やがて私を縛っていたタコ足をはなした。
――やった！　これで自由に身体が動かせるわ！

だけど、これからどうすればいいのかしら。いくら今、精神的にダメージを受けているとはいえ、真っ正面から斬り込んだところでまたあの墨にやられちゃう気がする。
ネプチューンも私の発言で随分やり辛くはなっただろうけど、こちらだって良い打開策が思いついたわけでもなく。
ん～……なにか良い案はないものかしら。
「なぁ、アテナ」
「なによヌーパーちゃん」
先ほどまで潰れていた身体の形を元に戻して、ヌーパーちゃんが質問してくる。
「あいつって、多分トロいよな。あんな図体してるわけだし」
「うん、多分そうね。あんなに大きいから、身軽ではないと思うわ」
「だったら、逃げればいいんじゃないのか？」
ヌーパーちゃんの突然の言葉に、私の頭に疑問符の嵐。
「だって、現実は三次元だぜ？　ここは洞窟のように狭いわけでもないし、ハマドリュアスの時みたいに装置を破壊してどうとか、そういう状況でもないわけだ」
確かに、ネプチューンを迂回して先に進むことなんて、この広い海だもの、そんなに難しいことではないだろう。
水中のせせらぎ。三六〇度、見渡す限りのブルー。ああ、海の中ってこんなにも広い

んだと、今更ながらに感心する。
……………なんで真面目に戦ってたんだろう？
私は右を向くと、全速力でそちらに泳ぐ。グルリと旋回して海の世界の出口に向かうためだ。さっさと逃げてしまえばこちらの勝ちである。世界の出口は国境のようなもの。別に、定点的なにかがあるわけではない。ちょっと右側に泳いで、そこから真っ直ぐ奥に向かえばいいのだ。
「――⁉　ちょ、お前等、こら、待て！　って、このデカブツの身体じゃ追いつけ……ああくそ、こんなことなら空の世界で待ち伏せすればよかったぜ！」
後ろでネプチューンがなにやら叫んでいる。
だけど私は振り返ることなく、その場をずらかった。
「――ああ、こうなったら人間の姿に戻って…………ぐぼっ、うぼっ！」

「はぁ、はぁ。なんとかまいたみたいね」
「あいつがトロくて助かったな。ついでに間抜けで」
一度真正面から喧嘩を挑んでいった私達も、結構お間抜けな気はするけど。
「で、ここが空の世界？　空の世界ってわりには、なんだか普通の陸な気がするけど」

海を抜けると、そこには大きな陸があった。なんの変哲もないただの陸地に上がった私は、貝のネックレスを外して人間の姿に戻る。
「いや、ここじゃないよ。ここの上だ」
「え？　上？」
「ああ、ほら、翼を持ってるだろ？　空を飛べるペガサスの翼。あれを使って空を飛ぶといい。空の世界は、雲の上にあるんだよ」

「ないないない。武具があっても、パンドラの箱がない〜！」
空の世界。
ここは、かつて勇者が使用した武具や道具を安置してある場所。ただしそれは屋内ではなく、大きな雲を丸々使った野外の物置場といった感じ。というか、雲上の世界そのものが宝物庫のようなものなんだとか。
大きな雲の上なものだから驚くほど広く、さらには土地勘も掴めない。
「もうダンテの一味が持ち出したのかもしれないな」
ヌーパーちゃんが言った。
空の世界は他の世界以上に、ダンテ達の支配が進んでいた。いや、支配が進んでいる

というよりは、きっちりと監視していたという感じ？
「誰かにここの宝を持ち出されるのを恐れたのかもしれないな。お前の存在に気付いたか、あるいは……」
もしかしたら、幻想界のどこかにいる可能性のある『ダンテに刃向かおうとしている者』を恐れての行動なのかもしれない。どうやらダンテは、用心深い性格のようね。
この世界を守っていたはずの番人さん達は別の世界に追い出されてしまったらしい。
先程見かけたダンテの手先をぼこぼこにして尋ねると、そう教えてくれた。
「でも、本当にここにあるの？　そのパンドラの箱ってのが」
「確かにこの世界に保管されてたはずなんだがな」
一目で見渡せる宝物庫ならば、あったなかったがすぐに判断できるんだろうけど。
ペガサスの翼の力で空を飛び回り、あちこちを見渡しながら目標物を探したが、圧倒的なまでの白い視界に、ただただうんざりするばかり。うちの城の宝物庫よりも、断然広い！
「武具類はすぐに見つかったのにね～」
なにやら仰々しい台座に納められていた、剣と盾と鎧。
切れ味の良さそうな赤い剣に、獅子（しし）のレリーフの刻まれた盾。それに過去勇者が使っていたという、金ピカの兜と鎧。そしてなにより——。

「ねぇもう、箱は諦めても良くないかな。この指輪なんて、すっごい魔力を感じるし」
はめると力の湧いてくる、赤い指輪。きっと、魔力のこもった魔法の指輪だろう。
これだけ装備が潤沢なら、どんな敵が来たって大丈夫な気がする。だけど、ヌーパーちゃんはこう言った。
「ダメだ、あいつの呼び出したアレが厄介だからな」
「あれ？」
「人々を現実に帰す魔神、マドーだ」
「なにそれ。すっごく嫌な響きなんだけど」
人々を現実に帰す魔神って、どれだけ現実的なのよ。
「ダンテが契約した魔神だ。現実の波で、夢を消してしまう恐ろしい魔神。各地に設置されたダンテの装置は、その魔神の力でつくったものだ」
すっごく嫌な魔神だなぁ。
「そいつを倒すのに、パンドラの箱があると便利なの？」
「そうそう。パンドラの箱には、夢が詰まっているんだ」
ん？
「でも、大きな厄災がどうのって話してなかったっけ、その、箱の中身」
ふと、さっき言いかけていたヌーパーちゃんの言葉との矛盾に気付いて、そう質問し

てみた。厄災と夢じゃ、まるで意味が反対だ。
「夢ってのはな、昔の人間にとっては厄災だったんだよ。不必要な欲求を持ったが為に、他国に侵攻し、不相応な未知を探求しようとした。それは、闇の者だって同じことだ。人間の領土を求める。住処である地獄から這い出て、連結している他の世界を統一したいと思う。これは生命の摂理において、無駄なことであり、他の生命を脅かす厄災だ」
「夢が厄災？　そんなわけないじゃない。夢があるからこそ、人生は楽しいのに」
「その楽しいって気持ちが、本当は不必要なものだったんだよ」
よくわからないなぁ。
「ま、それはそれとして。じゃあなんで夢があれば、マドーに攻撃ができるわけ？」
「マドーは世界の夢を奪い取る反面、夢の力に弱いんだよ。悲観的な現実をウリにしているが故、夢を帯びた一撃は眩しすぎるんだ」
「な、なんだか、かわいそうな魔神ね……」
魔法の翼を利用しているとはいえ、空を飛ぶのには魔力を使う。そして、魔力の消耗は、そのまま身体の疲れとして現れるのだ。
飛行に疲れた私は、ポンと雲の上に足を着いた。雲は、まるでマシュマロのような足触り。軟らかく高級な低反発枕のように足を吸い込み、その跡を残すが、しばしの時間の経過とともにまた元の形に戻った。

「それにしても、海の世界は夢がなくなったままだったけど、よかったのかしら」
「まぁ、それはダンテを倒してからでもなんとかなるだろう。お前が無理でも、俺がなんとかしてやる」
「なによ偉そうに」
なにかできるわけでもないでしょうに。ヌーパーちゃんの癖に生意気だぞ？
「偉そうっていうか――あのな、俺は本当に偉いんだぞ？」
「いや、だからそんな形でそんなこと言われても」
どう見ても雑魚だし。対して私は、本当にそこそこ偉いんだけどね。なんてったって、王女様だし。
空は飛ばずに、そのまま雲の上を歩いて進む。うん、いや、ちょっと疲れてるのですよ。どこかにライフフラワーないかなー。
「――ふふふ、なにやら騒がしいと思えば、お客人か」
「ん？」
突然目の前の雲がぶわり。
「わわっ！」
ぶわさあああと、雲の中から現れたるは、巨大なドラゴン！　ロゼが見ればこれもイケメンなのかしら？　多分、ドラゴン的な意味ではすっごくかっこいい。

「どうしたお嬢さん、こんなところにやってきて」
「な、なにあなた！」
雲の中から現れたドラゴンは、私の前に飛んできてわっさわっさと、大きく翼を羽ばたかせた。彼のつくった風が、こちらに向かって流れてくる。
「キマイラか」
「キマイラ？」
「この空の世界の守護者だよ。宝を守る番犬さ」
守護者？　ゴーレムのようなものかしら。それにしても、見た目はドラゴンなのに、名前はキマイラ……？
「なるほど、こいつが戻って来ていたのか。どおりで、ダンテの軍がまだここに居残ってたわけだな」
「どういうこと？」
「ふふ、そういうことだ。ここに異変が起こったのを感じたのでな。戻ってきて見ると、賊が沢山忍び込んでいるときた。目についた奴はこちらで仕留めていたが、なにぶん数が多いときたものだ」
「それで、隠れていたと」
「失礼なスライムだ。窺っていたのだよ、奴等がいなくなるタイミングをな」

そう言うとドラゴンは、私達以外には誰もいない周囲を睥睨した。
なんて臆病なドラゴンでしょう。非常にドラゴンらしくないわ。名前も。
「ぬしらくらいならいつだって喰い殺せる。女にスライム、相手にとって不足はないわ」
「なに？　強そうだったら不足なの」
「我の自信がな」
なんて臆病なドラゴンでしょう。私は再度そう思った。きっと、ヘタレに違いないわ。怖そうな見かけとのギャップで、ギャップ萌えを狙っているのかもしれない。
笑いもせず、怒りもせず、落ち込みもせず、ただ自信満々にそう言い放つ彼は、きっともう開き直ってしまっているのだろう。
「して、ぬしらは賊か？　宝荒らしか？」
「失礼ね。私はアテナよ。ここにある装備と、パンドラの箱を頂きに来たの」
「なんだ。やっぱり賊ではないか」
むぐ。確かにその部分だけ聞くとそう聞こえてしまう。
「必要なのよ、箱と装備が。ダンテを倒すのに必要だから、それが欲しいのだ。世界を救うためなんだから、しょうがないじゃない。
「ん？　嬢ちゃんはダンテを倒す気でいると」

「そうよ。だって私、その為にこの世界にやって来たんだもの」
私は説明した。この世界にやって来るまでのくだり。私の特技や趣味、オババの小言の多さまで、等々。
今頃私のことを心配しているのかしらとか、なんだかそういうことがチラリと脳裏をかすめて、気付けばいらないことまで喋っていた。自覚はないけど、もしかすると軽いホームシックなのかしら？
私の話を聞いたドラゴン（＝キマイラ）は、しばし私の顔を見つめて——いや、ちょっと恥ずかしいなぁ——一時考えるような仕草を見せた後、こう発言した。
「空より来たりし異世界の姫。この世に暗雲蔓延(はびこ)りし時、世界に夢を取り戻し、知識と夢の大切さを学ばん。光と闇は調律也。夢と現実もまた、調律也」
「ん？　なんのお経？」
「お経じゃない、幻想界に伝わる伝説だ。別世界より出でし、勇者のな」
へぇ、勇者か。なるほど、そういう言い伝えもあったのね。空より現れし、別世界の勇者か。ふ～ん。なんてことを考えて自分の胸に手をあて、あれあれ。
それって誰かに似てない？
「ひょっとして、それって私のことなんじゃないの？」
「そうだな。確証はないが、条件は満たしている」

ドラゴンはそう答える。

なるほど、以前ヌーパーちゃんが言いかけた伝説ってのは、この話だったのね。だったらそうと、もったいぶらずに言ってくれればよかったのに。

私はヌーパーちゃんをジトーっと睨んだ。言葉は視線にこめたつもりだ。ヌーパーちゃんは私と眼を合わせると、その意図を察したのか、すぐに視線を逸らした。

「それで、パンドラの箱はどこだ？　あれが必要かもしれないのだが」

「あ、ごまかした！」

このスライム、面倒になるとすぐに話題をそらすんだから！

「気にするな、面倒だっただけだよ。深い意味は無い。本当だ」

だったら尚更、きちんと説明しなさいよ～。

「あれなら我が持っておるよ。ダンテの部下に取られないように守っておったからな。パンドラの箱は、この世界を創りあげた大切な大切な宝物」

と、そこでキマイラさん――さん付けは失礼かしら？　が答えた。

「じゃあキマイラさん、それをください。ムドーとか言う奴を倒すのに必要かもしれないんです」

「マドーだ、アテナ。それはゲームが違う」

ヌーパーちゃんがすかさずツッコミを入れてくれる。

もう、細かいわね。
「ふむ、これが欲しいとな。世界を平和にする為になら致し方ないが、いやしかし」
ドラゴンさんは顔を歪め、少し困ったような表情を浮かべると、再び熱っぽい顔つきに戻した。
「欲しければ、我を倒すがよい」
「えええ、なんで？」
「我はこの世界の守護者だ。そんな我が黙って宝物を渡したとなると、存在に疑問が生じるだろう？」
「そんなの知らないわよ。べつに、あなたの立場がどうとか私には関係ないもの」
「我には関係あることなのだ。我はこの場所を、特にこの箱を守ることに生涯をかけておるのだ。アテナよ、取れるものなら取ってみよ！」
ええいもう、とりあえずこいつを倒してゲットすればいいのよね。
襲いかかってくる彼を、しばき倒すことだけを考える。もう、空の世界のボスはこいつってことでいいわ！
「アテナ、上だ！」
ヌーパーちゃん、戦闘になるとそんな台詞しか喋ってないわね！　まるでロボットアニメの妖精気取り。

私は、上から迫っていたキマイラのヘッドタックルをひらりとかわし、ペガサスの翼の力でふわりと上昇。
「なにっ、飛ぶこともできるのか」
「ふーっ、危ない危ない」
動揺するキマイラ。
そういえば、彼と出会った時は地に足を着いていたから、私がこうやって飛んでいる姿は見ていないのよね。でも、この世界に来たってことは、空を飛べるってことになるんじゃないかしら？　まぁ、彼の頭の弱さなんてさておいて。
「こんな所でやられてたまるものですか」
でも、先程手に入れた武器と魔法の指輪、それを試用するためのいい機会じゃない。こいつで試しちゃいましょう。
私は、指輪に籠められた魔力を赤い剣に注ぐと、それを増幅させた。そして。
「炎の剣！」
赤い剣が、大きな炎を刀身にまとった。魔力で炎の力を付加した形だ。
私はそれを大きく振りかぶり一刀両断。斜め上から切り下ろした炎の軌跡が、キマイラの全身に熱い傷痕を刻む。
「ギャッ！」

私はあっさりと、彼を打ち倒した。

「また俺が持つのかよ」
キマイラさんに手渡されたパンドラの箱をヌーパーちゃんに渡す。
「そのくらいしかやることないんだからいいじゃない」
「しかし俺、石盤を持っているんだが。体の大きさ的に難しいぜ？」
「そこは気合で頑張ってよ」
彼はぶーぶーと文句を垂れながらそれを受け取ると、例の石盤と一緒に、ゼリー状の体に飲み込んだ。取り出した時、ドロドロに汚れてそうね。それにしょうがないこととはいえ、肩がかなり重たい。
「しかしお主が今回の勇者か」
「今回の？　前回や次回でもあるのかしら」
「まぁ、言われてみれば面影もあるか」
「面影？」
私の言葉に応えることもなく、一人でうんうんと頷きはじめるキマイラ。
この世界の方々って、会話を自己完結するタイプが多いわね。

「まぁ、確かに我が秘宝は与えたぞ、若き勇者よ。それさえあれば、あの厄介な魔神も容易く倒すことができるであろう」

そう言うと彼は、まだダメージが残っているのか、フラフラと空へと舞い上がっていった。そして頭上高く、その姿が豆粒くらいの大きさになるまで高度をあげたキマイラは、ここまで聞こえる声で――。

「では、また次の勇者を楽しみにしておるからな」

と言って、雲の向こう側へと飛んで行ってしまった。

私は、『次の勇者』の意味がよく分からずに困惑したものの、とりあえずお別れしとかなくっちゃと手を振って、彼を見送った。





「うぐぐ、アテナめ」

ダンテは、アテナがすぐそこまで来ているとの報告を聞いて焦っていた。

報告によると、海の世界を抜けたアテナは空の世界へと飛び、そしてその空の世界をも通過してしまったとのこと。ダンテの居る地獄の世界までやって来るのも時間の問題と思える。

「くっ、マドーだ、マドーを呼べ！」
「は、はい！　ただいま！」
ダンテは手に持っていたワイングラスを握り潰すと、部下であるミノタウロスに魔神を呼びに行かせた。
ワイングラスのガラスの破片と、その中身であった赤ワインが床にこぼれる。
「アテナめ、絶対にこの城には通さぬぞ」



第四章

地獄の世界と捕らわれの美女



「うーん、まさかこの季節にスケートを楽しめるとは思わなかったわ」

氷の世界の道は、まるでどでかいスケートリンクのよう。ツルツルと滑る氷の床で、モンスターと戦うのは危ないことこの上なかったけど、そこはほら、新境地のスリルにご馳走様、ということで。

「ほらほら、遊んでないで先を急ぐぞ。ったく、ガキだなぁお前は」

「わかってるわよ。なによ、ガキで悪いの？　ガキって素晴らしいのよ？　くだらない現実と向き合って、ただ疲れ朽ちていくだけの大人のどこが、子供より優れているって言うのよ」

「はいはい、わかったから。そういうとこも子供なんだよ、ったく」

そういうとこは、子供でいいんですよーだ。それとも、子供だったら子供扱いされることに、怒りの一つくらい覚えて見なきゃいけないのかしら？

やがて、どこかの街で聞いた氷の迷宮が見えてきた。なんでもあそこに、この世界の夢を吸収しちゃってる装置があるらしい。この次が待ちに待った地獄の世界ということで、一度休憩するためにも壊しておこうということになった。しっかりと休憩するためである。

「じゃあ、行くわよヌーパーちゃん」

「ちょっと待て」

と、その迷宮に踏み入ろうとしていた私を、ヌーパーちゃんが止める。
「ここはな、マッピングが重要なんだ」
「ん？　マッピング？」
「迷宮の中の床はな、一度踏むと壁にぶつかるまで、他の方向に動くことができないんだ。そういう魔力の仕掛けられた、特別な氷床が敷き詰められてるんだよ」
「またしても詳しいわね。今回はしったかじゃないの？」
「最近はずっとしったかじゃないだろ！　俺はジジョーツーなの！　詳しいの！」
ヌーパーちゃんが怒る。だって、最初の森の例があるし。
しかしジジョーツーって、なにそれ、うぷぷ。
「笑うな！　とにかく、そういうのあるんだよ。だから、紙とペンを用意して、どこからどこに向かうのか、どこに壁があるのかをきちんとメモしてだな……」
「大丈夫よ、私、そういうダンジョンは得意だから。ＲＰＧで随分と慣らしたもの」
「ゲームと本番を一緒にするなよ！」
「それに、紙もペンも、持ってきてないわけだし」
「なんだよ、準備が悪いな」
むしろ心配なのは、ぶつかるまで止まれないっていう現実よね。ゲームの主人公達って、ああいうところを抜け終わるころには全身打撲だらけなのかしら？　でもＨＰは減

ってないわよね？　なんて、どうでもいいことを考える。
「てぇい！　とぉ！　やだ、こいつ、剣が効かないわ」
氷の迷宮の奥にいたのは、巨大なムカデのお化けだった。というかこの世界、ボスといえばなんでも巨大ね。大きいものに立ち向かう小人という、いかにも小国の文人が好みそうなニュアンスかしら。それとも、大きければ強いと思ってる、ダンテの安易な発想かしら。
でも、大きければ強いというわけでもないし、能力の強さがそのまま戦力の大きさ、というわけでもない。
「アテナ、こいつ遠くからの攻撃に弱いぞ！　弓矢で狙うんだ！」
「うん、わかってる！」
近接攻撃無効化というチートな能力を持っていた巨大ムカデを、遠くから弓で射る。人間には知恵があるのよ。もう、考えるのには慣れて来たんだから。
――人間には思考という能力があるのだ、私はそれをこの旅でよく学んだ。

「ふぅ、これでようやく、明日は――」
「地獄の世界だな。長かったぜ」
山の世界、沼の世界、平原の世界、その他色んな世界を巡って、辿り着いた氷の世界。
そして、難なく迷宮に設置されていた装置を破壊した私は、この世界の町で休みを取ることにしたのだった。
今は、そこの宿屋の二階、一応二人部屋にて休憩中。モンスターと一緒というのもなんだか気持ちの悪いものではあるが、二人で旅を始めてもう一週間にもなる。私は、そういう状況に慣れてきてはいた。
ちなみに、一日の疲れを癒すため装備を脱いで、宿の用意してくれた寝間着に着替えている。
「これね、そのまま着ていいらしいの」
その宿が用意してくれた寝間着は変わっていた。なんでも、浴衣(ゆかた)と呼ばれる衣服らしくて、和の世界という、また別の世界の特産品みたいなものらしい。
私は下着を身につけず、それをそのまま肌の上に羽織ることにした。だって、着替えがないんだもの。それにしても、わざわざ寝間着を用意してくれるなんて有り難い宿である。
「和の世界はな、なにもかもが和というものの風味でつくられている世界なんだ。桜と

いう花がとても綺麗でな。『フジヤマ、テンプラ、ニンジャ、ゲイシャ、ヤクザ、セップク』、他の世界に比べて、色々変わったものが多いんだ」
「サクラ？　私の世界にも同じ名前の樹があるけど、一緒かしら？　それ以外は知らないわ。不思議な世界なのね」
「道を歩いていると、刀という特殊な剣を持った人々から、ツジギリという襲撃を受けることもしばしばだ」
「怖い。和の世界超怖い。モンスターより人の方が怖いじゃないの」
そんな和の世界トークに花を咲かせながら、私はビキニを脱ぎ、浴衣に袖(そで)を通す。
「そういえばヌーパーちゃん、今まで一度も確認取ってなかったんだけどさ。ヌーパーちゃんって、雄？　雌？」
「雄」
「やっぱりそうだよね～」
わかってはいたことだが、確認してみて少し恥ずかしくなる。私ってば、雄のモンスターの前で恥ずかしげ気もなく着替えてたんだぁ。
「なんだ？　今更恥ずかしくなったのか？」
「モンスターとはいえ、ちょっと恥じらいが足りなかったのかなって」
恥ずかしいというよりも、恥じらいを持ってなかった自分に少しだけ反省。うん、こ

んなんじゃ恋もできないわ。もっとも、今の私にとって恋なんて大して興味がなくて、考えるのはもっぱら冒険のことばかりだけど。
私は、ちょっとぷにょり気味なお腹をしばし揉みほぐしてから、ようやく浴衣の紐を結んだ。露出していた健康的な肌が、包み込まれるように隠れていく。
「俺があと少し若かったら、危なかったのかもな」
「ん？　危ない？」
「性的な意味で」
いやらしい意味で危ないってこと？　さり気なく今の発言、セクハラかしら。
「というか、ヌーパーちゃんっておじいさんなの？」
「こう見えてもな。いや、本当に」
スライムなせいで全然年齢なんてわからなかった。
「まぁ、次は地獄の世界！　さくっとダンテ倒して、さくっと帰っちゃいたいわね。そろそろお城に戻りたいし」
「ん？　帰りたいなんて珍しいことを言うんだな」
「ん、あれ、そういえばそうね」
自分で言って、自分でも不思議になる。私、なんで帰りたいって思ったんだろう？
「本当はホームシックなんじゃないのか？」

そんなことはないはず、なんだけどなぁ。
それとも、私の心の底に眠る本音は、故郷の方を向いているの？　確かに、連日の外泊続きで、ちょっとだけ胸がキュンとなって……。
………。
いや、違うわ。断じて違う。私は弱くない！
「そうよ、この胸の痛みはきっと、恋だわ」
「なにがだよ。というか誰にだよ」
「ずっと一緒にいる相手――って、ヌーパーちゃん⁉」
「なんでだよ！」
「そんな、初恋の相手がスライムなんて……」
いや、わかっているんだけどね。胸の痛みの正体なんて。
でも、なんでだろうね。認めたくないんだ。そういう感情。外の世界に一途に憧れて、お勉強から必死に逃げたりして、そうしてまだまだ、子供の自分でいたいなって。
夢を失わせる……人々から夢を奪う、恐ろしい装置。
そんなものつくらなくても、夢なんて勝手に少しずつ失っちゃうというのに。大人になれば、くだらなくなっちゃう、夢がなくなっちゃう、優しくなくなっちゃう。あれ、でも、ロゼのお父さん、夢を持ってたんだっけ？　わからないや。

うん、私のこの胸の痛みは。誰かにホームシックの話題を振られる度にビクンとうずく、この胸の痛みの正体は。
ホームシックを起こさない……そんな自分を寂しく思う、胸の痛みだ。

……はぁ。

夜。上手く眠れなかった私は、ベッドから起き、部屋の窓から夜空を見上げた。氷の世界に浮かぶ星々はとても幻想的で、星光が氷に反射して、輝いていた。
私は大きく溜息を吐く。考えまいとしていたことを考えてしまったからだ。そう、最近不意に訪れる胸の痛み、悩み。とりとめもない不安、嫌い。
例えばこの胸の大きさ。私はこれが好きでない。胸が膨んでるのは、少しずつ大人になっている証だから。大人になるのが怖いんだろうなぁ、私。冒険して、ドキドキして、ワクワクして。最近このワクワクの量が減った気がする。相変わらず冒険は好きだし、ドキワク感ってのはあるのだけども。
でも、それが少しずつ、薄くなっていってるのが、わかる。
怖いんだろうなぁ、夢がなくなってしまうのが。特殊な装置なんかにやられなくても、少しずつ、少しずつ、それが無くなってしまうのが。

こうやって冒険に出かけて、両親のいない夜を迎えても、それはべつに、痛いことなんかじゃなくってさ。昔はお父様とお母様、二人と少しはぐれただけで、とても不安になっていたものなのに。

なんだか、寂しい人間になっているみたい。だから私は、寂しいんじゃなくて強い人間になってるんだと思うことにした。そのことがまた、なによりも寂しかった。

………。

これは考えても決して答えの出ない悩みであり、問題であり……だからこうして、私はその『自分を否定する』悩みに対して、決してそうでないと言い聞かせ、行動するしかなかった。

そう、だからこそ私は、この冒険を成功させて幻想界に夢を取り戻す、そうよね？だって、夢の大切さは人一倍わかっている。それを失うことに怯えてる私だからこそ、その大事さってのは本当にわかってる。そして、子供のままでいたいって思う挙げ句、勉強から逃げ回って、それで——。

きっと、冒険ってのは、遊びってのは、子供であることの象徴だから。そうすれば夢が保持できるって思っちゃってたのかなぁ。

………。

って、やだやだ私。なんでうじうじしちゃってるわけ？

そうよ、私はアテナよ。夢を求めて、冒険を求めて、我が侭を貫く、可愛いお転婆姫じゃない。こんな感傷的なのは、なにかが違う！
特技は格技、趣味は冒険とゲーム。インドアもアウトドアも、なんでもござれよ！
人生、楽しんでいるんだから！
私は、思春期特有のどうしようもない悩みを胸の奥にそっとしまって、再びベッドに潜った。
――翌朝、私達は地獄の世界を目指して、街を後にした。





そんなアテナ達の動向を見守る、赤毛の男。
イカルスは、ようやくこの面倒事も終わりを迎えるのだと、深く安堵の溜息を吐いた。
「長かった……」
目立つような仕事は少なかったものの、イカルスは確かにアテナの先回りの為に苦労をして、お膳立てをしてきた。山の世界では登山道具をブロックの中に埋め込んで、沼の世界では長靴を、平原の世界ではラクダを……。
イカルスは、『ここまでやっても、あの能天気なお姫様は自分のことなんかに気付い

てないんだろうな』と思うと、ちょっと悲しい気持ちになってしまった。あれだけ助けてやっているのに、あろうことかそれを自分の力だと盲信しているのだ。

「勉強から逃げ回って、こうやって人を困らせてばかりで。あんなんじゃろくな大人にならないぜ、まったく」

イカルスはもう一度、一際大きな溜息を吐く。

「王妃様はまず、彼女のことをもう少しどうにかした方がいいと思うのだがねぇ。そう、安心して寝れるベッドがあるのに、お腹いっぱいのご飯が生まれながらにして保障されてるのに、それなのに関わらず、お姫様はまだものを求めなさる」

――自由や夢、ねぇ。この世界にそんな装置があろうと俺には効かないだろうな。そう考えると、この任務には適任だったのかもしれない。夢なんてはなから持ってないのだから。

「しかし、ようやっとこの旅も終わりを迎えるな、っと」

とはいえ、もしかするとここからが本番のようなものなのかもしれない。なぜなら、今から最終決戦なのである。

イカルスは近くの岩陰に身を潜め、アテナの背中が遠くなったのを確認し、尾行を再開した。バレないように、ひっそりと。

――と、その時だった。

イカルスが岩陰から身を出したその時、突然、アテナがこちらを振り向いたのだ。
「っ⁉」
イカルスは慌てて、再び岩陰に身を潜めた。
（危ないっ）
イカルスの身形（みなり）はアテナに知られている。アテナに見られると、尾行していることがバレてしまうのだ。それは避けなければならなかった。
——思春期の娘というのは、親の手助けを避けたがるものなのです。だから、バレないように、黙ってやるのがコツなのです。決してバレることのないように、イカルス。
そう、彼は王女様に言いつけられていた。
イカルスは「ふーっ」と大きく一度深呼吸すると、再びアテナの後をつけはじめた。

★　★　★

「しかしこれ、すごく持ちにくいな」
ヌーパーちゃんが先程手に入れた箱を、苦しそうにその全身で抱き込んだ。
おそらく、箱だけだったらそう苦しくはないのだろう。ハマドゥリアスを倒した時に手に入れたKの石盤、あれも抱えてたものだから、大変苦しそうだった。

身体がゼリー状である特性を生かし、全身を溶かし、広くなった体積でそれらかを囲みこむ。私の右肩から首の後ろを回って左肩へ、でろんと、垂れ下がるように。
つまり、私がヌーパーちゃんというネバネバの布を使って、石盤と箱を背負っているような、傍目から見ればそういう状況だった。
「なぁ、この石盤捨てちゃダメなのか？」
ヌーパーちゃんが聞いてくる。
「ダメよ、それもきっと、役に立つものなんだから」
「なにを根拠に言ってるんだ。俺はこんな石盤なんか知らねーぞ。確かに、変な魔力は感じるけどよ」
「ヌーパーちゃんが知らなくても必要なの。だって、それはきっと妖精さんが――」
と、そこで、背中に微かな視線を感じた。
「どうした？　アテナ」
と、突然後ろを振り返った私に、肩の上のヌーパーちゃんが質問してくる。
「いや、ちょっとね。妖精さんの気配がしたから」
「？」
素直に喜ぶのが子供なのか、煩わしいと思うのが子供なのか。少なくとも、ああいうことをされてるうちは、まだ子供として扱われてるということで。

子供でいたいから冒険をしているはずなのに、そう扱われるとちょっと頭にきて。
うーん、私、やっぱり難しいお年頃みたいだ。

その世界の大地は、灼けたように赤かった。真っ赤な太陽が禍々しい荒野を照らしていて、まるで度の過ぎた夕暮れ時みたい。
地獄の世界は手強いモンスターでいっぱいだった。私は、迫り来る敵達をちぎっては投げちぎっては投げ、全速力で先を急ぐ。右を見ても左を見ても、前を見ても後ろを見ても、モンスターしか見えないんだもの。足を止めれば、たちどころに袋にされてしまうだろう。目指すは、この世界の中心部にあるというダンテ城。
ミノタウロスの斧を避け、レッドソードで斬り返す。のろまな癖に図体は大きいカッサムは蹴り倒せばいいわ、どうせ起き上がれないもの。弓を持った髭（ひげ）親父、コーダーなんか、素早く近付いて斬りつけてしまえ。
「くそ、敵が多いな」
思うように進まぬ足に、ヌーパーちゃんが漏らす。
「さすが、城の近くまで来ちゃったからってことかしら？　警備が厳重よね」
「変なんだけどな、それ」

「そうなの？　でも、大ボスの近くなんだもの、こういうものじゃない？」

ほんと、今までとは比較にならないほどの敵の量。ペガサスの翼で空を飛んで一気に行こうにも、空は空でハネを生やした馬頭、ピュクルがいるし、それ以外も空を狙った弓兵がたくさん。地と空、安全そうな進路をその都度取って、少しずつダンテの城を目指すしかない。

「こういう危機的状況って、漫画なら『ここは俺に任せて後は――！』とか、そういうポジションが適当に片付けてくれるんだけども。そういうこと無いのかしら」

「人生がそんなに都合良く回ると思ったら大間違いだぜ？」

それはわかってるんだけどさ。でも。

――ええい、鬱陶しい！　ちょっとくらいは魔力を使っても大丈夫よね？

私は指輪に力を込め、その流れを剣に注いだ。魔力とは、自然界に蔓延するマナを身体の内に吸収して、新しい力を生み出す能力のことである。その、自然界のマナを溜める身体の中のタンクの大きさと、それを応用するための感性。それが、一般的にいう、魔法の才能だ。

私は、自分で言うのもなんだけど、才能に関しては非常に恵まれていた。ただしそれを磨くことをしなかったわけで、つまり魔法が苦手なのである。

でも、それを補助するための魔導具さえあれば、話は別なんだから！

炎の剣ほどの魔力を使用すると、この先ガス切れを起こす恐れがあった。だからアテナは手加減した。剣の先に魔力を込め、斬撃とともに魔力の塊を放出できるようにする。
「唸れ、必殺魔法剣！」
私の魔法剣が炸裂、剣の軌跡に沿って放たれた魔力の弾がモンスター達を一網打尽にした。魔力の弾は、ぶつかりもせず貫通し、一気に敵勢力を沈めていく。「ぎゃー！」なんて、ベタなヤラレ台詞を吐くモンスター達。やられるにしても、もう少しやられ方ってものがあると思うのだけど。
そうして、ひた走ること二時間くらいだろうか。やがて私の眼前に、悪魔の顔を模した山に匹敵するほど巨大な彫像が現れた。
いや、城だ。お城が顔のような形になっているだけ。丁度、城門が口のようになっていた。そういえば、開かずの扉も確かこんな形をしてたな。
「ねね、ヌーパーちゃん。ひょっとしてあれがそうなの？」
「ああ、そうだ。あれがダンテの城だ」
ドクンドクンと、胸が高鳴る。緊張しているのが半分、楽しみにしているのが半分。とうとうラストステージへの扉が開くのだ、ドキワクしないわけがない。そして、こういう気持ちが少しずつ失われてしまっている、なんにでも感動できる、なにをやっても面白いと思える、そんな感情が少しずつ薄らいでいることに、再度恐怖を感じる。

やっぱり、大人になんてなりたくないよねぇ。ううん、今はそんなことよりも、とにかくあの城を目指すことだけ、それだけを考えようよ私。
それに、いつまでもうじうじ悩み続けると、私の寿命がストレスでマッハだ。私はふんと大きく息を吸い込むと、城の門へと向かって大きな一歩を踏み出した。

うわ、なにこれ。お城ってよりも、洞窟？　あの城の門は、どうやら洞門だったらしい。眼前に展開されたのは、洞窟の世界のそれに似た風景だった。氷柱（つらら）のように垂れ下がった鍾乳石（しょうにゅうせき）が、天井に針をつくっていた。
「この城は一筋縄ではいかないんだ。色んな世界が連結しているからな」
「連結？　幻想界の世界間みたいにってこと？」
「そうだ。この城自体が、小さな幻想界みたいなものなんだよ。最初の洞窟を抜けると果てなき迷宮、そして森の世界、洞窟の世界――」
「ん？　森の世界や洞窟の世界って……同じような世界をまた巡らなきゃいけないってこと？」
「そういうことになるな」
なによそれ、どれだけ面倒なのよ。私、旅は好きだけど、同じところを何度も巡るの

はあまり好きじゃない。
「多少スケールダウンはしてるけどな。そういう世界が、ダンテの城には内包されてるってわけだ」
ゲームお得意の、小ステージメドレーって奴かしら。多分そこの奥には、各ステージのボスがもう一度待ちかまえているのよね。どういう原理なのか、わからないけど。
城の中に続く洞窟を駆ける。それにしても悪の帝王って奴は、なんでこうも自分のお城を迷宮にしたがるのかしら？　外に用事がある時とか困らない？　と、私はとみに疑問に思う。そういう作業は兵隊がやるものだし、大体敵が城内に侵入したら、その時点である意味負けでしょうに。
勿論、邪魔をしてくるモンスター達もいた。相変わらず、息つく暇もない襲撃の連続。半ば無意識的になってきた討伐作業を繰り返しながら、ただ終着点を目指してひた走った。しかし、こんなにもモンスターが必死に守ってくるなんて。ダンテって、モンスター達にそんなに慕われてるわけ？
と、やがて、洞窟の先に大きな扉が見えてきた。
「あれが果てなき迷宮への入り口だよ」
ヌーパーちゃんがそう説明した。そう、あれが果てなき迷宮への入り口かぁ。ふ～ん、なるほど。……と、そんなことを考えていると。

「――ッ⁉」

圧倒的で不快な気配が私を襲う。なにこの、身の毛もよだつような感覚は――。

私達の進路を阻むよう、扉の内からそれは現れた。一つ目の顔に、六本の手と一本の足が生えた気色の悪い怪物。胴体が無いというか、やや細長めの顔に、直接手と足がくっついている感じだった。

「あれがマドーだよ」

ああ、あれが例の――って、ダンテではないのね。

この世界の夢をすべて、食べてしまおうとしてる悪い奴。各地に取り付けた装置で集めた人々の夢を、餌にしている魔神。

奴の放つ気配に怖気づいたのか、さきほどまで私達を取り囲もうと、視界のあちらこちらから沸いていたモンスター達は、一斉にその気配を消した。

「でも、こんなところにひょこっと沸いて出るものなの？」

「きっとこの先への扉を守らされているのだろう。おおかたお前がここに向かっているとの噂を聞いたダンテが頼んだんだろう」

なるほど、独占契約を結んだのね。

しかし、それにしても――なんでしょうね、これ。

ちなみに魔神とは、この世に災いをもたらすとされている、はるか昔に人間に封印さ

れた悪魔の総称だ。だから今目の前にいるあいつは、かなり強いってことになる。いや、なるとかならないとかじゃなくて、気配でわかった。あいつ、強い。そこらのモンスターとは一線を画している。
「グオオオオオオオオオオ！」
マドーが気色の悪いうめき声をあげる。
——ごくり。
私は、大きく喉を鳴らした。
あれを、相手にしなきゃいけないのか。あんなおぞましい気配を持つ奴を……でも。
でも、そうだ、私はアテナよ。むしろこんな強そうな敵、それはそれで良い腕試しになるってものだわ。
うん、こういうのが欲しくて、私はここに来たんでしょ？　それに、悩んでる暇なんてない。だってあちらさん、やる気満々みたいだもの。
「ウオオオオオオオオオ！」
「アテナ、あいつもうやる気みたいだぜ」
「うん！　わかってる！」
マドーは六本の腕をこちらに向かって構えると、その腕を飛ばしてきた。腕は着脱式になっているらしく、勢いよく迫るその様はゴーレムとの戦いで体感したロケットパン

チそのもの。

私はその六本の腕をなんとか避けると、改めて剣を構えた。ほら、やれないことはなさそうだ。

「こいつなんかの力を頼るから、こんなことになっちまったっていうのに」

「ん？」

「ダンテの話だ。奴がダンテをそそのかしたのさ」

そそのかした？

一体どういうことなのだろう。まぁ、そのあたりは後で聞けばいいか！

「とにかく、あいつを倒しちゃいましょう。この世界の、幻想界の夢を奪ってる原因の一つが、あいつだもの」

「待て、アテナ！」

「大丈夫！」

人々の夢を餌にする魔神なんて、そんな恐ろしいことする奴はすぐにやっつけちゃうんだから。夢でドキドキしたり、ワクワクしたり、そんなのが嬉しいから、楽しいから、人は生きてるんじゃない！　ここは熱くなれ、なっとけ、私！

私はペガサスの翼で大きく跳躍。一気に間合いを詰めて斬撃を放った。私に余裕はなかったのだ。目の前のそれの圧倒的な恐怖に気押しされ、焦るように攻撃を繰り出す形

となる。
　カキンッ！
　だが、マドーの身体はまるで鉄のように硬かった。耳をつんざくような金属音とともに、刃が跳ね返される。
「え？　効かない？」
　思いっきり刃物を打ち付けた微細な振動。ジイイインと腕が痺れ、私は斬撃の際に浮いたその身体を宙で右往左往させた。
　たじろぎながら、地面に向かって崩れおちる形になる。
「だから止めただろ馬鹿！　箱を用意しないから！」
　あ、そういえばこいつって、パンドラの箱の力がないとなんとかって……。
　と、それに気付いたその時にはもう遅かった。
　私が剣を弾かれたその時、構えを乱した隙をつくように、マドーの六本の腕のうち一本が胸へと伸びてきて――腹部を貫いた。
「アテナ！」
　普段だったら、身体をずらして避けるなり、痺れる手を無理やり動かして庇ったりとかできたのかも知れない。でも、何故なのかな。さっきから凄く調子が悪いっていうか、そういったことがすべてできないような気になってしまって……。

鎧が割れる鈍い音が聞こえたかと思うと、生暖かい腕の感触がお腹に広がった。マドーの腕は私の鎧を突き破って、その内側まで入り込んできたのだ。

全身に走る鈍い痛みと、衝撃。どうでもいいけど、戦闘をする物語の主人公って、どうしてやたらと内臓が破裂するのかしら？

でも、わかった気がするわ。これがきっと、内臓が破裂するってことなのね。ほら、なんとなく、血っぽいものが胃から込みあがってきて、鉄っぽい味を感じるっていうか。

地面に向かっていた私の身体は、下方から昇ってくる彼の腕によってもう一度軽く浮かされる。そして、残りのマドーの手は、私の身体を使ってお手玉を始めた。段々と、意識が深淵に墜ちていく。

私は遠ざかる意識の中、「内臓が破裂する感覚」なんて中々経験できないことよね。これってトークの中で使えるわ。オババ的に言えば、いわゆるトリビア系モテテトークの一つなんじゃないかしら、なんて、そんなことを考えていた。

「おおアテナよ、死んでしまうとは情けない」

——あれ。

「だが、あなたが望むのであれば、私はあなたを生き返らせてあげよう」

あれ、あれあれ。
黒に染まった世界の中、どこからか女の人の声が聞こえてくる。
目前には誰もおらず、そもそも声の方向もよくわからず。直接脳に響いてくるような感じ？
あ、どうしたんだっけ、私。
ああそうだ、マドーのロケットパンチが私の身体を宙でフルボッコにして……。
意識が黒く染まっていって――ああ、そっかそっか、私あのまま死んじゃったのか。
だからこんな変な、なんでしょう、斧を落としたら金なのか銀なのか、そういう質問をしてきそうな半裸姿の――ほら、ひらひらの布地一枚しか身にまとってない、そんな女神的な人が私の前に現れて……。あ、声の主かな？
「どうするアテナよ。そなたは生き返ることを望むか？」
ええっと、そりゃ、生き返っていいのならそうしますけど。
でも、普通は人って生き返らないものでしょ？　残念ながら私は、スピリチュアルはあまり信用してない人間なの。
「そなたが望むのであれば、一度限りのやり直しの機会を与えようではないか」
えええ？　やり直せるの？　もう一回？　本当に？
そりゃ、可能ならそうしたいんだけど、そういう凄い願いって、やたらと代償が高く



ついたりしない？　ほら、私の命とか。
あ、でも、今の私は死んでるから命を求められても問題ないのか？　あああ、なんだかよくわからなくなってきたわ。
とりあえず、できることならお願いしたいけど。
「では、もう一度チャンスを与えよう。このチャンスは一度きり、決して無駄にはしないように」
あ、あなた誰？　というかここはどこ？　私はやっぱり、死んじゃってたの？
「私はKの石盤に眠る女神。失敗したチャレンジャーへ、一度だけ再挑戦を許す心優しき神です」
Kの石盤って、ああ、ハマドリュアスを倒した時に拾った。
「では、頑張ってください。――それ！」
そんな声が聞こえたかと思うと、私の意識は一気に引き戻され――。

真っ黒だった視界に白い絵の具が落ちたかと思うと、それは徐々に輝きだし、やがて視界が開けた。ダンテ城の中にある洞窟。天井の鍾乳石が見える。そこで、背中のひんやりとする感触から、自分が仰向けになっているのだということがわかった。

わ、これってもしかして、本当に命が戻っちゃったのかしら？　いや、自分がさっきまで死んでいたという保障はなくて、単に意識を失っていただけ、という可能性も否定できないのだけども。

「わ！　なんだ！　石盤が！」

横たわる私の顔の横で、ヌーパーちゃんが騒いでいた。当然ながら私の肩からは降りている。そして、そんなヌーパーちゃんが身体を包むようにして抱えていた石盤は白く光り輝いていて――。

やがて石盤は輝くのをやめ、その中心に大きな亀裂を走らせる。

そして、パリンと大きな音を立てて割れると、砂になって崩れ落ちた。

「割れちゃった」

「うわ⁉　アテナ⁉　お前生きてたのか⁉」

ヌーパーちゃんが驚く。

「生きてたわよ。って、やっぱり私死んでたの？」

「ああ、黒い血とか吐いてたしな」

黒か、確かにそれはやばそうだ。

「でも今は血が出てない？」

「石盤の効果で引っ込んだ見たいだが。その石盤、一体なんなんだ？」

なんなんだって言われても、私が知るはずがない。きっとそれを知っているのは、どこかで見守ってくれている妖精さんくらいだろう。
私は、これを私に届く手筈にしてくれたであろう妖精さんにそっと感謝をすると、もう一度立ち上がってマドーに剣を構えた。
「さてじゃあ、魔神退治といきましょうか。仕切りなおしよ」
「威勢はいいけど、身体がまだ震えてるぞ？」
「うーん、だってさぁ」
本気で怖いんだもの、あれ。
普段は物怖じしない私が、心の底から灰色のモヤモヤとした感情――不安に駆られていた。ああ、なんだかお腹がヒンヤリとしてきた。
「お前らしくもないな。夢を吸い取られてるんだろう。あいつは目を合わせた人間の夢を吸引する力がある」
夢を吸い取られてる？　ああ、なるほど、だからこんなに勇気が出ないのか。やる気というか、希望がグイグイと私の中から消えて無くなっちゃってる感覚。
「俺がいつもの力を出せればあんな奴簡単に倒せるものの。そもそも、元の姿なら今すぐぶっ殺してやるのに」
「だからなによ、本気って」

また、ありもしない力を盲信するヌーパーちゃん。
「あんなものがいたから、ダメになっちまったんだよ。もっとも、あんなものに頼った馬鹿が、一番悪いのだがな」
そうして、私のツッコミを無視したヌーパーちゃんは、顔をこちらに向け私に視線を重ねた。ジロリと、可愛らしいはずの瞳がきつく、似合いもしないシリアスなものへと変化する。
「まぁでも、無いものを強請っても仕方ない。今あいつをなんとかできるのはお前だけだ、アテナ」
「わかってるわよ」
ただちょっと、ビビってるだけで。うん、大丈夫だってば。私の夢は大きいもの。あんな奴に睨まれたくらいで、無くなるはずなんてないじゃない。
――大丈夫、だってば。
「箱を開け、アテナ」
「ん？」
「パンドラの箱だよ。あいつを倒すのに必要なものが、そこには詰まっているから」
そう言って、ヌーパーちゃんが箱を渡してくる。赤やら白やら、綺麗な宝石類で装飾された、上品な小箱。

ヌーパーちゃんに告げられて、私はそれをカパリと開いた。
するとそこから次々と光が飛んでくる。
「なに、これ」
「夢の光だ」
ああ、そうか。これが夢の欠片なんだ。ヌーパーちゃん曰く、世界に害を与えてしまった概念。
身体の底から、勇気が湧いてくる。夢は希望となり、勇気となる。失いかけていた気力が満ちあふれてきた。
一つ目の悪魔なんて、この力で一刀両断してあげるわ！
勿論マドーだって、私達のそんなあれこれをただボーっと待っているわけではない。一度元の位置に収めた腕達を再びこちらに構えて――。
「アテナ！」
「わかってるわよ！」
射出してくる！
六発の拳の弾丸が、こちらを目掛けて勢いよく飛び出してきた。
――落ち着いて私……ええい！
私は、一瞬呼吸を整えると、そいつらの軌道を見切り、剣で大きな弧を描いた。すべ

ての腕の軌道を含む、斬の道筋。刀身は面白いくらいにその腕達を吸い込み、呆気なくそいつらを切り払う。

先程はあんなに硬く感じたマドーの体、まるで、スポンジケーキのような柔らかさ。箱の力が効いているんだと確信する。

「今だ、アテナ！」

「ええ！」

刹那、私は一直線にマドーの懐目掛けて地を駆ける。そして――。

「でえええええええええええい！」

マドーの一つ目に向かって、思いっきり剣で突き立てた。

「グオオオオオオオオ！」

大音量の重低音が天井に反響し、あたりを揺らす。マドーはしばらく苦しそうにもがいたあと、その全身を砂に変え、パラパラと地に落ちていった。

マドーの姿は、断末魔とともに消えた。

その迷宮は、さながら石でつくられた遺跡のよう。果ての見えぬ石だたみの道が、一直線に暗闇へと続いた。黄土色の石壁には、時々悪魔の絵が刻まれた壁画が交じってい

たりして、大変気味が悪い。明かりは、等間隔で壁に下げられた蝋燭のみ。このような場所に下げているくらいなのだ、もしかしたら尽きることのない、魔法の蝋燭かもしれない。
　同じような景色が延々と続き、もしかしたらここは無間ループの呪いでもかけられているのかもしれないと不安になった。
「う～ん、さすがに飽きてきたわね……」
「仕方がないだろ。そういうところなんだから」
「で、本当にこっちであってるわけ？」
「俺を信用しろってば」
　とは言っても、本当に同じような景色ばかりが巡るので、本当に進めているのかどうかすらよく分からない。
「こっちで本当に正しいの？」
「だから、俺を信用しろってば」
　とか言ってて、一度同じ道をぐるぐるしちゃった前科があるしなぁ。
　私は大きく溜息をついた。しかもここ、なんだか蒸し暑いし、いや、割れた鎧は脱いじゃったから、多少はマシになったんだけども。
　――この淡々とした迷路の間にも、やはりモンスター達は私達に襲いかかってくる。

私はそれを適当にいなした。
「ねぇ、私思うんだけどさ。なんでこの世界のモンスター達って、こんなにダンテに従順なの？　ほら、モンスターって普通さ、もう少し各々が好き勝手やってるものじゃないの？」
私の世界に住むモンスターというのは、同種同士で群れて動くことはあっても、こうやって誰かに仕え動いたりすることはまず無かった。例えばそれは食料を得る為に人間を襲っているものだったり、もしくは単純な破壊衝動や残虐性、本能で動いていたり。
「それは、この世界のトップが優秀だからだよ」
「ダンテがってこと？　こんなに無茶苦茶なことしているのに」
「いや、あいつじゃなくってだな。ダンテはダンテで間違ってはいないが」
「どういうこと？」
「なぁに、じきにわかるさ」
ん、なんだか話を誤魔化された気がする。
「どういうことよ。ヌーパーちゃん、すぐに話を誤魔化しすぎなのよ」
「だってお前、俺が言ったことあまり信じないじゃねーか」
「信じてるじゃない、嘘丸わかりのもの以外は」
「だからそれが――ったく、もういいってば。どーせ後でわかることなんだ」

と言うと、ヌーパーちゃんはそれっきり説明してくれなくなる。
う〜ん、なによそれ。普通に説明して欲しいっていうのに。
「そういえばね、マドーって思ってたより呆気なかったね」
「一回死んだくせしてなにを」
「でも、魔神ってもっと怖いものかと思ってた」
「確かに、箱の力があったとはいえ、拍子抜けだったな」
ヌーパーちゃんも同調してくれる。
「でもまぁ、倒せたならそれでいいじゃないか」
「うん、そうだけど」
――――。
それから数刻。
やがて、無限に続くかと思えた迷宮の景色は本当に終わりを告げ、上と下に続く大きな石段が見えた。かたや上の階、もう一つは地下へと向かう石段だった。
「まずは地下へ行っていいか？」
どちらに向かうべきかわからずヌーパーちゃんの方を見ると、彼は私の質問より早くそう答えた。
「へー、ダンテの部屋はそっちなんだ」

「いや、ダンテは上だ」
「うん？　じゃあどうして下へ行くの？」
「ちょっと、確認しておきたいことがあってな」

「ここは？」
「この城の牢獄だ。帝王に仇なすモンスターや、人間達を捕らえておくためのな」
階段を下りると、そこには地下牢獄があった。階段から降りたその真正面に細長い鉄格子が広がっていて、どうやらその中に囚人を幽閉しておくらしい。
私も捕まっちゃったら、ここにいれられちゃうのかしら。
「ああもう、大変です、大変です、無理です」
と、そんな中、牢獄の一つから鳴き声のようなものが聞こえる。
「声？」
「あれは――」
鉄格子に近付いた。頑張れば数十人は収容できると思われる、一つだけの広い牢獄。その奥にポツンと、ただ一人、こちらを見る羽衣姿の女の人の姿が見えた。
「どなたか、ここにいらっしゃったのですか？」

彼女と私と、鉄格子を挟んでの距離まで近付く。薄明かりの蝋燭のみだったので見えにくかったが、それでも彼女が、とんでもなく美しい女の人だということがわかった。
私は彼女と視線を合わせる。彼女は、どこか消え入りそうな、そんな不安げな表情でこちらを見つめてきた。
「ティターン！」
と、肩の上のヌーパーちゃんがその女性に声をかける。知り合いなのかしら。
彼女は私の肩の上のヌーパーちゃんを見ると、不安げな表情から一転、驚いたそれへと変える。
「その声は……」
ん？　やっぱり知り合いなのかな？
彼女は一時考えるような仕草をした後、こう口を開いた。
「もしかして、ダンテなの？」
「ああ、俺だよ。さすがにお前はわかるんだな」
「それはそうですよ。ああ、それにしても何故、今までどこに行っていたのです？　それにその姿はどうして――」
「まぁ、察しはついてるんじゃないのか？」

「え、ええ。それはそうですが」

……ダンテ？　誰が？

ヌーパーちゃんが？

え？　なんで？　確かに最初会った時にそんなことを言ってたけど、それは冗談だと思ってたし。いや、今でもそう思ってるっていうか、この人はなにを話しているの？

大体それだったら、今この城を牛耳ってるのは誰って話に――⁉

「で、そちらの方は？」

「ああ、こいつはだな――」

第五章

夢のある世界



ATHENA'S WONDER LAND

牢獄の中の女と話すアテナ達を見守る赤毛の男が一人、イカルスである。彼もアテナの後を追いかけて、ダンテの城へと踏み込んでいたのだった。

「しっかし、あのヌーパーの正体が、ダンテだったとはねぇ」

なんとなくただのヌーパーでないことをイカロスはわかってた。ただのヌーパーが、おそろしく強力な闇の気配を放出するわけがない。が、魔力や気配の感知に長けていないアテナは気付けていなかった。もしくは強力すぎて感覚が一周してしまった、という可能性もある。

「……はぁ。しかし、とうとうダンテとの対決か。マドーとの戦いでもの凄い冷や汗が出たが――ったく――あの石盤を持たせておいて正解だったぜ」

Kの石盤。一度だけ死を無かったことにしてくれる、超レアなマジックアイテム。イカルスが王妃様より授かって来たものである。

が、アテナはもうあの石盤を持っていないし、イカルスにもストックが無い。さて、次そのような事態が起こったらどうするべきだろうかと、イカルスは考える。

「やっぱり、これの出番か?」

彼は懐に忍ばせていた、白い仮面を取り出した。マジックアイテムでもなんでもない、ただの仮面。顔を隠すための仮面である。

イカルスは懐に仮面があることを確認すると、再びそれを仕舞い、アテナ達の方を見

た。牢獄に囚われし女性とあのスライムが対話をしている。アテナはそれを聞いているようだった。
「――しかしお姫様、本当に楽しそうだよな」
アテナの微妙なお年頃故の悩みなど知るよしもなく、イカルスはそんなことを思う。でも、あながち間違ってはいないのだろう。
イカルスにはそれが悔しくて、うらやましく思えた。





「なるほど、そういうわけですか」
ヌーパーちゃんは、ティターンと呼ばれる美女に説明をした。私について、そしてこれまでの旅について。それを聞いたティターンさんは何度もゆっくりと相槌を打った。
牢獄の中、石畳の床に、ドレスを下敷きにしてしまわないように気を付けながら上品に正座する彼女。きっと育ちのよい人なんだと思った。
鼻が高く、顔立ちが良く、気品のある彼女。服は薄汚れてはいるものの、私の私服に負けず劣らず、高価なものに見える。
「それで、その方は伝説の――」

「ああ、そういうことになるな。ここまで一緒に旅して実力も見てきたし、間違いないんじゃなかろうか」

で、ヌーパーちゃんが彼女に事情を説明するのはいいが、今度は私が状況をわかっていなかった。

——なに？　どうしてヌーパーちゃんがダンテ？　この人は誰？

疑問が脳内をグルグルとまわる。

「だから、どういうことなのよ。私にもわかるように説明して頂戴」

「だってお前、俺がダンテって言っても信じないじゃん」

「そりゃ、いきなり言われたって信じるわけないでしょ？　私が実は男なんですって言うようなものだわ」

「でも俺は、お前が空から降ってきたって言ってたのを信じたわけだろ？」

「それはそうだけど」

肩の上の彼を見る。だって、どこからどう見ても、ただのヌーパー、言うなればスライム系モンスター。ただのスライムにしか見えない奴に自分が魔王ですって言われても、それを信用できるわけないでしょう？

ヌーパーちゃんはやれやれと小さく溜息を吐く。そして説明を始めた。

「俺は、今のダンテの父親なんだよ」



「え？」

このスライムったらまた、とんでもないことを言ったような。

「ダンテの父親？　え？　ちょっと待って、どういうことなの」

「言ったまんまの意味だよ。俺はダンテで、ダンテの父親なんだ」

「そして私は、ダンテの母親です」

ティターンさんもそう続ける。

えっと。ごめん、やっぱり意味がわからない。

ヌーパーちゃんの正体はダンテで、ダンテの父親？

……なにを言ってるの？

「ダンテというのは、この幻想界の地獄の王族に伝わる王の名前なのです。王族の人間は、王となった時に自らを、帝王ダンテと名乗ります」

ティターンさんが横から補足する。

ちょっと待ってね、ダンテがヌーパーちゃんで、ヌーパーちゃんがダンテで、今のダンテはヌーパーちゃんの息子で、ええっと、つまり——。

「ヌーパーちゃんはヌーパーちゃんってことよね？」

「なにを当たり前のことを言ってるんだ」

「ああ、ごめん！　頭がパニックってわけわからないことを……！　つ、つまり、先代

ダンテがヌーパーちゃんだったってこと⁉」
私の質問に、ヌーパーちゃんは黙って首を縦に振る。
「本名はダンテ＝アリギエ。そして今、この城の王座で無茶苦茶をやっているのがダンテ＝ルサ。俺の息子だ」
な、なるほど、本名からの帝王ダンテ、ね。源氏名とかではないのね。
「でも、ヌーパーちゃん弱いじゃない。スライムだし」
「これは俺の本当の姿じゃないんだよ。俺はな、あいつの魔法でこんな姿に変えられてしまったんだ」
と、ヌーパーちゃんがここで大告白。
「え？　魔法で？　ヌーパーに？」
「そうだ」
「どうして息子さんにそんなことされたの？」
「多分、反抗期ってやつさ」
反抗期、って。これまた随分と派手な反抗期だこと……。
――――。
「ちょ、ちょっと！　なんでそれを言ってくれなかったのよ」
「何度か言おうとしたけど、お前は聞く気が無かっただろ？」

だ、だって、そりゃそうじゃない！　見た目ヌーパーよ？
あー、でもまぁ、たしかにヌーパーちゃんの言うこと半分半分だった……かなぁ。
けど、でも、それはしょうがないっていうか……。
「あいつはまだダンテを名乗れる年齢じゃない。ところがだ、あいつは自分が帝王になりたいが為に、俺をこのような姿に変えて遠くの世界へ追放。その後、文字通り世界を無茶苦茶に荒らして回ったわけだ」
「私は、ちょっとお灸を据えてあげようと思ったら、クソババアと罵られ、およよ……ここに幽閉されてしまったというわけです」
ティターンさんがおよよと泣き崩れる。
なんて恐ろしい息子なんだろう。
「そして息子は、私達が病気で床に伏せたと触れ回ると、自分が新しい帝王となったことを公言しました。さらに彼は世界各地に例の装置を取り付け、この世界から夢をなくしてしまったのです」
「夢が無いということは、野心も無いということ。世界から夢が無くなってしまったものだから、モンスター達が反乱することもなければ、人間達がここを攻め入ることもない。平和に沈んだ世界ができあがったわけだよ」
「よく誰も妨害しなかったわね、そのダンテの活動。って、ちょっと待って、夢ってモ

ンスター達からも無くなっちゃってるわけ？」
「そうだぞ？　世界から無くなってるわけだからな」
「それって、モンスター的にどうなの？」
「あいつのことだ。何を取り付けてるのかも教えずに進めたんだろ。息子は、俺に似て欲望には忠実な奴だからな」
それ、誇れないことだと思うけど。
っていうかヌーパーちゃん、教育失敗したでしょ。
「夢なんて持たずに、ただ残虐に暴れ回っている奴、ハマドリュアスなんかがいい例だな。そういう単細胞しか、この世界には適応できない。そういう奴等を上手く手懐けて、今の体制をつくりだしたわけだ」
なんとなくはわかったけど……でもさ、それだと。
「ダンテの夢も無くなっちゃってるってことじゃないの？　それでいいの？　あ、ダンテってのは今のダンテね、ヌーパーちゃんじゃなくて」
ややこしいなぁ、本当に。
「それこそがあいつの狙いなのさ」
――？

どういうことだろう。
「あいつは夢を無くしたかった。世界は勿論、自分からもな。だからあの夢を喰べる魔神、マドーなんかを蘇らせてこんな事態をつくりやがった。くそっ、思い返すだけで腹立たしいぜ。俺がこんな姿でなければ――」
「まぁまぁ、寝込みを襲われたのならしょうがないじゃないですか。でも、困りましたね。いくら勇者が来たとはいっても、この世界はもうおしまいです。絶望です」
恐らく夢を失って悲観的になってしまうのだろう。ティターンさんってば、ずいぶんと後ろ向きな発言。
「大丈夫だティターン。必ず息子を元に戻して、帰ってくるから」
「いや、無理ですあなた。いくらあなたとはいえ――」
「大丈夫だってば」
そう言うと、ヌーパーちゃんは一呼吸置いて。
「伝説の勇者がいるんだぜ？　今まで、伝説の勇者が世界を正せなかったことはないだろう？」
私を見て、そう言った。
あ、そうか。私、勇者だもんね。
「え、あっと、どうも。――うん、そうよ。私がいるから、きっと大丈夫よ！」

なんとなく、そういう発言を求められてるような気がしたので、そう言って胸を叩いてみせた。

「…………」

ティターンさんはしばし黙って、私を見つめた。ティターンさんの瞳は青く澄んでいて、私はドキリとしてしまう。

「冒険を求める心。それはもしかすると、夢を探すという行為に似ているのかも知れませんね。だとすれば、あなたがダンテを倒すために此処にやって来たのは、必然なのかも知れません」

「え？」

「この世界に夢を取り戻してください、プリンセスアテナ。私はそれを期待することはできませんが、お願いすることはできます。いえ、無理な願いというのはわかってます。絶対に無理でしょう。でも——」

「でも？」

「もしかしたらとは、思っています。そしてあなたからは、そういったものを感じるような気も……」

——。

「はいはい、しつもーん」
牢獄を抜け、先程並んでいた階段を上る。どうやらこの先が、ダンテのいる場所に続いているらしい。そう、ヌーパーちゃんは説明した。
「なんだ？」
「ヌーパーちゃん達の口ぶりを聞いてると、なんだか頻繁に勇者がこの世界を訪れてるように聞こえたんだけど、そうなの？」
「そうだな。伝説の勇者ってのは、わりと頻繁にこの世界にやって来る」
「えええええ？」
それって、あんまり伝説じゃないじゃん。
「人間にもあるだろ？　反抗期」
「ん？　人によると思うけど……って突然なによ」
「大体その時期に、ほら、魔王の息子がな、暴れるわけだ。毎回な。人間どもを淘汰して幻想界を支配しようとしてみたり、今回の場合は夢を無くしてしまったわけだな。なにをしでかすかってのは、その時の次期魔王によって、様々だ」
まぁやりたいことなんて、魔王によって様々でしょうから……。
「あの装置が強引に世界中に取り付けられたのも、そういった一連の流れがあった末だ。

きっと俺の配下の重鎮達はこう思ったことだろう。またこの季節がやって来たのか、と」
「あまりよくないことやってるってわかってるなら、誰か止めなさいよね」
「俺の息子だぞ？　しかも反抗期でやたらと凶暴になってる。ヘタに逆らったら痛い目に合わされるかもしれない」
なんだか酷い話だ。反抗期だからしょうがないとか、それって大人としての義務を果たしてないじゃない。いくら相手が成長してきて、強くなってるっていっても。そうやって本当に構わなくなるから、非行というものが始まるのだわ。
大人というのは、もっと子供の行く末を考えて――。
「ん？　ってことは、ヌーパーちゃんも反抗期で暴れたの？」
「俺にもそういう時期があったよ。俺はこの世界を統一しようと考えてだな……」
さすがヌーパーちゃん、夢は大きい。
「あの時は、そうだな。お前くらいの、お前によく似た――」
「私によく似た？」
「……まぁ、あの時のことは思い出したくないからいい。というか、伝説のことを話すのはイヤなんだよ」
ヌーパーちゃん、なんだか伝説にトラウマがあるみたいだ。突然ゲッソリとした表情になったかと思うと、プイと顔を背けた。

「っていうか、悪の帝王って言うわりには、それ以外の時期は平和にやってるってことなの？　息子が反抗期の時に勇者が現れる、って」
「魔王がいて、モンスターがいて、人々がそれに対抗する。種族というものはだな、外敵がいなければ繁栄しすぎて、世界を食い尽くしてしまうんだ。光だけで、影が一切なくなったら、目に悪いだろう？」
　わかるようなわからないような答え。
「幻想界のモンスターっていうのはだな、幻想界のバランスを保つ為に必要な立派な要素なんだよ。時には悪さをして、人間達の敵意をこちらに引きつけて、怠けないように、殺し合わないように調整をする」
「んー、つまり、人に憎まれるのがわかっててそれをやってるってわけ？」
「元々そういう衝動や欲求を持ってる奴が多いってのも確かだがな。だが、結果的にはそうなっている。それを調整して、モンスターを統べるのが悪の帝王ってわけだ。悪にだって悪なりの正義があるんだよ」
　悪なりの正義って、これまた矛盾だわね。
「んー、憎まれ役ってしんどいんじゃないの？」
　私は聞いた。だって私だったら、人にいちいち憎まれたくないもの。
「それが世界に与えられた仕事さ。先祖代々伝わる、俺達のな」

悪の帝王なのに、随分と立派なのね。
「まぁ、それはいいんだ。さて、今からもう一周だぞ」
「ん？　もう一周？」
なにがもう一周？
「ダンテのところへ向かうんだろ？　もう一度森の世界と洞窟の世界と海の世界と――とにかく、今まで来た世界を進まなければいけない」
ああ、そういえばそうだったわね。
ティターンさんと出会ったりなんたりで、すっかりそれを忘れてたわ。
今度は私がゲッソリとなると、重たい足取りで石段を上った。
――そうして、階段の上。ちょっとした広がり。
そこにポツリとあった石の扉を開くと、中からはそれまでの景色とは一転、明るい新緑の風景がお目見えした。
「わぁ、本当に森の世界ね」
「良かったじゃないか。元々冒険を求めてこの世界にやって来たんだろ？　一度で二度遊べてお得感があるぞ」
「ゲームだったらいいかもしれないけど、リアルでこういう素材の使い回しみたいな構造は好きじゃないの」

とはいえ、文句を言ってても始まらないか。
私は気を引き締め、森の世界への一歩を踏み出した。

「いよいよ、ね」
「ああ」
ようやく、ようやく、ようやくだ。
地獄の世界、ダンテの城、そのダンテの間、へと続く扉。私達はそこに辿り着いた。
当初地獄の世界に着いた時、もうゴールのような気分になった。
でも、ダンテの城は遠くて、その城の中はもっと長かった。本当に長かった。途中で夢を失いそうになった（比喩ではなく、本当に）。
そこで取り出しましたのがパンドラの箱。あれには空気ボンベのように夢が詰まっていて、それで息継ぎをしつつ、ようやくここに辿り着けたのだった。
二回目の世界達を抜けた先は、本当の本当に、お城のような場所だった。突然ボス戦に突入しても対処可能な広間。ふとした拍子で動き出しそうな甲冑が飾られ、レッドカーペットが続く先には木製の大きな扉があった。ミルクを混ぜたコーヒーのような色をした荘厳（そうごん）な扉には、骸骨（がいこつ）の装飾が飾られたノブが付いていた。

私は骸骨に手を伸ばすと、それを回した。ギギギと扉が軋み、内側から重たく冷たい空気が漏れる。両開きになった扉の先に見えたのは、仰々しい玉座に鎮座する、体長三メートルはあろうかという大男。

あれが――魔王ダンテ！

私達を倒すため、迷宮内に出払ってしまっていたのか、周囲にモンスターの気配は感じられない。

ダンテは私達の姿に気付くと、ギョッと驚いた表情になってこう言った。

「っ！　本当に来たのか、プリンセスアテナ」

左手には剣、右手には盾。角の付いた頭が三つあって、声を出せば三つの口が同時に開いた。上半身ははだけており、紫色の肌が見える。下半身はライオンのよう。

「久しいな、息子よ」

私の肩の上に乗っていたヌーパーちゃんが床に飛び降り、ダンテの元へと近付いていく。って、ヌーパーちゃんもダンテだっけか。

ヌーパーちゃんの声を聞いたダンテ（ジュニア。ややこしい）は、その表情を驚きのものへと変える。

「っ！　もしかして、父上⁉」

「そうだよ。お前、よくも俺をこんな目に合わせてくれたな。ただで済むと思ってるの

か？」

私もヌーパーちゃんの後を追い、玉座の前に進み出た。

「くそっ、世界の果てに飛ばした筈なのに、何故」

「誰も俺に気付いてくれなかったから苦労したがな。父を甘く見過ぎたな」

私に連れて来て貰ったようなものなくせに、よく言うわね。

「まぁ、他のモンスター達は気付いてないようだったし、苦労したが……」

「そりゃ、普通はスライムが帝王だなんて思わないしね」

「くっ……！」

「さぁ、俺を元の体に戻して貰おうか！」

床を這うスライムが、小さな図体で巨大なダンテに向かって指図する。

「どうして、お父上はそんなに活力が……」

「ふんっ、悪の帝王となる器の者が、少々あの装置に晒されたくらいで夢を失うものか」

凄い、なんだか説得力ある！　いや、見た目には説得力がないけど！

対するダンテは、あーんな小さなスライムに向かって、ビクビクすることしきり。

「ふん、夢を失ったお前など、このアテナの相手ではないよ」

そっか、ダンテも夢を失ってるんだ。他のみんな同様に――って、ちょっと待って。

「倒すのは私なのね」

「そりゃそうだろ、今の俺があいつをやっつけることができるわけないし。お前があいつを倒して俺を元の姿に戻させるんだよ。ここまで連れて来てやっただろ？」
なによ偉そうに。まぁ、私の目的はダンテを倒してこの世界を平和にすることだし、別に構わないんだけどさ。
「くううううう、くそっ、くそっ」
ダンデはそんな私をどうにかするわけでもなく、剣と盾はそのままに、地団駄を踏み続けていた。夢が無くなってるせいか、私達に危害を加えることもできない模様。
あの調子だったら、サクっと懲らしめちゃえるわね。
「まぁ、ちゃっちゃとやっつけて、ハッピーエンドといっちゃいましょうか！」
私は剣を構える。
「っ……！」
ダンテも私の方に向かって剣を構えた。その表情はどこか怯えてるような――覇気のないもの。
――さぁ、ラストバトルよ！
私は意気込み、ダンテに向かって跳躍した、その時――。
「夢は、夢は、夢は許さない。絶対に、絶対にだ！」
突然、ダンテが表情を険しいものへと変え、私に向かって大きな剣を振るった。

「アテナ！」

ヌーパーちゃんの声が聞こえるやいなや、私は咄嗟に身体を投げ出し、それを避けた。ごろごろと床を転がり、慌てて立って体勢を立て直す。

なに、こいつ、やる気がないように見えたけど——突然殺気が！

「って、危ないわね～。いきなり斬りかかってくるなんて」

「俺はこの世界から夢を無くすんだ。その邪魔は絶対に許さない。誰にも邪魔させない。いいか、誰にもだ」

彼は念仏のように、許さない、許さないと、ぶつぶつと唱え始めた。まるで、怨嗟。何かを呪っているかのような、黒い言霊。

「俺は夢という存在を許さない。あれは信じると裏切る、この世界の害だ。絶対に、絶対に、絶対に、絶対に許さない、許さない、許さない、許さない」

「ど、どうしちゃったの、あれ」

先程まではそんなことはなかったのに、ダンテの身体から、黒いオーラのようなものが出始める。すぐに私は、それは彼の内側からこぼれる、黒い魔力なのだということに気付いた。

そう、身体の内に収めるのが困難なくらいの、どでかい魔力。

「こいつ、マドーと契約した時に、心を売ったんだな」

そう、ヌーパーちゃんが説明する。
「ええ？　心を売った？」
「そうだ。この世界の夢を食い尽くすためにな。心を売り払ったあいつは、自らの内にマドーの一部を潜ませたのだろう。ああ、だからさっきのマドーは、あんなに弱かったのか。なるほど、油断したとはいえ、この俺が馬鹿息子に魔法でやられたのは――」
「よくわからないけど、マドーの力を借りて凶暴になっちゃってるってこと？」
「そうだ。というかお前、わからないことが多すぎだ」
だって、物知らずなんだし。もう口癖みたいになっちゃってるんだから、しょうがないじゃない！
「夢は、夢はすべて破壊しつくしてやる！」
そう言うと、彼は三つの顔面を、ブーメランのようにしてこちらに飛ばして来た！
首から頭が離れて、ミサイルのようにして発射してきたのだ。
「きゃあああああ！　グロテスク！」
私は思わず叫んだ。
「アテナ、盾！」
そういえば持っていたわねと、私は盾で顔面を防いだ。だが、ダンテの顔攻撃の重圧は凄く、持っていた獅子の盾にヒビが入り始めてしまう。



「きゃ、ちょっと、こいつ元勇者の装備なんじゃないの⁉」
「年季入ってるしなぁ……ダメになっちゃったんじゃないのか？」
ええぇ、そんな。
「ッ！」
まるで生き物のように、いや、きっと本当に生きているのだろう。ダンテの頭は私の盾に食らいついてきて、まるでスッポンのように離そうとしない。
私も負けじと盾に力を込め踏ん張り、なんとかそれを打ち返した。打ち返した顔面達は、やがてダンテの首へと戻って行く。
「って、強いじゃない、あいつ」
「そりゃ、俺の息子だからな」
「なんでもっと弱く育てなかったのよ！」
「んな無茶を言うな！」
ダンテが再び顔を飛ばして来ようとしたので、私は咄嗟に傍の石柱の陰へと隠れた。
「大体、なんであいつあんなに憎しみに染まっているのよ。なにがあったの？」
「ふられたんだ」
「え？　あ、あぁーっ」
私は思わず間抜けな声をあげてしまった。

そうだ、そういえばそんなことありました。って関係してたんだ！
「悪の帝王、モンスターでありながら、人間の少女に恋をしたんだよ。あいつは一生懸命その女の子にアプローチをした。どうにかその彼女の気を惹こうと、適度な筋トレ、お風呂での洗顔、勿論美容室にだって通った」
「洗顔、美容室って……」
顔が三つもあるのに。って、三つもあるからこそ、なの？
「それまでやりたいことなんてなく、ただ生まれたまま、周囲の言うように次期悪の帝王候補として育てられてたんだがな。その時ようやく、あいつは夢という言葉の意味を知ったんだ。無味乾燥な日常に色が灯ったと、あいつは言ってたよ」
なんだそれ。意味がわからない。
そんなことが、この事件の発端なの？
「だけど叶わなかったんだ。頑張ったというのに、あいつはふられてしまった」
「そう、頑張ったのに、夢は叶わなかった。無理なんだよ、たとえ願い事ができても、才能や環境が伴わなければ、叶うことはない」
⁉　私達の会話を聞いていたのか、突然割って入ってくるダンテ。彼は、自分からその説明を始める。
「それでも最初は、次があるさと思った。だから、次を探して世界中を旅し、アタック

を続けた。ふられても、ふられても、次の恋があるさと思い、運命の人を探した」
　強い、強い口調だった。怒りを感じられた。一人に固執せず運命を求め続けるあたり、どこかロマンティストにも思えた。
「だが、百人を越えた時、俺は思った。これはいくら続けても無駄なんだと。何故なら俺は、ブサメンなんだと」
　そこまで言い切ると、ダンテは私の目を真っ向から見た。どうだ、それが真相だ、と言わんばかりに。
……な、なんてこと！　魔王ダンテは、女に振られ続けてあんなことになってしまったのね！
「だから俺は、この世界中の夢を消してしまおうと思ったんだ。夢が無ければ、悲しみはなくなる。くだらない希望なんて忘れてしまえば、そういうものを持たないようにすれば、変わろうとしなければ、死にたいとまで思い詰めてしまうような、深い悲しみはなくなる！」
　ダンテは力説する。
　――なるほど。
　ロゼもダンテに惚れられた一〇〇人のひとりってことね。で、ふっちゃったものだから、ゴーレムをあんなふうにされた、と。

「俺の心を奪い取ってしまう、そんな恐怖を与える夢なんて、夢なんて無くなってしまえばいいんだ！」
そうか怖……いからか。
悲しくなるのが怖いから、こういうことをやってるんだ。
きっと、私が夢を持っているふりをすること同様、ダンテも逃げ道をつくろうとしているのだろう。自分を納得させるための、逃げ道を。
なにかから逃げる為に、そういうことにしてしまおうという自己完結。
胸の中にモヤっと残る気持ち悪さから逃げ回ろうとするその姿勢は、誰かに似ているような気がした。
――『誰か』。そう、私だ。
「ふんっ、お前の夢なんて奪いとってやる！」
そう言うと、ダンテは私の目を三つの顔六つの目で、同時にギリっと睨み付けてきた。
「え、えっ⁉」
すると私の中から、夢というものが消え去っていくのがわかった。

夢、という曖昧なものを守るために、ここまでやってきた。

夢なんてものは持つと裏切られることもあるし、時にはそれを追い求めるあまり、間違ったこともやっちゃうことになるのかもしれない。
でもきっと、私にはそれが、とても大切なものだと思えて。
夢が無くなると、なにもやる気がなくなる。なんでそうなる？
きっとそれは、楽しいと思えることがなくなってしまうから。
淡い、パステルピンクの胸の高鳴りが、どこかに飛んでいっちゃうから。
そうなってくると、自分がなにをしているのかとか、なにを探しているのかとか、わからなくなっちゃうから。
うん、今の私、どこでなにをしようとしてるのか、わからない。
あれ、あれれ、でも、ちょっと待って。そもそも夢がなくなる世界で慌てなきゃいけなかったということは、なにも心配することもなく、それを持っているということになるのではないだろうか。
私は、夢を持っていたのだ。別に、危惧するまでもなく。恐怖するまでもなく。
そして、それが失われてる今、私はただダンテの『夢を奪う視線』に立ちすくんでしまって。
うん、そっか、でも、これはこれで悪いことはないのかもしれない。
確かに悲観的にはなってしまうけど、もういっそのこと夢を失ってしまえば、夢を失

うかもしれないとか、無くなっちゃうかもしれないとか、そういうぐちゃぐちゃっとした不安から逃れられるかもしれないから。
それはとても、楽なことではないだろうか？
次第に何も考えられなくなってきたし、いっそこのまま——。

「アテナ！　なにボーっとしてるんだ！」
はっ！
肩の上のヌーパーちゃんにそう叫ばれ、ボーっとしていた自分から立ち上がる。
気付けばダンテの持つ剣が、私の頭をかち割ろうと頭上に大きく振り上げられていた。
って、や、やば！
さっきマドーに殺されたばかりだというのに、また死んじゃうっていうの？　私。
しかも今回は石盤も持ってない。
死ねば確実に死んじゃう。いやそりゃ死ねば死んじゃうんだろうけど。それが当たり前なんだろうけど！
お得意の身投げをやろうにも、タイミング的に間に合わないようなこの状況。剣で受け止めようにも、盾を構えようにも、時間が足りないその刹那。ほんの一瞬のはずなの

に、まるでスローモーションのように時間が駆け巡る。
諦めるって行為は、とことん私に似合わないことだと思ってるけど、いやでも待って、この場合はしかしっ……！
私は目を瞑った。
だってそうでしょ、瞬時にできることといったらこのくらい。目を瞑って目を開けば、今のこの状況が夢オチで済まして貰えるんじゃないかなんて、かくも逃避的な行為に走ってしまうことくらいだ。でも、そう思いこむことは、中々難易度が高かった。やり残したことが急に気になって来ちゃって、両親への孝行が足りてないんじゃないかとか、オババにもっと優しくすればよかったなとか、なに、そういうの？　ああ、ちょっとこれ、どうしたらいいのよ。やだ、やだ、まだ死にたくない。どうにかしなきゃ、でもどうやって！
——その時だった。
「ここまで来てなにやってんだか、お姫様」
私はなにか暖かいものに包まれ、宙に浮く感覚を覚える。
え⁉
「ほら、さっさと起きて立つ。こいつはお前が倒すんだろう？」
目を開くと、そこには仮面を着けた騎士がいた。騎士が私を抱えて、ダンテの一刀を

浴びぬよう、素早く連れ去ってくれたのだ。ダンテの大剣は宙を切り、石の床を叩いてカキンと音を鳴らした。
「死にたくなかったら立ち上がりやがれってんだ。ったく」
「あ、あなたは？」
「通りすがりの仮面の騎士だ」
バラを携えて舞踏会にでも出場しそうな、そんな白い仮面。
彼は私の手を握り立ち上がらせた。
あれ、でも、声にどこか聞き覚えがあるような……。それに、暖かくて大きな手。肩まで伸びた赤毛もまた、どこかで見覚えがあって。
んんっと確か、お母様の使いの――。
「お前は、その程度の奴だったのか？」
彼は私を抱えたまま、ダンテの様子をうかがいながら距離を取る。
「あんなのに睨まれる程度で、そのヤンチャな心を失ってしまうような奴だったのか？」
「え……？　いや、あんなのって」
まがりなりにも、悪の帝王だし。
肩の上のヌーパーちゃんは仮面の騎士を見て、ポカーンとしている。
「夢を失うことに怯えるな。夢なんてものはだな、生きてりゃ沢山沸いてくるし、変わ

るものだ」
「え……？」
彼は、私の身体を地面へと下ろした。
「お前は怯えてるんじゃないのか？　誰かに夢を奪われたり、自然となくなっていっちゃうことが。そして今は、夢は時に人を変えてしまうほどに裏切るものだということを知って、困惑している」
「そ、そういうわけじゃ――」
ある、のかな。
結局、夢の取り扱い方について、私は悩んでいるのだと思った。
もし夢が、ああやって裏切るものなのであれば、それに固執するのは間違いなのかもしれないし。でもそもそも、少しずつ無くなっているような気がしたこの夢を、どうすればずっと持っていられるのか、私はそればかりを考えていて――。
「それが生きるってことだよ、健康的にな」
彼は語った。なんで私、見知らぬ人に助けてもらった挙げ句、説教めいたことをされているのだろう？
「夢を見失わずに、また、見失っても生きていけるようになること。それが大人になるってことで、ものを知るってことだ。いいか？　大人になるってのはなにも大切なこと

るのかを考えて、子供の頃よりももっと大きな夢を見ることだ」
　彼は不敵に笑って――でも、ちょっと悲しそうに――こう続けた。
「情報を整理するのに、もしくは行動を起こすのに必要なのが知識であり、能力だ。あいつは自分をブサメンだからと言った、だが本当にブサメンは女性と付き合えないか？　いや、ありのままの自分を受け入れて貰えることはないとしよう。それでも付き合うという目的に関しては、本当に叶えられないものか？」
「それは――」
　いや、それに関しては、叶うものだ。夢は願えば叶うもの――とまでは言わないけど、少なくとも叶うラインというのはある。
　そうだ、私の冒険に対する情熱が薄まっていっても、その時はまた、熱中できるものを探すことができれば。
　ロゼのお父さんが、ロゼの成長を願っていたように――。
　私は彼から視線をずらすと、対峙するダンテに剣を構えた。
「悪の帝王で、ブサメンで、それ自体は変えようがないことじゃない」
　私は主張した。
「本当に、ブサメンだからできないの？　違うでしょ。あなたはそうやって、何かに原

因を押しつけているだけだわ！」
　私のその言葉を聞いて、ダンテの表情が険しいものとなる。そして。
「綺麗事を！」
　憤慨しながら、その大きな剣で斬りつけてきた。
　私はそれを右へ左へと避けながら、剣を持って近付いていく。
「だったらなんで、田舎のヤンキーに彼女ができるの？　ニキビだらけの、格好悪いだけの彼らにだって、彼女はできているわ！」
「⁉」
　そう、地方ヤンキーにだって彼女はいる。別にカッコイイ奴にだけ、恋人がいるというわけではない。
「あなたはそうやって可愛そうな喪男を気取って、同情して欲しいだけだわ。そうすれば誰かが自分を救ってくれると、甘えてるだけだわ」
「違う！」
「だったら他人を巻き込まないで！」
「！」
　彼が私の言葉を聞いて一瞬怯んだ、その隙を見逃さなかった。
　私は一気に跳躍して、剣を振りかぶる。

「そういうのをっ――」
そして、指輪に魔力を装填し、力を溜め込ませた。
炎の魔力だ。彼を懺悔せしめる程の、大火力。赤い剣が炎の剣に姿を変える。極大まで膨れあがった、炎の剣。
――夢なんて持たなければ、私も楽だった？　そういうものを知らなければ、失っていく今日に恐怖を覚えなかった？
いいや、違う。
夢は新しく手に入るもの。
だから私は、それを求めて、ここへやって来たのよ！
夢見ることに――怯える必要なんて、ない！
「そういうのを、逆恨みって言うのよ！」
私は、限界まで燃え上がった炎の剣を横に一閃、大きくなぎ払った。
刀身をまとう炎が揺れ、宙で火の粉がダンスする。
「っ、ぎゃあああああああ！」
振るわれし刃は悪の帝王を横一文字。刀身に宿した真っ赤な渦は、その切り口から彼



の帝王の肉体へと浸食し、包み込んだ。
黒焦げになったダンテは、口を半開きに、ただ呆然と空を見上げていた。

「息子には俺がよ～く言い聞かせておくから」
私はダンテをやっつけて、ヌーパーちゃんはダンテが封印していた魔力を解放して、元の姿へ。ダンテの封印を解いてダンテになった……って、言葉にするとかなり変テコな感じだ。
元の姿に戻ったヌーパーちゃんは、息子であるダンテのそれによく似ていた。顔が三枚で肉食獣の下半身。
「その姿であんな綺麗なお嫁さんが貰えるんだから、それだけで十分夢があるわよねぇ」
と、つい漏らしてしまう私。
「ふん、あいつは甘えてるだけだ」
う～ん、なるほど。でも、実の両親がこんな勝ち組だから、彼も夢を見てしまったというのもあったんじゃないだろうか。
そういう部分も含めて夢と向き合わなければならないのだろうけど、だとすればやっぱり、ちょっと難しいような気もする。それに彼が言ってたことは、それはそれで間違

ってはいないことのように思えて……。
……って、ダメだダメだ。彼が言ってることの正否なんて関係ない。そういうのにかかわらず、私は彼の言うことを、認めるわけにはいかないんだ。
だってそういうものを認めちゃうと、人間良くない方にしか物事を考えなくなっちゃうような気がするもの。少なくとも、私はそんな気がする。
「そういえば、仮面をつけた妖精さんはどこに」
「仮面をつけた妖精？　ああ、あいつか。さぁ、どこに行ったんだろうな」
ダンテを倒し、喜びを分かちあおうと探してみたものの、彼の姿はいつの間にやら消えていた。ピンチを何度も助けて貰ったんだ、たくさんお礼がしたかったのだけど。
――まぁ、また会えるよね。お城で。だって、多分、あの人は――。

「ま、俺は息子を再教育するよ」
ヌーパーちゃんが溜息混じりに言った。いや、もうヌーパーちゃんってのはおかしいのか。やっつけたダンテは、また暫く悪の帝王の座を取り上げられてしまうらしい。そうするとこの幻想界の悪の帝王を名乗るのは、ヌーパーちゃん。つまり、ヌーパーちゃんこそが帝王ダンテなのである。

「うん、ちゃんと躾なきゃダメよ。次期王様なんだから、国のことを思える性格を養うべきだわ」

私はそんな悪の帝王の教育方針に同意する。あれれ、親の教育をうざったいと思ってた私なのに、親の子供の縛り付けに同意してしまうなんて——。

もしかしたらこの旅を通じて、少しは考え方が変わっちゃったってことかな。

「…………」

「なに？」

ヌーパーちゃんはそんな私の同意の声を聞いて、ジーっとこちらを、訝しげな表情で見つめてきて。

「……なにが言いたいの？　私が同意してたらおかしい？」

「他人のことを言う前に、って感じではある性格だよな」

「なによー、この世界を救い出してあげたっていうのに。世界の救世主になるほどに立派に育ってるわよ、私は」

冒険の動機はともかく、結果はいいじゃない！

「しかしこれにて、一件落着ってところかしら」

「そうだな、俺も元の姿に戻れたわけだし」

これでこの世界も平温になる、かしら？

「じゃあ、待たな！」

地上で、ヌーパーちゃん改め、ダンテちゃんとティターンさんが手を振る。

「待たね～！」

私は空から、その二人に向かって大きく手を振り返す。そして、彼等に背を向けると、世界の天井にあるという三次元世界への扉へ向かった。

遠く、小さくなっていく幻想界の風景。冒険してわかったこと、覚えたこと、勉強になったこと、色んなことが頭の中を駆け巡る。

特にドラマティックななにかがあったというわけでもないけど、この長くて楽しかった冒険譚を、私はきっと、忘れることはないだろう。

夢を取り戻し、光を取り戻した、この世界。

――――。

あれ。でも待って。

確かに私、事件は解決したけど、結局悪の帝王ってのはこの世界に存在しているわけで……まぁ、いいのかな、それでも。

息子の反抗期が起こるまではそれなりに世界は廻ってたみたいだし、少なくともそう

いうふうにダンテちゃんは説明していたし。

別に悪の帝王が住み着いている世界であっても、それでそれなりになんとかなっているのであれば、構わないような気がした。

エピローグ

——数日後。

天気のいい昼下がり、講堂に一人着座した私は、鉛筆を口に咥え退屈そうに教科書を捲る。

「私は王女、それは変えようのない事実なのよねぇ」

「ようやく自覚なさいましたか」

一介の冒険者の家庭に生まれていればなんて思っても、そんなことは叶わないのだと私は悟った。それは冒険の成果でもあったし、ダンテに言ってしまった説教ごとへの責任でもある。

私の冒険譚についてイヤになるほど聞かされていたオババは、何かを感じたのか、どこか嬉しそうだった。

「お嬢様もいい加減よいお歳でございます。いつまでも冒険冒険と言っておられず、今後のことを考えるべきなのです」

でも、私は思う。その事実は変えようがなくとも、それはそれとして受け止めながらも、夢は持ち続けて然るべきだ。夢は世界一の冒険家、これは今だって変わらない。そ

もそも、私が夢を持ち続けていたからこそ、あの世界は救われたのだ。
それに、目的意識のない人生なんて真っ平ご免よ。報われるか報われないかなんて、本当のところは二の次。恋だって、片思いの間が一番楽しいのだとどこかで聞いた。残念ながら私にはそのような経験がないけど、きっと、夢だって同じことではないだろうか？　夢だって、持ってる間が一番楽しいのかもしれない。
でも、どうせ持つからには、叶えないとね。
「わかったわ、オババ。私は逃げない。現実を受け入れる。自分が王女様だと自覚した上で、私はそれを合理的に辞める方法、もしくは王女様でありながら世界一の冒険家である方法を模索するわ」
そうだ、知ること、そして受け入れること。これが一番大事であると、この冒険で大きく学んだ。だから勉強は、実は大切だ。
でも、だからといって、毎日やるとお腹がいっぱいになってしまう事も確か。現に今の私、こんなものもう放ったらかしにして、遊びに行きたくてしょうがないもの。
そして、それから三分もしない内に、私はパタンと教科書を閉じた。
「というわけで、今日の勉強はこのくらいでおしまいね。本日はかなり忍耐したし、勉強したわ。もう十分」
起立し、講堂の入口を目掛ける。

「ちょ、こら、お嬢様！　お待ちなさいお嬢様！」
「待てないよーだ！」
出遅れたオババを振り払い、大理石の廊下へ。お城全図を脳内に起こすと、オババを振り払えそうなルートにラインをひき、そこを駆けるようにした。
そのまま、外の世界へ向かってダッシュ。
「お嬢様～！　お待ちください、お待ちくださいお嬢様～！」
残念ながらそれはできない。だって。
私はアテナ。ビクトリー国のお転婆王女、プリンセスアテナなのだから。





「ということで、王はまた嘆いておられます。冒険なんて、怪我でもしたら大変だし、なにより王女には似合わないと」
「アテナは本当にお転婆ねぇ」
アテナがまた座学から逃げたことを報告したイカルスに対し、王妃はカラカラと笑って応えた。大袈裟な王に比べ、やはり楽天的な王妃である。
しばらく穏やかに笑い続けた後、ふとその笑みを止めると、真面目な面持ちで空を仰

いでこう言った。

「イカルス、教育とはなんぞや？」

「は？」

王妃の突拍子もない質問に、イカルスは間の抜けた声をあげてしまう。

「夢を持つのは良いこと。その為に努力するのは良いこと。私達、親というものは、子供のそういったものをデリケートに、そして大事に扱うべき。でもね、大事に扱うっていうのは、触らずに放置するということじゃないの」

「先日のように、アテナ様の冒険のお手伝いをされると？」

だとすれば、また自分が駆り出されることもあるのかな、それは面倒だな。

そんなことを思いながら、イカルスは王妃に質問を続けた。

「いいえ、その逆よ。飴玉だけ与えていると子供はすぐに調子に乗る。大人というものは、感情ではなく、理性で子供に苦難を与えるべき存在なのよ。それこそ、先日の冒険のようにね」

自分の感情だけでアテナを抑圧しようとする王に対する皮肉を混ぜながら、王妃は独自の教育論を語る。

先代より、この国は外から迎え入れる王ではなく、王妃こそが実質的な支配をしてきた。王という御輿（みこし）の裏に隠れ、お飾りであるように振る舞いながら、政（まつりごと）を動かす。

あかずの扉と、その先に繋がる『幻想界』。あれは、女だからといって舐められないようにするため、根性と腕っ節を磨くために旧女王がつくりだした、女王教育プログラムだった。直接的な言葉ではなく、間接的に夢の大切さを説き、民衆がそれを持つことを良しとする、そういう思考を植え付けるための学習プログラム。その世界。
民草は目標を持つことで成長し、日々を生きる。それを忘れ、圧政を行うような王族にならないように、躾けるための教科書だったのだ。
いや、テストにも近いのかも知れない。同時に、単純に体力や能力を鍛え、座学で習った魔法を実践する機会でもあった。本来ならもう少し歳を取ってから行う内容でもあったし、だからこそ王は心配し、王女に助けを寄越したわけだが――。
「甘やかすだけが教育じゃない。私は親だからこそ、アテナに厳しくしなくてはね。彼女をしっかりと見張れるような付き人をつけて、たまにはお灸を据えてあげないと」
「付き人、ですか？」
「ええ、もう目星はついているの。歳も近いからアテナとはきっと良い友達にもなれるんじゃないかしら。あの子、年齢の近い友達が少ないし。多少は退屈も紛れて、座学をこなしてくれるというものでしょう」
なんだかんだでこの方は甘いところがあると、心の中で苦笑いしてしまうイカルス。どうせなら、萎縮するくらいの頃合いのよい大人の方が良いと思うのだが、やはり王様

も王妃様も、娘には甘い。
「それでいて、その気になればあの子でも勝てないような、腕っぷしの持ち主。魔法使いよ。――入って、ヘレネ」
「はい」
そうしてアテナの付き人としてやってきた彼女は、やっぱりアテナを躾けることなんてできなくて、やがてその冒険に巻き込まれてしまうことになってしまうのだが……。
――それはまた、別のお話。

おしまい

みのり文庫をお買い上げいただきありがとうございました。
この本を読んでのご意見ご感想をお待ちしております。

〒101-0024　東京都千代田区神田和泉町1-8-3　長谷川ビル1F
みのり文庫編集部「アテナ」係

アテナ

2009年8月15日　初版発行

著　者――七烏未奏 with 企画屋
発行人――河出岩夫
編集人――小寺盛巳
発行所――有限会社ハーヴェスト出版
〒101-0024　東京都千代田区神田和泉町1-8-3
長谷川ビル1F
TEL. 03-3865-7778
FAX. 03-3865-7779
発　売――株式会社星雲社
〒112-0012　東京都文京区大塚3-21-10
TEL. 03-3947-1021
FAX. 03-3947-1617
印　刷――中央精版印刷株式会社

ISBN978-4-434-13400-5

郵便はがき

切手を
お貼り
下さい

1010024

東京都千代田区神田和泉町1-8-3
長谷川ビル1F

有限会社　ハーヴェスト出版
みのり文庫編集部 行

住所　〒 TEL　　　(　　　)		
フリガナ 氏名	男・女	歳
職業・学年	お買い上げ書店名 市 店	

このたびは「みのり文庫」をご購読いただき有難うございます。
抽選で毎月5名の方に記念品をさしあげます。
尚、発表は発送をもってかえさせていただきます。

お買い上げの本のタイトル

『アテナ』

・内　容　　面白い　　まぁまぁ　　イマイチ
・イラスト　　GOOD　　まぁまぁ　　イマイチ

・本作の中で、どのキャラが気に入りましたか？
（　　　　　　　　　　　　　　　　）

・このジャンルの本はどのくらい読みますか？
毎月（　　）冊くらい　　ほとんど読まない

・本書のゲームソフトを
持っている　　知っているが持っていない　　知らない

・あなたのツボは？（複数可）
・純愛もの　・学園もの　・時代もの　・ＳＦ　・ロリータ　・妹もの　・お姉様もの
・メイド　・アンドロイド　・メガネっ娘　・ネコミミ　・看護婦　・巫女
・その他（　　　　　　　　　　　　　）

・お話に出てくる女性は何歳ぐらいがいいですか？
（　　　才～　　　才）

・「もっとこうして！」「ここが良かった！」などなど

ご協力ありがとうございます。

みのり文庫



みのり文庫ラインナップ（各巻640円+税）

七烏未奏 with企画屋
「アテナ」
藤浪智之/著
『てぃあてぃあ。　vol.1』
『てぃあてぃあ。　vol.2』
三浦洋晃/著
『φなる・あぷろーち２　～ Wedding Mirage ～』
水野隆志/著
『レッスルエンジェルス　サバイバー２　短編集』

《アンソロジーノベル》
海法紀光・高平鳴海・村田治 / 著
『女神異聞録デビルサバイバー　vol.1』

新刊情報（9月～）

『てぃあてぃあ。　vol.3』
『女神異聞録デビルサバイバー　vol.2』






ISBN978-4-434-13400-5
C0193 ¥640E

定価(本体640円+税)

発行/ハーヴェスト出版
発売/星雲社



七烏未奏（ななうみそう）
はじめまして、七烏未奏です。今回はアテナのノベル化ということで、嬉しくもあり、懐かしくもあり。世代的にはこちらよりもサイコソルジャーになってしまいますが、自分としてはどちらも好きです。やっぱりビキニアーマーはいいですよね。
ゲームシナリオライター集団「企画屋」所属。

企画屋ＨＰ
http://www.kikakuya.info/
ブログ
http://nanaumisou.blog112.fc2.com/

◎イラスト

ミヤスリサ
こんにちは、ミヤスリサです。アテナの赤ビキニをお仕事で描ける日がくるなんて……！
ありがとうございました！
ＨＰ
http://www.kit.hi-ho.ne.jp/dnalab/

カバー　：ミヤスリサ

みのり文庫

ATHENA アテナ

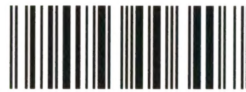
七烏未奏 with 企画屋
イラスト：ミヤスリサ

みのり文庫 創刊第二弾
伝説のヒロイン降臨
懐い？

《みのりさん》
イラスト：ひつき夜宵

みのり文庫
For Classic
N-01-01
アテナ
七烏未奏 with 企画屋
ハーヴェスト出版
640


9784434134005


1920193006407

ISBN978-4-434-13400-5
C0193 ¥640E
定価（本体640円+税）
発行/ハーヴェスト出版
発売/星雲社





みのり文庫ラインナップ（各巻640円+税）
七烏未奏 with 企画屋
　「アテナ」
藤浪智之/著
　『てぃあてぃあ。　vol.1』
　『てぃあてぃあ。　vol.2』
三浦洋晃/著
　『φなる・あぷろーち２　～Wedding Mirage～』
水野隆志/著
　『レッスルエンジェルス　サバイバー２　短編集』

《アンソロジーノベル》
海法紀光・高平鳴海・村田治 / 著
　『女神異聞録デビルサバイバー　vol.1』

新刊情報（9月～）
　『てぃあてぃあ。　vol.3』
　『女神異聞録デビルサバイバー　vol.2』



最新情報は
ハーヴェスト出版
ホームページで！
//www.harvest-inc.jp



カバー ：ミヤスリサ



ハーヴェスト出版
640





みのり文庫
For Classic
N-01-01

アテナ

七烏未奏

wぎ企画屋



ハーヴェスト出版
640

みのり文庫
For Classic
N-01-01

アテナ

七鳥未奏

い～ずみ企画屋



ハーヴェスト出版
640